喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）

中増遺跡Ⅰ

二〇一五年三月　喜界町教育委員会

喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）

－ 畑地帯総合整備事業（担い手育成型）手久津久地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

中増遺跡Ⅰ

2015年3月

喜界町教育委員会

序　　文

この報告書は，畑地帯総合整備事業（担い手育成型）手久津久地区に伴い，平成23～24年度に実施した中増遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。

本遺跡では，中世と考えられる掘立柱建物跡や，青磁や金が施された銅製品などが見つかりました。手久津久地区ではこの遺跡のほか，崩リ遺跡・川尻遺跡・川寺遺跡の発掘調査を行っており，縄文時代や古墳～古代，中世の貴重な資料が見つかっています。これらの調査は，これまでに行われた城久遺跡群などの調査成果と合わせ，喜界島の歴史的変遷を明らかにする貴重な成果になると考えられます。

今回の発掘調査報告書によって，多くの方が中増遺跡について御理解いただくとともに，今後とも広く文化財の保護に御理解と御協力をいただくことができましたら幸いです。

最後に，発掘調査や整理作業に従事していただいた町民の皆様はじめ，発掘調査から報告書作成にいたるまで御指導・御協力いただきました鹿児島県教育庁文化財課，県立埋蔵文化財センター，御指導並びに玉稿を賜りました諸先生方，調査に御配慮くださいました大島支庁喜界事務所農村整備係，その他関係機関の方々に対し，深く感謝の意を表すとともにお礼申し上げます。

平成27年３月

喜界町教育委員会
教育長　積山　泰夫

例　　言

1　本報告書は，畑地帯総合整備事業（担い手育成型）手久津久地区に伴う中増遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は平成23年度～24年度に喜界町教育委員会が鹿児島県農政部農地整備課（大島支庁喜界事務所農村整備係）の受託事業として，鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・支援のもと実施した。

3　整理作業及び報告書作成は，喜界町教育委員会が平成25・26年度事業として鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・支援のもと実施した。

4　本書に用いたレベル数値は絶対海抜高による。

5　遺構・遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に提示してある。遺構は20分の1もしくは60分の1，遺物は3分の1を基本とする。

6　遺物番号は全て通し番号とし，本文及び挿図，図版番号とも一致する。

7　貿易陶磁器については，アジア水中考古学研究所理事田中克子氏の指導のもと分類を行った。また，次の論文等を参考にした。『大宰府条坊跡ⅩⅤ』（太宰府市教育委員会 2000），「沖縄における貿易陶磁研究」（瀬戸ほか 2007），「14～16世紀の白磁の形式分類と編年」（森田 1982），「13～14世紀の琉球と福建」（木下編 2009）

8　遺物の実測・トレースは，整理作業員の協力のもと松原信之・安武憲史が行った。遺物写真撮影は，野﨑拓司が行った。

9　第Ⅳ章自然科学分析については，札幌大学教授高宮広土氏，早稲田大学講師樋泉岳二氏に玉稿いただいた。

10　発掘調査・整理作業（当時）にあたっては，次の方々に御指導・御助言をいただいた。記して感謝申し上げます。
東京大学総合研究博物館特別研究員覚張隆史氏，奈良大学教授坂井秀弥氏，（独法）国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部考古第一研究室小池伸彦氏，愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター長村上恭通氏，アジア水中考古学研究所理事田中克子氏，西南学院大学教授高倉洋彰氏，熊本大学名誉教授甲元眞之氏，熊本大学教授木下尚子氏，鹿児島大学名誉教授西中川駿氏，ラ・サール高校教諭永山修一氏，奄美市立奄美博物館館長中山清美氏，琉球大学教授池田榮史氏，沖縄県教育庁文化財課主任専門員山本正昭氏

11　本書の執筆，編集は松原が担当した。

12　出土した遺物は喜界町埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する計画である。

第１図　中増遺跡位置図

目　　次

序文
例言
遺跡位置図

第Ⅰ章　調査の経過
第１節　発掘調査に至るまでの経緯……1
第２節　調査の組織……1
第３節　調査の経過……3

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境
第１節　地理的環境……5
第２節　歴史的環境……5

第Ⅲ章　調査の方法と成果
第１節　調査の概要……9
第２節　発見された遺構・遺物…… 12
１　Ａ地区 …… 12
（１）掘立柱建物跡 …… 13
（２）土坑 …… 25
（３）焼土跡 …… 34
（４）溝状遺構 …… 38
（５）ピット出土遺物 …… 42
２　Ｂ地区 …… 44
（１）掘立柱建物跡 …… 45
（２）焼土跡 …… 50
（３）包含層出土遺物 …… 50

第Ⅳ章　自然科学分析
第１節　中増遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定（AMS 法）及び樹種同定 …… 53
第２節　中増遺跡出土の植物遺体分析…… 57
第３節　中増遺跡の平成 23 ～ 24 年度調査で採取された脊椎動物遺体…… 59

第Ⅴ章　まとめ…… 71

基礎資料…… 74

写真図版…… 87

報告書抄録…… 99

挿 図 目 次

第１図　中増遺跡位置図
第２図　主な島内遺跡位置図…… 7
第３図　先行トレンチ位置図…… 9
第４図　A 地区土層断面図 ……10
第５図　B 地区土層断面図……10
第６図　中増遺跡発掘調査位置図……11
第７図　中増遺跡　A 地区遺構配置図 ……12
第８図　掘立柱建物跡１号……13
第９図　掘立柱建物跡１号出土遺物……13
第 10 図　掘立柱建物跡２号 ……14
第 11 図　掘立柱建物跡３号 ……15
第 12 図　掘立柱建物跡２号出土遺物 ……16
第 13 図　掘立柱建物跡３号出土遺物 ……16
第 14 図　掘立柱建物跡４号 ……17
第 15 図　掘立柱建物跡４号出土遺物 ……17
第 16 図　掘立柱建物跡５号 ……18
第 17 図　掘立柱建物跡６号 ……19
第 18 図　掘立柱建物跡７号 ……20
第 19 図　掘立柱建物跡８号 ……21
第 20 図　掘立柱建物跡８号出土遺物 ……21
第 21 図　掘立柱建物跡９号 ……22
第 22 図　掘立柱建物跡９号出土遺物 ……23
第 23 図　掘立柱建物跡 10 号……24
第 24 図　土坑１号 ……25
第 25 図　土坑１号出土遺物 ……26
第 26 図　土坑２号 ……26
第 27 図　土坑３号出土遺物 ……27
第 28 図　土坑３号 ……27
第 29 図　土坑４号 ……28
第 30 図　土坑４号出土遺物 ……28
第 31 図　土坑５号（左）・土坑６号（右）……29
第 32 図　土坑６号出土遺物 ……29
第 33 図　土坑７号 ……30
第 34 図　土坑７号出土遺物 ……30
第 35 図　土坑８号 ……31
第 36 図　土坑９号 ……32
第 37 図　土坑９号出土遺物 ……33
第 38 図　焼土跡１号 ……34
第 39 図　焼土跡１号出土遺物 ……34
第 40 図　焼土跡２号出土遺物 ……35
第 41 図　焼土跡２号 ……35
第 42 図　焼土跡３号出土遺物 ……35
第 43 図　焼土跡３号 ……35
第 44 図　焼土跡４号出土遺物 ……36
第 45 図　焼土跡４号 ……36
第 46 図　焼土跡５号 ……36
第 47 図　焼土跡６号出土遺物 ……37
第 48 図　焼土跡６号 ……37
第 49 図　焼土跡７号出土遺物 ……37
第 50 図　焼土跡７号 ……37
第 51 図　焼土跡８号 ……38
第 52 図　焼土跡９号 ……38
第 53 図　溝状遺構１号 ……39
第 54 図　溝状遺構１号出土遺物 ……39
第 55 図　溝状遺構２号 ……40
第 56 図　溝状遺構２号出土遺物 ……41
第 57 図　A 地区ピット内出土遺物（１） ……42
第 58 図　A 地区ピット内出土遺物（２） ……43
第 59 図　中増遺跡　B 地区遺構配置図 ……44
第 60 図　掘立柱建物跡 11 号……45
第 61 図　掘立柱建物跡 11 号出土遺物……45
第 62 図　掘立柱建物跡 12 号……46
第 63 図　掘立柱建物跡 13 号……47
第 64 図　掘立柱建物跡 14 号出土遺物……47
第 65 図　掘立柱建物跡 14 号……48
第 66 図　掘立柱建物 15 号……49
第 67 図　焼土跡 10 号……50
第 68 図　焼土跡 11 号……50
第 69 図　B 地区　包含層内出土遺物 ……51
第 70 図　暦年較正曲線図 ……54
第 71 図　中増遺跡出土の植物遺体 ……58
第 72 図　中増遺跡脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の組成（ネズミ科を除く） ……66
第 73 図　A 地区詳細遺構配置図（１） ……75
第 74 図　A 地区詳細遺構配置図（２） ……76
第 75 図　A 地区詳細遺構配置図（３） ……77
第 76 図　A 地区詳細遺構配置図（４） ……78
第 77 図　B 地区詳細遺構配置図（１）……79
第 78 図　B 地区詳細遺構配置図（２）……80
第 79 図　B 地区詳細遺構配置図（３）……81
第 80 図　B 地区詳細遺構配置図（４）……82
第 81 図　B 地区詳細遺構配置図（５）……83
第 82 図　B 地区詳細遺構配置図（６）……84

表 目 次

第１表　主な鳥内遺跡地名表…… 6
第２表　掘立柱建物跡１号計測表……13
第３表　掘立柱建物跡１号出土遺物観察表……13
第４表　掘立柱建物跡２号計測表……14
第５表　掘立柱建物跡３号計測表……15
第６表　掘立柱建物跡２号出土遺物観察表……16
第７表　掘立柱建物跡３号出土遺物観察表……16
第８表　掘立柱建物跡４号計測表……17
第９表　掘立柱建物跡４号出土遺物観察表……17
第 10 表　掘立柱建物跡５号計測表 ……18
第 11 表　掘立柱建物跡６号計測表 ……19
第 12 表　掘立柱建物跡７号計測表 ……20
第 13 表　掘立柱建物跡８号計測表 ……21
第 14 表　掘立柱建物跡８号出土遺物観察表 ……21
第 15 表　掘立柱建物跡９号計測表 ……22
第 16 表　掘立柱建物跡９号出土遺物観察表 ……23
第 17 表　掘立柱建物跡 10 号計測表 ……24
第 18 表　土坑１号出土遺物観察表 ……26
第 19 表　土坑３号出土遺物観察表 ……27
第 20 表　土坑４号出土遺物観察表 ……31
第 21 表　土坑６号出土遺物観察表 ……31
第 22 表　土坑７号出土遺物観察表 ……31
第 23 表　土坑９号出土遺物観察表 ……33
第 24 表　焼土跡１号出土遺物観察表 ……34
第 25 表　焼土跡２号出土遺物観察表 ……36
第 26 表　焼土跡３号出土遺物観察表 ……36
第 27 表　焼土跡４号出土遺物観察表 ……36
第 28 表　焼土跡６号出土遺物観察表 ……37
第 29 表　焼土跡７号出土遺物観察表 ……37
第 30 表　溝状遺構１号出土遺物観察表 ……41
第 31 表　溝状遺構２号出土遺物観察表 ……41
第 32 表　A 地区ピット出土遺物観察表（１） ……43
第 33 表　A 地区ピット出土遺物観察表（２） ……43
第 34 表　掘立柱建物跡 11 号計測表……45
第 35 表　掘立柱建物跡 11 号出土遺物観察表……45
第 36 表　掘立柱建物跡 12 号計測表……46
第 37 表　掘立柱建物跡 13 号計測表……47
第 38 表　掘立柱建物跡 13 号出土遺物観察表……47
第 39 表　掘立柱建物跡 14 号計測表……48
第 40 表　掘立柱建物跡 15 号計測表……49
第 41 表　B 地区包含層内出土遺物観察表 ……51
第 42 表　放射性炭素年代測定・暦年較正・樹種同定結果 ……54
第 43 表　中増遺跡出土の植物遺体 ……58
第 44 表　中増遺跡脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の同定結果（１） ……62
第 45 表　中増遺跡脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の同定結果（２） ……63
第 46 表　中増遺跡脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の同定結果（３） ……64
第 47 表　中増遺跡脊椎動物遺体（水洗選別資料）の同定結果 ……64
第 48 表　中増遺跡脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の同定結果 ……65
第 49 表　中増遺跡出土遺物一覧 ……73
第 50 表　ピット出土遺物（１） ……74
第 51 表　ピット出土遺物（２） ……74

図 版 目 次

図版１ ……87
中増遺跡空中写真

図版２ ……88
A 地区空中写真
A 地区土層堆積状況
A 地区遺構検出状況

図版３ ……89
掘立柱建物跡１号
掘立柱建物跡２号
掘立柱建物跡３号
掘立柱建物跡６号
土坑１号検出状況
土坑１号土層堆積状況
土坑４号土層堆積状況
土坑４号獣骨出土状況

図版４ ……90
土坑７号検出状況
土坑７号土層堆積状況
土坑８号土層堆積状況
土坑９号土層堆積状況
土坑９号獣骨等出土状況
焼土跡１号土層堆積状況
焼土跡２号土層堆積状況

図版５ ……91
焼土跡４号半裁状況
焼土跡４号銅製品出土状況
焼土跡８号検出状況
焼土跡９号土層堆積状況
溝状遺構１号検出状況
溝状遺構１号土層堆積状況

図版６ ……92
溝状遺構２号検出状況（１）
溝状遺構２号検出状況（２）
溝状遺構２号土層堆積状況
溝状遺構２号完掘状況
Ｐ 51 土層堆積状況
Ｐ 72 土層堆積状況
Ｐ 91 土層堆積状況
作業風景

図版７ ……93
B 地区空中写真
B 地区土層堆積状況
焼土跡 10 号検出状況
焼土跡 10 号土層堆積状況
焼土跡 11 号検出状況

図版８ ……94
A 地区掘立柱建物跡出土遺物

図版９ ……95
A 地区土坑出土遺物

図版 10 ……96
A 地区焼土跡出土遺物
A 地区溝状遺構１号出土遺物

図版 11 ……97
A 地区溝状遺構２号出土遺物
A 地区ピット出土遺物（１）

図版 12 ……98
A 地区ピット出土遺物（２）

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県農政部農地整備課（大島支庁喜界事務所農村整備係，以下県農政部）は，大島郡喜界町手久津久地内において，畑地帯総合整備事業（担い手育成型）手久津久地区を計画し事業区域内の埋蔵文化財の有無について，喜界町教育委員会（以下，町教育委員会）に照会した。

これを受けて，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，県埋蔵文化財センター）と町教育委員会が平成19・21年度に分布調査を実施したところ，事業区域内に５つの遺物散布地（中増遺跡・崩り遺跡・川尻遺跡・川寺遺跡・水洗遺跡※１）が確認された。

この分布調査の結果をもとに，県農政部，鹿児島県教育庁文化財課（以下，県文化財課），町教育委員会は，埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行った結果，事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下，確認調査）を実施することとなった。中増遺跡の確認調査は，町教育委員会が調査主体となり，平成21年６月～11月に実施した。調査の結果，約23,500㎡の範囲で古代・中世の時期のものと考えられる遺構・遺物を確認した。

この結果をもとに，再度県農政部，県文化財課，町教育委員会は，埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行い，約2,300㎡を盛土工法によって保存し，残りの約21,200㎡は盛土による保存が困難であることから記録保存を目的とした本調査を実施することとなった。

本調査は，町教育委員会が調査主体となり，県埋蔵文化財センターの支援を受け実施した。中増遺跡は，海岸段丘によって高低差の異なるいくつかの段丘に広がっており，平成23年８月～平成24年10月までの調査では遺跡の中で１番低い段丘（以下A地区）及びそれに隣接している２番目に低い段丘（以下B地区）の本調査を行った。遺跡のおおよそ半分にあたる 9,300㎡を調査し，本報告書を刊行することとなった。残りの約11,700㎡は平成26年４月より調査を行っている。

第２節　調査の組織

平成21年度　確認調査

事業主体者　鹿児島県農政部農地整備課
（大島支庁喜界事務所農村整備係）
調査等主体者　喜界町教育委員会
企画・調整　喜界町教育委員会生涯学習課
調査等責任者
喜界町教育委員会　教育長　晴永　清道
調査等企画者
喜界町教育委員会生涯学習課長　益　一幸
〃　課長補佐　岩松　利和
調査等担当者
喜界町教育委員会生涯学習課
埋蔵文化財係長　澄田　直敏
喜界町教育委員会生涯学習課主事　野﨑　拓司
〃　埋蔵文化財調査員　後藤　法宣
事務担当者
喜界町教育委員会生涯学習課主査　竹内　功
調査等指導者
鹿児島大学農学部名誉教授　西中川　駿
鹿児島県教育庁文化財課
文化財主事　川口　雅之

平成23年度　本調査

事業主体者　鹿児島県農政部農地整備課
（大島支庁喜界事務所農村整備係）
調査等主体者　喜界町教育委員会
企画・調整　喜界町教育委員会生涯学習課
調査等責任者
喜界町教育委員会　教育長　晴永　清道
調査等企画者
喜界町教育委員会生涯学習課長　吉本　実
〃　課長補佐　岩松　利和
調査等担当者
喜界町教育委員会生涯学習課
埋蔵文化財係長　澄田　直敏
喜界町教育委員会生涯学習課主事　野﨑　拓司
〃　埋蔵文化財調査員　宮城　良真
〃　埋蔵文化財調査員　亀島　慎吾
事務担当者
喜界町教育委員会生涯学習課主査　竹内　功

※1：本洗遺跡は，川寺遺跡に隣接している中世の時期と考える遺跡であったが，平成23年度に範囲・名称変更を行い川寺遺跡の一部として扱えることとなった。

調査指導者
熊本大学教授　木下　尚子
奄美市立奄美博物館館長　中山　清美
琉球大学教授　池田　榮史
鹿児島県教育庁文化財課
文化財主事　中村　和美
鹿児島県立埋蔵文化財センター
第一調査課長　堂込　秀人
鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　長野　真一
鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財研究員　岩永　勇亮

平成24年度　本調査
事業主体者　鹿児島県農政部農地整備課
（大島支庁喜界事務所農村整備係）
調査等主体者　喜界町教育委員会
企画・調整　喜界町教育委員会生涯学習課
調査等責任者
喜界町教育委員会　教育長　晴永　清道
調査等企画者
喜界町教育委員会生涯学習課長　吉本　実
〃　課長補佐　岩松　利和
調査等担当者
喜界町教育委員会生涯学習課
埋蔵文化財係長　澄田　直敏
喜界町教育委員会生涯学習課主事　野崎　拓司
〃　松原　信之
事務担当者
喜界町教育委員会生涯学習課主査　竹内　功
調査等指導者
東京大学総合研究博物館研究部
放射性炭素年代測定室特別研究員　覚張　隆史
奈良大学教授　坂井　秀弥
早稲田大学非常勤講師　樋泉　岳二
愛媛大学東アジア古代鉄文化
研究センター長　村上　恭通
琉球大学教授　池田　榮史
鹿児島県教育庁文化財課
文化財主事　馬籠　亮道
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　寺田　仁志
鹿児島県立埋蔵文化財センター
第一調査課長　堂込　秀人
鹿児島県立埋蔵文化財センター
第二調査課長　冨田　逸郎
鹿児島県立埋蔵文化財センター
第一調査係長　東　和幸
鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　中村　幸一郎
鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　有馬　孝一
鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財研究員　川口　雅之
鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財研究員　岩永　勇亮

平成25年度　整理作業
事業主体者　鹿児島県農政部農地整備課
（大島支庁喜界事務所農村整備係）
調査等主体者　喜界町教育委員会
企画・調整　喜界町教育委員会生涯学習課
調査等責任者
喜界町教育委員会　教育長
（～1月5日）　晴永　清道
喜界町教育委員会　教育長
（1月6日～）　積山　泰夫
調査等企画者
喜界町教育委員会生涯学習課長　吉本　実
〃　課長補佐　岩松　利和
調査等担当者
喜界町教育委員会生涯学習課
主幹兼埋蔵文化財係長　澄田　直敏
喜界町教育委員会生涯学習課主事　野崎　拓司
〃　生涯学習課主事　松原　信之
〃　生涯学習課主事　早田　晴樹
〃　埋蔵文化財調査員　岩元さつき
〃　埋蔵文化財調査員　安武　憲史
〃　埋蔵文化財調査員　安栖　祐樹
〃　埋蔵文化財調査員　横山　幸平
〃　埋蔵文化財調査員　照屋　真澄
事務担当者
喜界町教育委員会生涯学習課
主幹兼埋蔵文化財係長　澄田　直敏
調査等指導者
札幌大学教授　高宮　広土
大学共同利用機関法人
人間文化研究機構理事　石上　英一
早稲田大学非常勤講師　樋泉　岳二
（独法）国立文化財機構奈良文化財研究所
都城発掘調査部考古第一研究室長　小池　伸彦

愛媛大学東アジア古代鉄文化	
研究センター長	村上　恭通
西南学院大学教授	高倉　洋彰
熊本大学教授	甲元　眞之
ラ・サール高校教諭	永山　修一
沖縄県教育庁文化財課	
主任専門員	山本　正昭
鹿児島県立埋蔵文化財センター	
所長	井ノ上秀文
鹿児島県立埋蔵文化財センター	
調査課長	堂込　秀人
鹿児島県立埋蔵文化財センター	
第一調査係長	東　　和幸
鹿児島県立埋蔵文化財センター	
第二調査係長	大久保浩二
鹿児島県立埋蔵文化財センター	
文化財研究員	今村　結記

平成26年度　整理作業・報告書刊行

事業主体者　鹿児島県農政部農地整備課
（大島支庁喜界事務所農村整備係）

調査等主体者	喜界町教育委員会
企画・調整	喜界町教育委員会生涯学習課
調査等責任者	
喜界町教育委員会　教育長	積山　泰夫
調査等企画者	
喜界町教育委員会生涯学習課長	岩松　利和
〃　課長補佐	中山　佳也
調査等担当者	
喜界町埋蔵文化財センター	
主幹兼埋蔵文化財係長	澄田　直敏
喜界町埋蔵文化財センター主事	野崎　拓司
〃　主事	松原　信之
〃　主事	早田　晴樹
〃　埋蔵文化財調査員	岩元さつき
〃　埋蔵文化財調査員	安武　恵史
〃　埋蔵文化財調査員	安栖　祐樹
〃　埋蔵文化財調査員	照屋　真澄
事務担当者	
喜界町埋蔵文化財センター	
主幹兼埋蔵文化財係長	澄田　直敏
調査等指導者	
早稲田大学非常勤講師	樋泉　岳二
愛媛大学東アジア古代鉄文化	
研究センター長	村上　恭通
アジア水中考古学研究所	
理事	田中　克子
熊本大学名誉教授	甲元　眞之
鹿児島県教育庁文化財課	
文化財主事	馬籠　亮道
鹿児島県教育庁文化財課	
文化財主事	黒川　忠広
鹿児島県立埋蔵文化財センター	
第一調査係長	大久保浩二
鹿児島県立埋蔵文化財センター	
文化財研究員	今村　結記

第３節　中増遺跡調査の経過

１　確認調査（平成21年度）

平成21年６月～11月まで喜界町教育委員会が調査主体となって確認調査を実施した。調査は３ｍ×６ｍのトレンチを基本とした。その結果，複数のトレンチで中世と考えられる遺構・遺物を確認し，遺構・遺物の出土状況から約23,500㎡の範囲に遺跡が残存していると判断した。

２　本調査（平成23～24年度）

平成21年度の確認調査の結果を受けて平成23年８月～３月，平成24年４月～10月まで実施した。

調査では，まずA地区・B地区内に10ｍ×10ｍのグリッドをそれぞれ任意の方向で設定し実施した（第７図・第59図）。A地区グリッドは東側から西側方向に 201～206 とし，それに直行する北側から南側方向へA～Cと呼称した。B地区グリッドは東側から西側方向に 301～307 とし，それに直行する北側から南方向へA～Fと呼称した。

発掘調査は，確認調査で得られた資料をもとに，遺構検出面直上まで（一部の遺物包含層が残る部分はその直上まで）重機により除去し，その後，人力で遺構の検出作業を行った。

以下，調査の経過については日誌抄にて記載する。

平成23年度

８月　調査開始。機材運搬・伐採などの環境整備を行い，試掘トレンチ調査を行う。重機によるB地区の表土剥ぎ，グリッドの設定，杭打ちなどを行う。

９月　遺構検出，包含層掘り下げ，遺構掘り下げ，1／20遺構配置図作成などを行う。

10月　遺構掘り下げ，遺構の写真撮影，1／20遺構配置図作成，1/10遺構個別図面作成などを行う。

10月13・14日熊本大学教授木下尚子氏による発掘調査現地指導。

10月29・30日奄美市立奄美博物館館長中山清美氏による発掘調査現地指導。
11月～12月　遺構掘り下げ，遺構の写真撮影，1／20遺構配置図作成，1/10遺構個別図面作成などを引き続き行う。
12月3・4日琉球大学教授池田榮史氏による発掘調査現地指導。
1月～2月　遺構掘り下げ，遺構の写真撮影，1/ 20遺構配置図作成，1/10遺構個別図面作成などを行う。
3月　包含層掘り下げ，遺構検出，遺構の写真撮影，1/ 20遺構配置図作成，1/10遺構個別図面作成などを行う。
3月23日機材撤収を行う。B地区調査終了。

平成24年度
4月　A地区調査開始。機材運搬などの環境整備，重機による表土剥ぎ，グリッドの設定，杭打ちを行う。
5月～6月　遺構検出，包含層掘り下げ，遺構の写真撮影，遺構掘り下げ，1／20遺構配置図作成，1／10遺構個別図面作成などを行う。
6月29・30日奈良大学教授坂井秀弥氏による発掘調査現地指導。
6月30日～7月2日東京大学総合研究博物館特別研究員覚張隆史氏による発掘調査現地指導。
7月～8月　包含層掘り下げ，遺構検出，遺構の写真撮影，遺構掘り下げ，1／20遺構配置図作成，1／10遺構個別図面作成などを引き続き行う。
7月8～10日愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター長村上恭通氏による発掘調査現地指導。
9月　包含層掘り下げ，遺構検出，遺構の写真撮影，遺構掘り下げ，1／20遺構配置図作成，1／10遺構個別図面作成などを行う。
9月14日遺跡の空撮を行う。
10月　1／20遺構配置図作成，1/ 10遺構個別図面作成などを行う。
10月15日機材撤収。A地区調査終了。

3　整理作業・報告書刊行（平成25～26年度）

整理作業は，平成25年～26年度に炭化物などの科学分析，出土獣骨分析土壌サンプルのフローテーション及び出土植物遺体分析，出土遺物の注記・接合・拓本，実測・図面整理・トレースなどの作業を行い，報告書を刊行した。

整理作業風景

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

喜界島は，鹿児島県本土から南へ約380km，奄美大島から東へ約25kmの北緯28度19分，東経130度線上の太平洋と東シナ海の洋上に浮かぶ島である。1島で 1町をなし，北東から南西方向を長軸に 14km，北東部から南西部に向けて次第に島幅を広げ最大幅6.5km，周囲48.6km，面積56.9km²の島である。

概して平坦な隆起珊瑚礁の島で，海岸段丘が形成されている。島内での最高所は，中央東側にある百之台で標高は 211mである。この百之台を中心に北西側へは緩やかに傾斜し，広い段丘地形が見られる。これに対して南東部は急峻な 200mあまりの崖が切り立ち，海岸線に沿ってわずかな平坦地が見られるだけである。島の大部分が多孔質のサンゴ礁石灰岩に厚く覆われているため，河川の発達は乏しく用水のほとんどは地下水に依存している。

海岸線は裾礁からなっており，砂浜が広がる場所は少なく，また，港として利用できる場所も限られている。代表的な湊としては，湾，早町，志戸桶，小野津があり，各集落では後背地に砂丘が形成されている。砂丘上では，縄文時代から近世までの遺物が採取でき，古くから人々の生活が営まれていたことをうかがい知ることができる。

気候は亜熱帯気候で，年間を通じて温暖である。昭和41年～平成7年までの統計では，年平均気温は 22.4度で，年間降雨量は 2230mmである。島にはガジュマルをはじめとする亜熱帯植物が分布しているが，現在，段丘上のほとんどが開墾され，さとうきび畑や牧草地などに利用されている。亜熱帯広葉樹林は段丘崖の部分でよく観察できる。

本島の基盤をなしているのは，未凝固のシルト～泥層および凝灰質砂泥の互層から構成される新生代新第三紀鮮新世の島尻層で，琉球石灰岩や隆起サンゴ石灰岩，砂丘などが上層を形成している。石灰岩の上には風化土である暗赤褐色土壌（マージ）が島の大部分を覆っている。

中地遺跡は，喜界島南西部に位置する手久津久集落付近にあり，標高20m前後の海岸段丘上に立地している。現在の海岸までは約500mの距離である。遺跡周辺には河川はないが，近くに湧水点がある。

第２節　歴史的環境

喜界島における考古学的研究は，戦前は昭和６年の重野豊吉による荒木貝塚の発見に始まり，三宅宗悦による湾貝塚・手久津久貝塚の報告がある。戦後においては，昭和30年代に九学会連共同調査委員会考古学班による分布調査が行われ，荒木農道遺跡，荒木小学校遺跡，湾天神貝塚，伊実久嶽島神社貝塚，七城などが紹介されている。

島内で一番古い遺跡は縄文時代のものであり，大多数の遺跡が古代・中世期に属している。また，中世における源氏や平家にまつわる伝承が数多く残っていることも１つの特徴である。

以下，島内の主な遺跡を時代ごとに記述したい。

１　縄文時代

島内でもっとも古い遺跡は，昭和47年に発見された総合グラウンド遺跡である。遺跡からは面縄東洞式や嘉徳Ⅰ式・嘉徳Ⅱ式など，縄文時代後期を示す遺物が主に発見されていたが，平成13年に総合グラウンドから約300m南にある砂を採取した跡地の斜面に 3層の貝層が露出し，その下層からはほぼ完形に近い２つの磨弾型をした土器が見つかった。

土器に付着していた炭化物から求めた放射性炭素年代値が6998±32yr.B.Pという数値であり，沖縄貝塚時代早期に相当する可能性が指摘された。土器の見つかった貝層は，面縄東洞式などを出土していた砂丘よりさらに内陸側にあり，砂丘の形成上からも古い可能性が高く，遺跡の範囲確認と共に他の遺物などのさらなる検討が必要となってきている。

また，昭和27年に県立喜界高等学校校庭拡張工事に伴って出土した土器は，赤連系土器と名付けられ，縄文時代前期と考えられている。

縄文時代後・晩期の遺跡としては，昭和61年に熊本大学による発掘調査で面縄西洞式や喜念Ⅰ式などの土器と共に竪穴住居跡11基が確認されたハンタ遺跡や，平成16年に喜界町役場新庁舎工事に伴って発掘調査された見付山遺跡などがある。

現在発掘調査中である崩リ遺跡や中塩遺跡では，面縄西洞式や犬田布式と考えられる土器とともに竪穴状遺構が十数基見つかっている。また，川尻遺跡では，この時期の大型円形土坑が40基程まとまって見つかっている。

２　弥生時代～古墳時代並行期

弥生時代の遺跡は，発掘調査は行われていないが分布調査などで荒木小学校遺跡などの遺跡が確認されている。

古墳時代並行期の遺跡は，昭和61年度に鹿児島県教育庁文化課による先山遺跡の発掘調査が実施され，兼久式土器や螺蓋製貝斧などが報告されている。また，現在発掘調査中である川尻遺跡では，兼久式土器とともにヤコウガイやチョウセンサザエなどの貝がまとまって見つかっている。

その他の古墳時代並行期の遺跡として中里貝塚などの約20遺跡が確認されている。

3　古代・中世

古代・中世の遺跡は，昭和63年に島中Ｂ遺跡，平成4年にオン畑・巻畑Ｂ・巻畑Ｃ遺跡，平成5年に前ヤ遺跡，平成６年に提り遺跡，平成18年に和早地遺跡などの発掘調査が実施されている。

平成14～20年にかけて調査が行われた城久遺跡群（山田中西遺跡・山田半田遺跡・半田口遺跡・小ハネ遺跡・前畑遺跡・大ウフ遺跡・半田遺跡・赤連遺跡）では，450棟を超える掘立柱建物跡や製鉄・鍛冶関連遺構，土坑墓などが見つかった。出土遺物は，越州窯系青磁や白磁，朝鮮系無釉陶器，滑石製石鍋といった島外産の遺物がほとんどである。

平成21年度からは，県営畑地帯総合整備事業（手久津久地区）に伴う調査を行っており，本報告書の中増遺跡のほか，崩り遺跡，川尻遺跡，川寺遺跡においてこの時期の掘立柱建物跡や土坑墓などを確認している。これらは，城久遺跡群の前後段階に相当する遺跡群であり，城久遺跡群の評価や喜界島の歴史的変遷を考える上で重要であると考えられる。

参考・引用文献

太田陽子　1978『琉球列島喜界島の完新世海成段丘』　地理学評論

貝塚爽平ほか編　「4．西南諸島」『日本の地形』

鹿児島県埋蔵文化財センター　2008　『荒木貝塚・和早地遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘報告書（119）

河口貞徳　1974「奄美における土器文化の編年について」『琉大史学』第6号　奄美特集号（2）（奄美考古学会第9号再録）

喜界町　2000　『喜界町誌』

喜界町教育委員会　1987　『先山遺跡』　喜界町埋蔵文化財発掘報告書（1）

喜界町教育委員会　1987　『ハンタ遺跡』　喜界町埋蔵文化財発掘報告書（2）

喜界町教育委員会　1989　『島中Ｂ遺跡』　喜界町埋蔵文化財発掘報告書（3）

喜界町教育委員会　1989　『島中Ｂ遺跡II』　喜界町埋蔵文化財発掘報告書（4）

第１表　主な島内遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	主な遺構・遺物	備考
1	城久遺跡群	喜界町城久ほか	海岸段丘	古代～中世	掘立柱建物跡，土坑墓，炉跡，土師器，須恵器，越州窯系青磁，布目圧痕土器，灰釉陶器，白磁，初期高麗青磁・朝鮮系無釉陶器，カムィヤキ，滑石製石鍋，青磁，銅製品，鉄製品，鞴の羽口，ガラス玉ほか	平成 14・15・17・18・19・20 年度確認調査，平成 14・15・16・17・18・19・20 年度本調査
2	赤連	喜界町赤連	海岸段丘	縄文	赤連系土器	現喜界高校
3	湾天神	喜界町湾	海岸段丘	縄文	土器，石器，貝製品，獣骨	
4	総合グラウンド	喜界町湾	砂丘	縄文	土器，石器，貝，獣骨	
5	竿ク	喜界町湾	海岸段丘			削平により消失した可能性
6	荒木貝塚	喜界町荒木	低地	縄文	石器，貝	
7	先山	喜界町浦原	海岸段丘	縄文～近世	面縄前庭式・兼久式土器，石器，貝，獣骨	昭和 61 年度調査
8	平家森	喜界町早町	山頂	中世	規模・形状：200 × 200 複郭	
9	後田	喜界町塩通	海岸段丘			削平により消失した可能性
10	水口	喜界町塩通	海岸段丘			削平により消失した可能性
11	堤り	喜界町塩通	海岸段丘	古代～中世	須恵器，カムィヤキ，白磁，青磁，滑石製石鍋，石器，獣骨	平成６年度調査
12	七城	喜界町志戸桶	台地	中世	規模・形状：200 × 200 複郭	
13	オン畑	喜界町小野津	海岸段丘	古代～近世	掘立柱建物跡，炉跡，溝状遺構，カムィヤキ，鉄滓	平成４年度調査
14	巻畑Ｃ	喜界町小野津	海岸段丘	古代～中世	土師器，カムィヤキ，滑石製石鍋	平成４年度調査
15	巻畑Ｂ	喜界町小野津	海岸段丘	古代～中世	土師器，須恵器，滑石製石鍋，鞴の羽口，鉄滓	平成４年度調査
16	ハンタ	喜界町西目	海岸段丘	縄文	住居跡群，かまど状遺構，宇宿上層式土器，土製品，石器，カムィヤキ，青磁	昭和 61 年度調査
17	前ヤ	喜界町島中	海岸段丘	古墳～中世	青磁，カムィヤキ	平成５年度調査
18	ウ川田	喜界町島中	海岸段丘	縄文～中世	土器，土師器，白磁，青磁，カムィヤキ，滑石製石鍋，染付	平成５年度調査
19	上田	喜界町島中	海岸段丘	縄文～中世	柱穴，土器，青磁，カムィヤキ	平成５年度調査
20	向田	喜界町島中	海岸段丘	縄文～中世	土器，土師器，白磁，青磁，カムィヤキ，滑石製石鍋，染付	平成５年度調査
21	島中Ｂ	喜界町島中	海岸段丘	古代～近世	土器，内黒土師器，須恵器，白磁，青磁，鞴の羽口，鉄滓，石器，染付	昭和 63 年度調査
22	和早地	喜界町荒木	海岸段丘	縄文～近代	面縄前庭式，嘉徳式，龍泉窯系青磁，白磁，鉄器，鞴の羽口，鉄滓，石器，魚骨，獣骨，染付，薩摩焼	平成 18 年度調査
23	中増	喜界町手久津久	海岸段丘	縄文～中世	掘立柱建物跡，土坑，焼土跡，龍泉窯系青磁，石器，鉄製品，銅製品，鉄滓，鞴の羽口など	平成 23・24・26 年度本調査
24	川尻	喜界町手久津久	低地	縄文～近世	大型円形土坑，土坑，溝状遺構，兼久式土器，土師器，須恵器，貝など	平成 23 ～ 26 年度本調査
25	崩り	喜界町手久津久	海岸段丘	縄文～中世	竪穴状建物跡，掘立柱建物跡，土坑墓，土坑，焼土跡，白磁，カムィヤキ，土器，石器，鉄製品，鉄滓，鞴の羽口など	平成 23・24 本調査
26	川寺	喜界町手久津久	海岸段丘	縄文～中世	竪穴状建物跡，掘立柱建物跡，土坑墓，土坑，焼土跡，龍泉窯系青磁，石器，鉄製品，銅製品，鉄滓，鞴の羽口，琥珀など	平成 24 ～ 26 年度本調査

第２図　主な島内遺跡位置図

喜界町教育委員会　1993『オン畑遺跡・巻畑Ｂ遺跡・巻畑Ｃ遺跡・池ノ底散布地』喜界町埋蔵文化財発掘報告書（5）
喜界町教育委員会　1994『前ヤ遺跡・向田遺跡・上田遺跡・ウ川田遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘報告書（6）
喜界町教育委員会　1996『提り遺跡・後田遺跡・水口遺跡竿ク遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘報告書（7）
喜界町教育委員会　2006『山田中西遺跡Ⅰ』喜界町埋蔵文化財発掘報告書（8）
喜界町教育委員会　2008『山田中西遺跡II』喜界町埋蔵文化財発掘報告書（9）
喜界町教育委員会　2009『山田半田遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘報告書（10）
喜界町教育委員会　2011『前畑・小ハネ遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘報告書（11）
喜界町教育委員会　2013『大ウフ・半田遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘報告書（12）
喜界町教育委員会　2013『半田口遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘報告書（13）
国分直一ほか　1996「奄美大島の先史時代」『奄美－自然と文化　論文編』復刻　九学会連合奄美大島共同調査委員会編　日本学術振興会刊
澄田直敏ほか　2003「喜界町総合グラウンド遺跡（弓道場）出土の土器」『鹿児島考古』第37号　鹿児島県考古学会
町田洋・江波戸昭　1969『薩南諸島の総合的研究』平山蟬男編　第1編　地理的環境　明治書院

第Ⅲ章　調査の方法と成果

第１節　調査概要

（１）発掘調査の方法

平成23年度～24年度は，遺跡のおおよそ北側半分にあたる部分の発掘調査を行った。調査開始にあたり，伐採などの環境整備をした後，遺構の広がる範囲を確認するための試掘トレンチ調査を12箇所で行った（第３図）。このトレンチ調査において，遺構が確認されなかった範囲については，トレンチの100分の１平面図作成と写真撮影による記録のみを行ったが，遺構の広がりが見られた範囲については調査区を広げた。遺構の広がりは，段丘によって高低差が異なる２つの範囲で確認し，南側に位置する調査区をA地区，A地区より一段高い北側に位置する調査区をB地区と呼称することとした。

A地区・B地区の調査では，まず重機によってその一帯の表土を除去し，10ｍ間隔の調査用グリッドを調査区に合わせ任意の方向で設定した。A地区・B地区ともに，表土下の大部分はマージと呼ばれる暗赤褐色土の地山が露出する状況であったが，部分的に包含層が残る箇所があった。各包含層で遺構検出を行った後，人力で包含層の掘り下げを行い，最終的には後述するⅤ層（地山）上面での遺構検出を行った。

検出した遺構に関しては，検出状況を写真で撮影したのち掘り下げを行い，半裁状況や完掘状況の写真撮影，10分の１個別図や20分の１遺構配置図などを作成した。なお，掘立柱建物跡の復元は，調査現場での復元と整理作業段階での図上復元の両方で行った。

調査終了後は，設営していたテントや仮設トイレなどを撤収したのち，県農政部へ現場を引き渡した。

広域地図は第６図参照

第３図　先行確認トレンチ位置図

（２）発見された遺構・遺物

調査では，主に中世（14世紀後半～15世紀中頃）の遺構・遺物が発見された。遺構は，A地区・B地区合わせて掘立柱建物跡15棟，土坑９基，焼土跡11基，溝状遺構２条などを検出し，遺物は龍泉窯系青磁や白磁，滑石混入土器，鞴の羽口，石器，獣骨，鉄製品，鉄滓，銅製品などが出土した。これらの遺構・遺物のほか，B地区においては包含層より縄文時代後期～晩期の土器や石器が出土しているが，遺構は検出されなかった。遺物はA地区・B地区合わせて1490点出土した。図化したものは142点である。

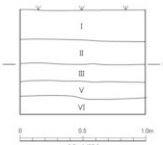
このほか，土坑・溝状遺構・焼土跡・ピットなどから土壌サンプルを計40袋採取した。そのうち，25袋（総量145ℓ）をフローテーションによって処理を行った。サンプルからは，鍛冶関連作業時に生成される鍛造剥片や植物遺体であるオオムギ・イネ・アワなどの炭化種子が検出されている（第Ⅳ章２節を参照）。

土坑９号及び焼土跡６号から出土した炭化材は，放射性炭素年代測定と樹種同定を行い，それぞれ補正年代500±20BPと710±30BPの値を得た（第Ⅳ章１節参照）。

（3）基本層位

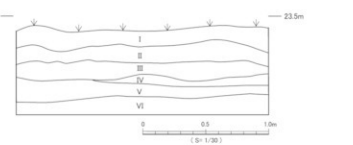
発掘調査では，A地区とB地区間において土層の堆積の違いが見られ，Ⅰ層・Ⅴ層・Ⅵ層以外は対応する層は見られなかった。

A地区



第４図　A 地区土層断面図

B地区



第５図　B 地区土層断面図

Ⅰ層：表土。暗褐色粘質土（10YR3/4）に貝やサンゴの破片が混入する。カムィヤキや龍泉窯系青磁，褐釉陶器，石器，鉄滓などが出土する。現代の耕作土である。

Ⅱ層：暗褐色粘質土（10YR3/4）に黄褐色土（10YR5/6）の粒・焼土粒・炭化粒が混入する。調査区北側から中央部にかけての一部分に堆積が見られる。龍泉窯系青磁や滑石混入土器，石器などが出土する中世の包含層。出土遺物はいずれも小片であったため，本報告書では図化していない。土壌サンプルからオオムギやアワの炭化種子を検出している。

Ⅲ層：黒褐色粘質土（10YR2/3）に黄褐色土（10YR5/6）の粒が混入する層。地形的に低くなっている南側の一部に堆積する。土器や石器がわずかに出土するが，形式や時期などを特定できる遺物は出土しなかった。また，いずれも小片であったため，本報告書では図化していない。

Ⅴ層：地山。マージと呼ばれる石灰岩の風化土である暗赤褐色粘質土。

Ⅵ層：島の基盤層である琉球石灰岩や隆起サンゴ石灰岩。中増遺跡調査では，表土下からこの基盤層が露頭する箇所があった。

Ⅰ層：表土。暗褐色粘質土（10YR3/4）に貝やサンゴの破片が混入する。カムィヤキや土師器，縄文土器が出土する。現代の耕作土である。

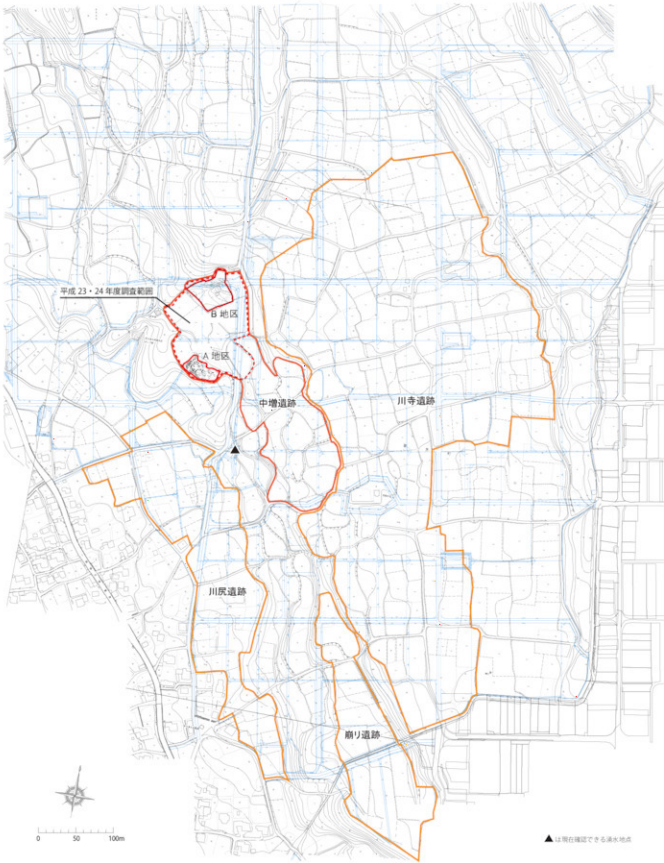
Ⅱ層：暗褐色粘質土（10YR3/4）に焼土粒・炭化粒がわずかに混入する層。調査区中央付近から南西部にかけて地形的に低くなる部分に堆積している。カムィヤキや滑石混入土器，石器が出土する中世の包含層。A地区II層に似ているが，出土遺物から堆積に若干の時期差がある可能性がある。

Ⅲ層：黒褐色粘質土（10YR2/3）に焼土粒・炭化粒が多く混入する。調査区中央付近から南西部にかけて地形的に低くなる部分に堆積している。突帯などを有する砂質の土器が出土する縄文時代後期～晩期相当期と考えられる包含層。

Ⅳ層：褐色粘質土（7.5YR4/3.6）に1cm程度の明褐色粘質土（7.5YR4/4）の粒が混入し，まだら状を呈する。面縄西洞式などの沈線文や刺突文，突帯などを有する縄文時代後期～晩期相当期と考えられる土器や石器が出土した。

Ⅴ層：地山。マージと呼ばれる石灰岩の風化土である暗赤褐色粘質土。

Ⅵ層：島の基盤層である琉球石灰岩や隆起サンゴ石灰岩である。中増遺跡調査では，表土下からこの基盤層が露頭する箇所があった。



第 6 図　中増遺跡発掘調査位置図

第２節　発見された遺構・遺物

１．A地区

表土及び一部分に堆積していた包含層（Ⅱ層）の除去後，地山面にて遺構検出を行い，掘立柱建物跡10棟・土坑９基・焼土跡９基・溝状遺構２条・ピット228基を検出した。遺構完掘後，調査区域南側の一部に堆積していたⅢ層の掘り下げを行ったが，遺構は検出されなかった。

第７図　中増遺跡　A地区遺構配置図

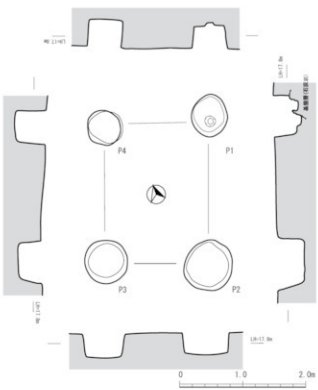
（1）掘立柱建物跡

検出した掘立柱建物跡10棟のうち，7棟が1×1間の4本柱建物跡であった。残りの3棟については，2×4間が2棟と2×3間が1棟である。遺物は，無搬運弁文や無文外反の龍泉窯系青磁が主に出土しており，おおむね14世紀後半～15世紀中頃の遺構と想定される。以下，掘立柱建物跡の詳細を述べる。

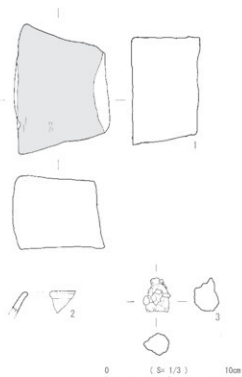
掘立柱建物跡1号（第8図・第9図1～3・第2・3表）

B-203区で検出した，1×1間の4本柱建物跡である。柱穴は直径平均約0．6mと比較的大きく，深さは約0．4mを測る。P1の底は基盤層である石灰岩の露頭がみられる。

第9図1～3は掘立柱建物跡1号から出土した遺物を図化したものである。1は砂岩を石材とする石器である。上面に平滑面があり，砥石か磨石として使用された可能性がある。2はやや外反する口縁を持つ白磁である。3は磁力のある鉄滓である。



第8図　掘立柱建物跡1号



第9図　掘立柱建物跡1号出土遺物

第2表　掘立柱建物跡1号計測表

梁行1　寸法	梁行2　寸法	桁行1　寸法	桁行2　寸法	備考	遺物
P1-P4　169	平均　－	P1-P2　232	平均　－	方角：N18° E	P1：石器（1），鉄滓（2），粘土塊（2）
P2-P3　166	平均　－	P3-P4　219	平均　－		P3：石器（1）
					P4：白磁（1），石器（1），粘土塊（1）

第3表　掘立柱建物跡1号出土遺物観察表

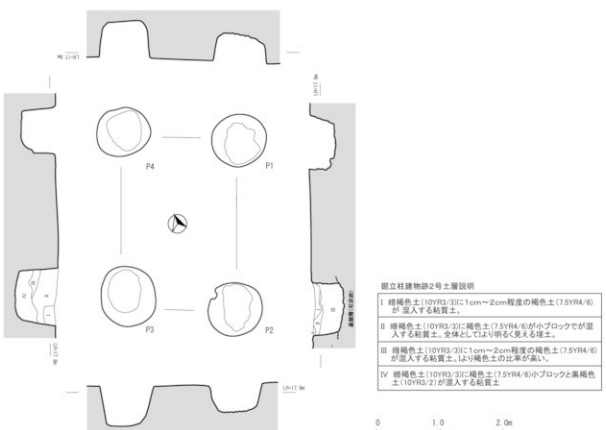
挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm）			文様・調整		色調		重量(g)	備考
									口径（最大長）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	（外）	（内）	（外）	（内）		
第9図	1	掘立1号P3	C-203	一括	石器	砥石	砂岩	－	(10.2)	(7.5)	(5.8)	－	－	－	－	703	
	2	掘立1号P4	B-203	一括	白磁	椀？	－	口縁	－	－	－	－	－	浅黄	浅黄	－	
	3	掘立1号P1	B-203	一括	鉄滓	－	－	－	(2.6)	(2.0)	(2.0)	－	－	－	－	14	磁力あり

掘立柱建物跡２号（第10図・第12図４～13・第４・６表）

B-203区で検出した，１×１間の４本柱建物跡である。柱穴は，直径平均約0.8ｍと比較的大きく，深さは約0.6ｍを測る。P１・P２は基盤層である石灰岩を掘り込んで柱穴が作られている。

第12図４～13は掘立柱建物跡２号から出土した遺物である。４～６は無錆選弁文を有する龍泉窯系青磁椀である。４は内・外側面ともに釉のむらが見られ，露胎している部分がある。やや厚い釉が施されている。７～９は無文外反椀である。釉は厚く施されている。10は龍泉窯系青磁の香炉である。後述する土坑４号出土の香炉（第30図54）と胎土や文様，施釉などが類似しており，接合はしないが同一個体の可能性が高い。11は褐釉陶器壺の肩部である。耳がついていた痕跡が残る。12は鞴の羽口である。13は鉄滓である。磁力は無い。

これらの遺物のほか，Ｐ３出土の龍泉窯系青磁椀は，掘立建物跡３号Ｐ４出土のもの（第13図15）と接合した。また，自然遺物に関しては，ウシやウミガメなどの獣骨も出土した。遺物の接合状況などから，土坑４号及び掘立柱建物跡３号はこの遺構とほぼ同時期に廃棄された可能性が高い。土坑４号は，掘立建物跡２号の南西約10ｍに位置し，掘立建物跡３号は掘立建物跡２号西側に隣接している。



第 10 図　掘立柱建物跡２号

第４表　掘立柱建物跡２号計測表

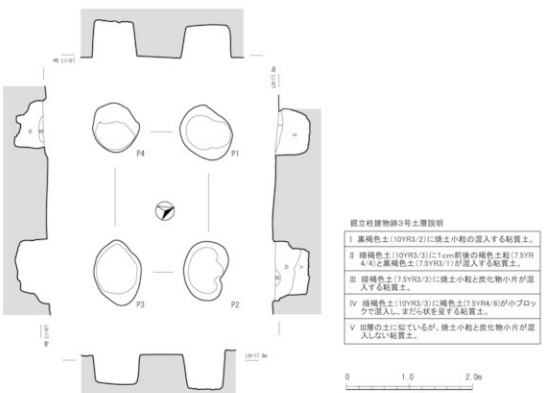
梁行１　寸法	梁行２　寸法	桁行１　寸法	桁行２　寸法	備考	遺物
P1-P4　187　平均　－	P1-P2　270　平均　－	方角：N18° E	P1：石器（１），鉄滓（２），粘土塊（２），獣骨（２）
P2-P3　178　平均　－	P3-P4　272　平均　－		P3：青磁（２），鞴の羽口（１），鉄滓（１），粘土塊（１）
			P4：青磁（２），獣骨（１）

掘立柱建物跡３号（第11図・第13図14～18・第５・７表）

B-203区で検出した，１×１間の４本柱建物跡である。柱穴は，直径平均約0.8ｍと比較的大きく，深さは約0.6ｍを測る。P２とP４は基盤層である石灰岩を掘り込んで柱穴が作られている。

第13図14～18は掘立柱建物跡３号から出土した遺物である。14は砂岩を石材とする敲石である。15・16は無文外反する龍泉窯系青磁椀である。やや厚めの釉が施されている。15は掘立柱建物跡２号P３より出土した青磁と接合した。17はピロースクタイプ白磁椀である。18はわずかだが磁力のある鉄滓である。

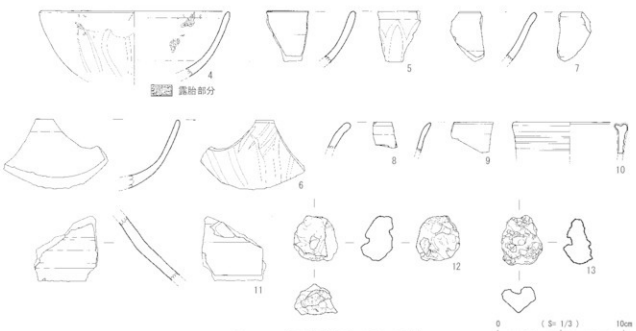
遺物の接合状況から，掘立柱建物跡２号とこの遺構はほぼ同時期に廃棄された可能性が高い。掘立柱建物跡２号は掘立建物跡３号東側に隣接している。



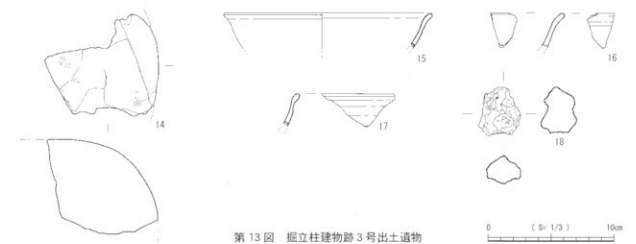
第 11 図　掘立柱建物跡 3 号

第５表　掘立柱建物跡３号計測表

梁行１	寸法	梁行２	寸法	桁行１	寸法	桁行２	寸法	備考	遺物
P1-P4	150	平均	－	P1-P2	222	平均	－	方角：N66° W	P1：褐釉陶器（１），石器（１），粘土塊（３） P2：獣骨（２）
P2-P3	149	平均	－	P3-P4	224	平均	－		P3：青磁（1），白磁（1），石器（2），粘土塊（2），貝（1） P4：青磁（１），鉄滓（２），粘土塊（２）



第 12 図　掘立柱建物跡 2 号出土遺物



第 13 図　掘立柱建物跡 3 号出土遺物

第 6 表　掘立柱建物跡 2 号出土遺物観察表

検出No.	遺転番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm）			文様・調整		色調		重量(g)	備考
									口径（最大径）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	（外）	（内）	（外）	（内）		
第12回	4	掘立２号 P3	B-203	1	縄束茎系青磁	椀	V?	口縁	15	-	-	無鎬蓮弁		オリーブ灰	オリーブ灰		施釉にばらつきあり
	5	掘立２号 P2	B-203	1	縄束茎系青磁	椀	V	口縁	-	-	-	鎬蓮弁		オリーブ灰	オリーブ灰		ドット No.1
	6	掘立２号 P3	B-203	一括	縄束茎系青磁	椀	-	口縁	-	-	-	無鎬蓮弁		オリーブ灰	オリーブ灰		
	7	掘立２号 P4	B-203	一括	縄束茎系青磁	椀	IV	口縁	-	-	-			灰オリーブ	灰オリーブ		佐敷タイプ
	8	掘立２号 P4	B-203	一括	縄束茎系青磁	椀	-	口縁	-	-	-			オリーブ灰	オリーブ灰		
	9	掘立２号 P4	B-203	一括	縄束茎系青磁	椀	IV	口縁	-	-	-			にぶい黄褐	にぶい黄褐		佐敷タイプ
	10	掘立２号 P2	B-203	一括	縄束茎系青磁	香炉	V	口縁	9	-	-			オリーブ灰	オリーブ灰		No.54 と同一個体か
	11	掘立２号 P1	B-203	一括	褐釉陶器	耳付壺	-	胴	-	-	-			にぶい褐	橙		
	12	掘立２号 P3	B-203	一括	鞴の羽口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		磁力わずかにあり
	13	掘立２号 P3	B-203	一括	鉄滓	-	-	-	(3.6)	(3.1)	(2.3)	-	-	-	-	15	磁力なし

第 7 表　掘立柱建物跡 3 号出土遺物観察表

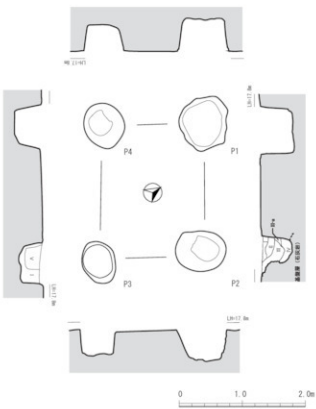
検出No.	遺転番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm）			文様・調整		色調		重量(g)	備考
									口径（最大径）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	（外）	（内）	（外）	（内）		
第13回	14	掘立３号 P1	B-203	一括	石器	敲石	砂岩	-	(9.0)	(6.0)	(7.6)	-	-	-	-	406	上面平坦部に敲打痕
	15	掘立３号 P4	B-203	II	縄束茎系青磁	椀	IV	口縁	16.6	-	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ		掘立２号 P 3 出土青磁と接合
	16	掘立３号 P3	B-203	II	縄束茎系青磁	椀	-	口縁	-	-	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰		
	17	掘立３号 P3	B-203	II	中世陶磁	椀	ピロースク	口縁	-	-	-	-	-	灰白	灰白		
	18	掘立３号 P4	B-203	II	鉄滓	-	-	-	(3.6)	(3.2)	(2.8)	-	-	-	-	38	わずかに磁力あり

掘立柱建物跡４号（第14図・第15図19～22・第8・9表）

B-C-204区で検出した，１×１間の４本柱建物跡である。柱穴は直径平均約0.7ｍと比較的大きく，深さは約0.5ｍを測る。

第15図19～22は掘立柱建物跡４号から出土した遺物である。19は無文外反する龍泉窯系青磁椀である。口縁の一部が欠損している。やや厚めの釉が施されている。20・21は粘土塊である。片面は平坦であり，押し当てられた藁か木らしき痕跡が残っており，壁の一部の可能性がある。一部は被熱している。22は磁力のある鉄滓である。

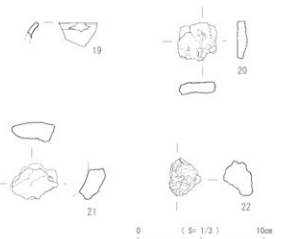
これらの遺物ほか，ウシなどの獣骨が出土している。



第 14 図　掘立柱建物跡４号

掘立柱建物跡4号土層説明

Ⅰ 暗褐色粘質土(7.5YR3/3)に褐色土(7.5YR4/6)ブロック状に入る粘質土
Ⅱ 黒褐色粘質土(7.5YR3/2)
Ⅲ Ⅰ層に似ているが，褐色土(7.5YR4/6)の混入が少ない。
Ⅲ-a Ⅰ層に似ているが，褐色土(7.5YR4/6)が混入しない。
Ⅳ 暗褐色土(10YR3/3)に石灰岩の礫が入る。
Ⅴ 黒褐色土(10YR3/2)，柱痕と考えられる。



第 15 図　掘立柱建物跡４号出土遺物

第8表　掘立柱建物跡４号計測表

梁行１	寸法	梁行２	寸法	桁行１	寸法	桁行２	寸法	備考	遺物
P1-P4	163	平均	-	P1-P2	212	平均	-	方角：N　59° W	P２：土器（１），獣骨（２）
P2-P3	169	平均	-	P3-P4	211	平均	-		P３：青磁（２），石器（３），粘土塊（２），鉄製品（１），鉄滓（１）
									P４：石器（３），粘土塊（３）

第9表　掘立柱建物跡４号出土遺物観察表

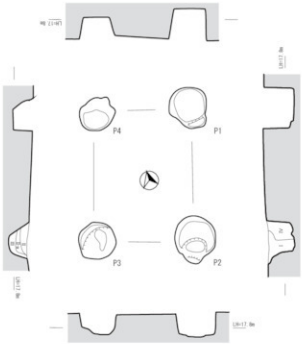
挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類Ｌ1	分類Ｌ2	分類Ｌ3	部位	計測値（ｃｍ） 口径（最大径）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	文様・調整 （外）	（内）	色調 （外）	（内）	重量(g)	備考
第15図	19	掘立４号P3	B-205	一括	龍泉窯系青磁	椀	Ⅳ	口縁	-	-	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ		佐藤タイプ
	20	掘立４号P3	B-205	一括	粘土塊	-	-	-	(3.1)	(3.0)	(0.9)	-	-	明赤褐	にぶい黄褐		平坦部あり，被熱している。
	21	掘立４号P3	B-205	一括	粘土塊	-	-	-	(3.8)	(2.6)	(1.5)	-	-	にぶい黄褐	黒褐		平坦部あり，被熱している。
	22	掘立４号P3	B-205	一括	鉄滓	-	-	-	(3.0)	(2.5)	(2.2)	-	-			17	わずかに磁力あり

掘立柱建物跡５号（第16図・第10表）

B-202区で検出した，１×１間の４本柱建物跡である。柱穴は直径平均約0.6ｍと比較的大きく，深さは約0.4ｍを測る。

Ｐ４は，底面に基盤層である石灰岩が露頭している。

出土遺物は第10表の通りであるが，小片であり図化には至らなかった。



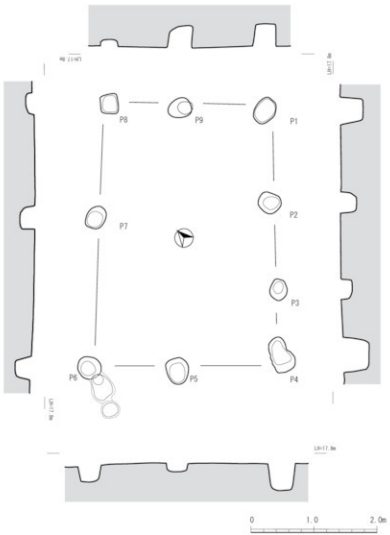
第 16 図　掘立柱建物跡５号

第10表　掘立柱建物跡５号計測表

梁行１	寸法	梁行２	寸法	桁行１	寸法	桁行２	寸法	備考	遺物
P1-P4	155	平均	-	P1-P2	210	平均	-	方角：N 16° E	P１：土器（2），石器（1） P２：軽石（1）
P2-P3	159	平均	-	P3-P4	207	平均	-		P３：青磁（1），鞴の羽口（1），粘土塊（1） P４：獣骨（1）

掘立柱建物跡６号（第17図・第11表）

B-205区で検出している，２×３間の建物跡である。掘立柱建物跡７号と重複している。柱穴の大きさは，平均約0.4mである。深さはそれぞれであり，浅いもので約0.1m，深いもので約0.4mである。柱穴から遺物は出土していない。



第17図　掘立柱建物跡６号

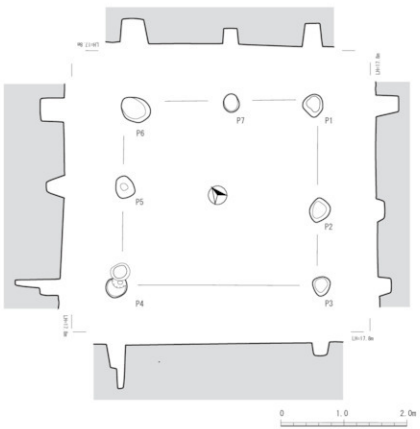
第11表　掘立柱建物跡６号計測表

梁行１　寸法	梁行２　寸法	桁行１　寸法	桁行２　寸法	備考	遺物
P1-P8　269	平均　135	P1-P4　414	平均　138	方角：N41°E	
P4-P6　292	平均　147	P6-P8　420	平均　210		
P1-P9　140	P4-P5　160	P1-P2　155	P6-P7　233		
P9-P8　130	P5-P6　133	P2-P3　136	P7-P8　186		
		P3-P4　124			

掘立柱建物跡７号（第18図・第12表）

B-205区で検出した，２×２間の建物跡である。掘立柱建物跡６号と重複している。柱穴の大きさは，直径平均約0.3ｍである。深さはそれぞれであるが，建物の角となる柱穴は比較的深く約0.7ｍを測り，その他のものは平均約0.4ｍである。西側の柱穴は確認できなかった。

柱穴からは，軽石や粘土塊などが出土しているが，時期などを特定できる遺物は出土していない。



第 18 図　掘立柱建物跡７号

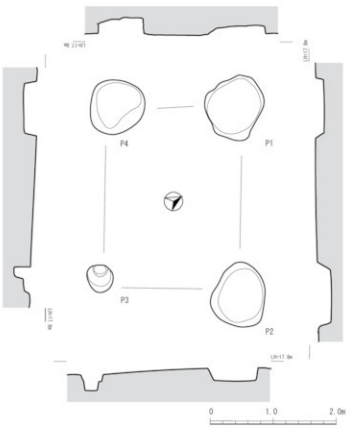
第12表　掘立柱建物跡７号計測表

梁行１	寸法	梁行２	寸法	桁行１	寸法	桁行２	寸法	備考	遺物
P1-P6	308	平均	154	P1-P3	295	平均	149	方角：N 37° E	P３：石器（１），軽石（１）
P3-P4	311	平均	-	P4-P6	291	平均	145		P４：軽石（１），粘土塊（５）
P1-P7	140			P1-P2	176	P4-P5	156		
P7-P6	168			P2-P3	121	P5-P6	134		

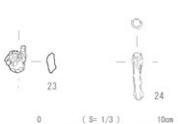
掘立柱建物跡８号（第19図・第20図23・24・第13・14表）

B-C-204区で検出した，１×１間の４本柱建物跡である。柱穴の大きさは，直径平均約0.8mと比較的大きいが，深さは平均約0.2mと他の掘立建物跡と比べ浅い。また南に位置するＰ３は，直径約0.4mと小さく，底は基盤層である石灰岩が露頭している。掘立柱建物跡９号と重複しているが，遺構の切り合いは見られはず，また，出土遺物や埋土からも新旧の判断はできなかった。

第20図23・24は出土した遺物を図化したものである。23は磁力のある鉄滓である。24は釘と思われる鉄製品である。



第 19 図　掘立柱建物跡 8 号



第 20 図　掘立柱建物跡 8 号出土遺物

第13表　掘立柱建物跡８号計測表

梁行１　寸法	梁行２　寸法	桁行１　寸法	桁行２　寸法	備考	遺物
P1-P4　204	平均　-	P1-P2　293	平均　-	方角：N 62° W	Ｐ２：鉄製品（１），鉄滓（１）
P2-P3　217	平均　-	P3-P4　280	平均　-		Ｐ３：石器（２）

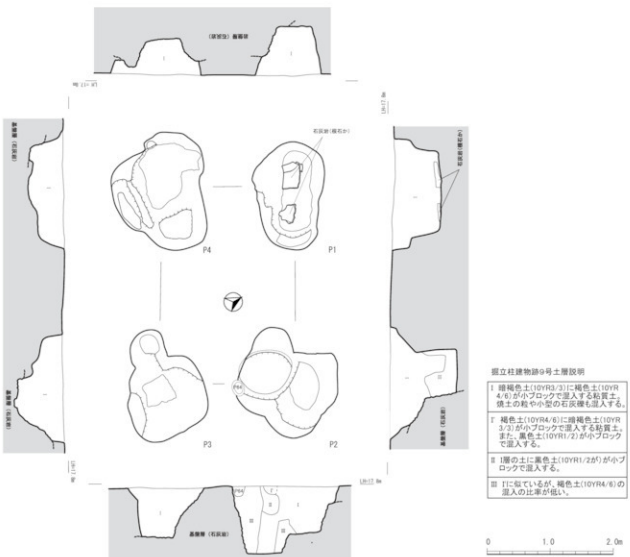
第14表　掘立柱建物跡８号出土遺物観察表

挿図No.	図版番号	出土遺構名	出土区	層位	分類Ｌ1	分類Ｌ2	分類Ｌ3	層位	計測値（cm） 口径（最大径）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	文様・調整 （外）	（内）	色調 （外）	（内）	重量（g）	備考
第20図	23	掘立８号 P2	B-204	一括	鉄滓	-	-	-	(2.0)	(1.7)	(0.6)	-	-	-	-	4	わずかに磁力あり
	24	掘立８号 P2	B-204	一括	鉄製品	釘？	-	-	(3.7)	(0.9)	(0.6)	-	-	-	-	3	

掘立柱建物跡９号（第21図・第22図25～39・第15・16表）

B･C-204区で検出した，１×１間の４本柱建物跡である。柱穴は不定形だが，大きさは長軸平均約1.7m，短径平均約1.3mと他の掘立柱建物跡と比べ大きく，深さは平均約0.8mと深く掘りこまれている。P３の底には根石と思われる石灰岩が検出されている。P２・P４は基盤層である石灰岩を掘り込んで作られている。掘立柱建物跡８号と重複しているが，出土遺物や埋土からは新旧の判断はできなかった。

第22図25～39は掘立柱建物跡９号から出土した遺物である。25～34龍泉窯系青磁である。25は外面に蓮弁文，内面に刻花文を有する椀である。釉は厚く施されている。26～28は無文外反椀である。やや厚い釉が施されている。29は



第21図　掘立柱建物跡９号

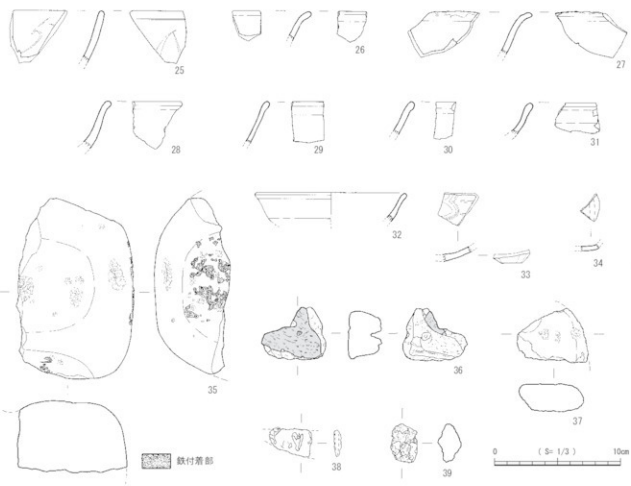
第15表　掘立柱建物跡９号計測表

梁行１　寸法	梁行２　寸法	桁行１　寸法	桁行２　寸法	備考	遺物
P1-P4　202	平均　-	P1-P2　308	平均　-	方角：N 61° W	P１：青磁（10），褐釉陶器（１），土器（２），粘土塊（８），鉄滓（11），軽石（１），貝（３），獣骨（４），炭化種子（オオムギ）
P2-P3　179	平均　-	P3-P4　318	平均　-		P２：青磁（６），石器（10），鉄滓（４），粘土塊（２）
					P３：青磁（２），土器（２），粘土塊（７），貝（３）
					P４：　青磁（２），石器（４），軽石（５），鉄製品（１），鉄滓（１），粘土塊（２），貝（２），炭化種子（オオムギ）

無文外反椀である。釉が薄く施されている。後述する溝状遺構1号出土の青磁（第54図89）と胎土や施釉などが類似しており，接合はしないが同一個体の可能性が高い。30は玉縁状口縁を持つ椀である。釉は厚く施されている。31・32は坏である。やや厚めの釉が施されている。33は腰部である。外面には蓮弁文，内面に幾何学的な花文が施されている。やや厚い釉が施されている。34は香炉腰部の可能性があるが，小片の為特定できない。施釉はやや厚い。35は砂岩を石材とする金床石である。上面と側面に敲打痕と鉄の付着がみられる。36は軽石である。平滑面があり，磨石として使用された可能性がある。37は砂岩を石材とする磨敲石である。38は刀子である。39は磁力がある鉄滓である。

これらの遺物のほか，ウシなどの獣骨や魚骨なども出土した。また，Ｐ２・Ｐ４は土壌サンプリングを行い，中からオオムギが検出されている。

遺物の接合状況などから，この遺構は溝状遺構１号とほぼ同時期に廃棄された可能性が高い。溝状遺構１号は，掘立建物跡９号の南東側に隣接している。



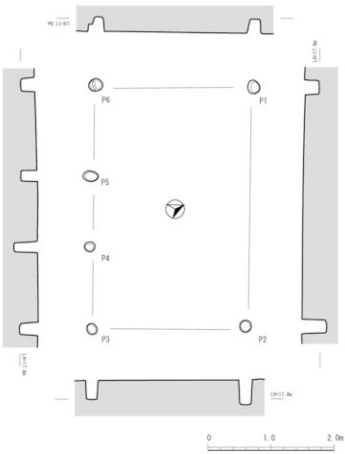
第 22 図　掘立柱建物跡９号出土遺物

第16表　掘立柱建物跡９号出土遺物観察表

挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm） 口径（最大長）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	文様・調整 （外）	（内）	色調 （外）	（内）	重量(g)	備考
第22図	25	掘立９号 P3	C 204	一括	陸泉某系青磁	椀	V	口縁	-	-	-	鎬蓮弁文	刻花文	オリーブ灰	オリーブ灰	-	
	26	掘立９号 P4	C 204	I	陸泉某系青磁	椀	IV	口縁	-	-	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	ドット No. 3
	27	掘立９号 P1	B 204	一括	陸泉某系青磁	椀	IV	口縁	-	-	-	-	-	黄褐	黄褐	-	
	28	掘立９号 P2	C 204	I	陸泉某系青磁	椀	IV?	口縁	-	-	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	
	29	掘立９号 P1	B 204	一括	陸泉某系青磁	椀	-	口縁	-	-	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	No.89 と同一個体か
	30	掘立９号 P2	B 204	一括	陸泉某系青磁	椀	IV	口縁	-	-	-	-	-	黄褐	黄褐	-	玉縁状口縁
	31	掘立９号 P2	B 204	一括	陸泉某系青磁	坏	V	口縁	-	-	-	-	-	灰	灰	-	
	32	掘立９号 P4	C 204	I	陸泉某系青磁	椀	IV?	口縁	12.2	-	-	-	-	灰	灰	-	ドット No. 4
	33	掘立９号 P1	B 204	一括	陸泉某系青磁	-	IV	胴	-	-	-	蓮弁文	花文？	灰オリーブ	灰オリーブ	-	
	34	掘立９号 P4	C 204	I	陸泉某系青磁	香炉？	-	胴	-	-	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	ドット No. 5
	35	掘立９号 P1	B 204	一括	石器	鉄冶台	砂岩	-	(13.9)	(9.2)	(5.6)	-	-	-	-	1128	鉄付着　磁力あり
	36	掘立９号 P1	B 204	一括	石器	磨石	軽石	-	(5.1)	(4.2)	(2.7)	-	-	-	-	11	加工痕あり
	37	掘立９号 P4	C 204	I	石器	磨敲石	-	-	(4.9)	(4.1)	(2.2)	-	-	-	-	-	
	38	掘立９号 P4	C 204	IV	鉄製品	刀子片	-	-	(3.9)	(2.2)	(0.6)	-	-	-	-	6	
	39	掘立９号 P2	C 204	I	鉄滓	-	-	-	(3.0)	(2.1)	(1.8)	-	-	-	-	6	磁力なし

掘立柱建物跡10号（第23図・第17表）

B-202区で検出している。1×3間の建物跡と考えられる。北側からは対応する柱穴が確認できなかった。柱穴の大きさは平均約0.2mであり，深さは平均約0.3mである。柱穴から遺物は出土していない。



第23図　掘立柱建物跡10号

第17表　掘立柱建物跡10号計測表

梁行1　寸法	梁行2　寸法	桁行1　寸法	桁行2　寸法	備考	遺物
P1-P6　249	平均　-	P1-P4　385	平均　127		
P4-P5　247	平均　-	P3-P6　380	平均　-		
		P3-P4　129		方角：N 66° W	
		P4-P5　112			
		P5-P6　140			

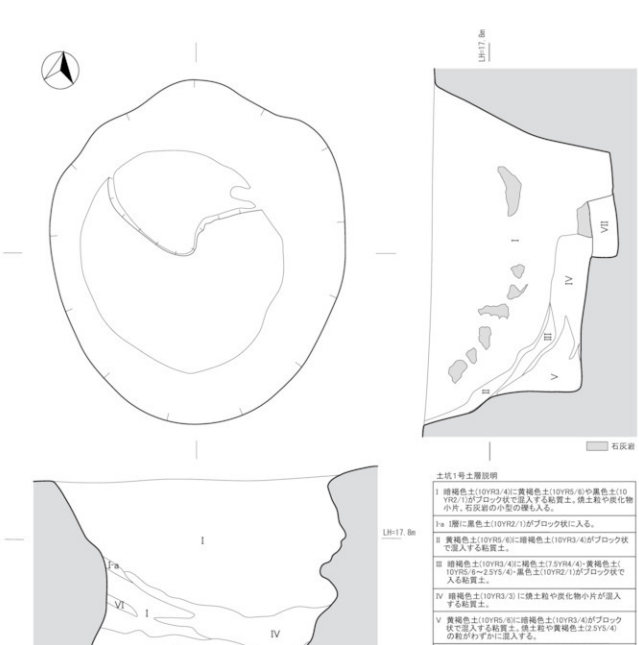
（2）土坑

A地区では土坑を9基検出した。円形のものや不定形をしたものなど形状はさまざまであるが，いずれも用途が不明のものが多い。土坑2・3・8号は土壌サンプルを採取し，オオムギやムギ類，アワなどの炭化した植物遺体が検出された。また，土坑9号Ⅱ層より出土の炭化材を年代測定及び樹種同定を行い，補正年代500±20BPと樹種はオオバヤシャブシ近似種に同定される結果を得た。

土坑1号（第24図・第25図40～43・第18表）

A-201区で検出した。長軸1.82m×短軸1.54mの楕円形をしている。深さは約1.0mあり，本遺跡の他の土坑と比べ深い。

第25図40～43は土坑1号から出土した遺物である。40は雷文帯を有する龍泉窯系青磁椀である。厚い釉が施されている。41は白磁椀と思われる腰部である。ややオリーブ色のある透明な釉が薄く施され，胎土は灰色で固く締まっている。



土坑1号土層説明

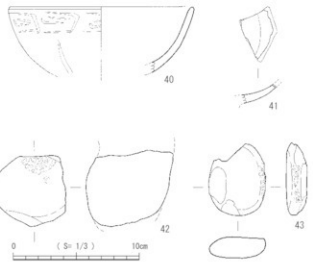
I 暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色土(10YR5/6)や黒色土(10YR2/1)がブロック状で混入する粘質土。焼土粒や炭化物小片，石灰岩の小型の礫も入る。
I a I層に黒色土(10YR2/1)がブロック状に入る。
II 黄褐色土(10YR5/6)に暗褐色土(10YR3/4)がブロック状で混入する粘質土。
III 暗褐色土(10YR3/4)に褐色土(7.5YR4/4)・黄褐色土(10YR5/6～2.5Y5/4)・黒色土(10YR2/1)がブロック状で入る粘質土。
IV 暗褐色土(10YR3/3)に焼土粒や炭化物小片が混入する粘質土。
V 黄褐色土(10YR5/6)に暗褐色土(10YR3/4)がブロック状で混入する粘質土。焼土粒や黄褐色土(2.5Y5/4)の粒がわずかに混入する。
VI 暗褐色土(7.5YR3/4)に黒色土(10YR2/1)が粒状に混入する粘質土。
VII 明黄褐色(10YR6/6)と暗褐色土(10YR3/4)，オリーブ褐色土(2.5Y4/6)，が混ざり，まだら状を呈する粘質土。焼土粒が混入する。

第24図　土坑1号

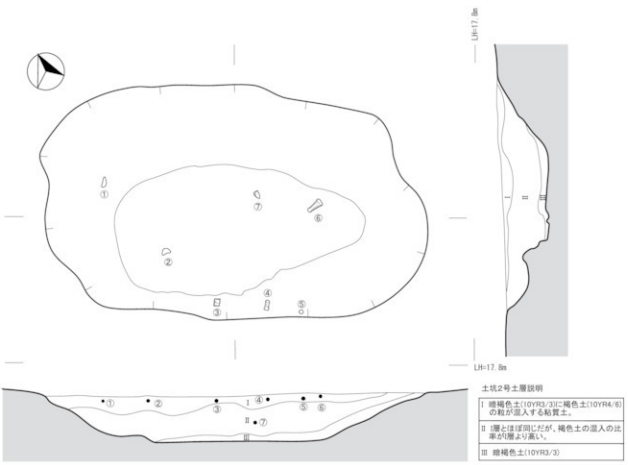
今帰仁タイプ白磁椀である可能性がある。42は砂岩を石材とする磨敲石である。上部に敲打によるくぼみがみられる。43は砂岩を石材とする磨敲石である。側面に敲打痕が見られる。15世紀初め～中頃の遺構の可能性が高い。

土坑２号（第26図）

B-204区で検出した，長軸2.03ｍ×短軸1.34ｍの楕円形の土坑である。掘り込みは0.24ｍと比較的浅く，ウシやウマの骨とヤコウガイ・マガキガイなどの貝類が出土している。また，土壌サンプルからはオオムギやムギ類，アワの炭化種子を検出した。



第 25 図　土坑 1 号出土遺物



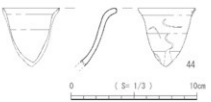
第 26 図　土坑 2 号

第18表　土坑 1 号出土遺物観察表

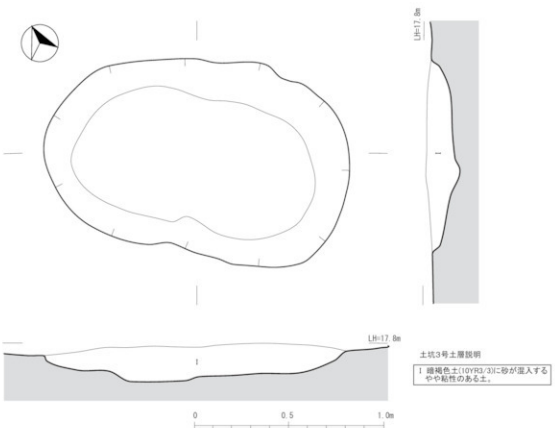
挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm） 口径（最大長）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	文様・調整（外）	文様・調整（内）	色調（外）	色調（内）	重量(g)	備考
第25図	40	土坑 1 号	A-201	Ⅳ	龍泉窯系青磁			胴				雷文帯		オリーブ灰	オリーブ灰		
	41	土坑 1 号	A-201	Ⅰ	白磁	椀	今帰仁？	胴						オリーブ	オリーブ		オリーブ色がかる透明な釉。胎土は灰色。
	42	土坑 1 号	A-201	Ⅰ	石器	磨・敲石	砂岩		(6.3)	(5.5)	(6.6)					331	
	43	土坑 1 号	A-201	Ⅰ	石器	磨・敲石	砂岩		(5.6)	(4.5)	(1.7)					54	刻離部分は使用によるものか

土坑３号（第27図44・第28図・第19表）

B-204区で検出した，長軸1.61ｍ×短軸1.03ｍの楕円形の土坑である。深さは0.19ｍを測る。遺物は，外面に刻花文が施された龍泉窯系青磁椀が１点出土しているが（第27図44），そのほかはヘビ類や哺乳類などの獣骨やマガキガイやタカラガイ，チョウセンサザエといった食用と考えられる貝類がほとんどであった。また，土壌サンプルからはオオムギの炭化種子を検出した。土坑２号と出土遺物や形状，掘り込みの深さなどの類似点が見られ，廃棄土坑として作られた可能性がある。時期は，出土遺物から14世紀後半～15世紀初め頃の遺構と考えられる。



第27図　土坑３号出土遺物



第28図　土坑３号

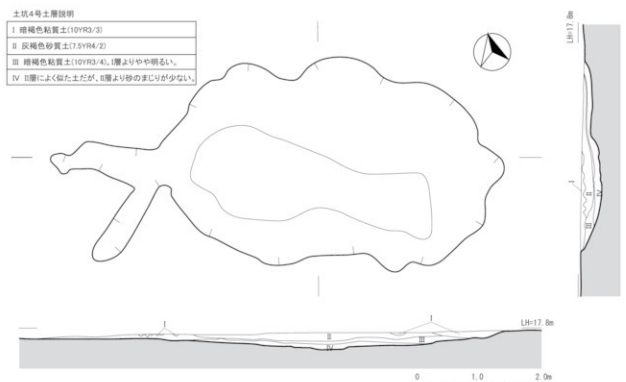
第19表　土坑３号出土遺物観察表

種別 No.	遺構番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm） 口径（最大長）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	文様・調整（外）	（内）	色調（外）	（内）	重量(g)	備考
第27図	44	土坑３号	B-204	一括	龍泉窯系青磁		椀	Ⅳ?	口縁	-	-	-	刻花文		緑灰	緑灰	-	

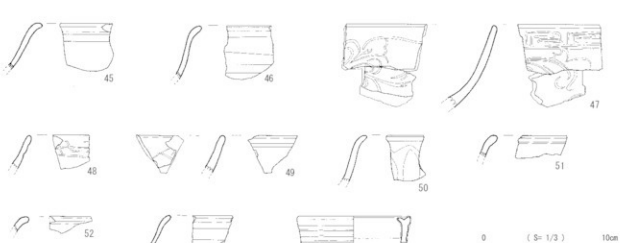
土坑４号（第29図・第30図45～54・第20表）

C-204区で検出した．長軸2.4ｍ×短軸1.04ｍの不定形をした土坑である。深さは0.34ｍを測る。第30図45～54は土坑４号から出土した遺物である。45～50は龍泉窯系青磁椀である。45・46は無文外反椀である。やや厚い釉が施されている。47は外面に雷文帯と刻花文が，内面に刻花文が施されており，釉は厚い。溝状遺構２号出土の青磁と接合した。48は雷文帯を有する椀である。文様は凹凸があり立体的であるが，施釉は粗く厚い。49は内面に刻花文が施されている椀である。厚い釉が施されている。50～53は龍泉窯系青磁坏である。50は無鎬蓮弁文が施され，釉は厚い。54は龍泉窯系青磁の香炉である。前述した掘立柱建物跡２号出土の香炉（第12図10）と胎土や文様，施釉などが類似しており，接合はしないが同一個体の可能性が高い。

これら図化した遺物のほか，小片のため図化していない龍泉窯系青磁椀１点も土坑９号出土のものと接合した。また，チョウセンサザエやタカラガイなどの貝類，ウシなどの獣骨や魚骨が出土した。



第 29 図　土坑４号



第 30 図　土坑４号出土遺物

遺物の接合状況などから，この遺構は掘立柱建物跡２号や土坑９号，溝状遺構２号とほぼ同時期に廃棄された可能性が高い。掘立柱建物跡２号はこの土坑の北東約10mに位置している。また，溝状遺構２号はこの土坑の西側に隣接し，溝状遺構２号の北側に土坑９号がある。遺構の時期は，出土遺物から15世紀初め～中頃と考えられる。

土坑５号（第31図）

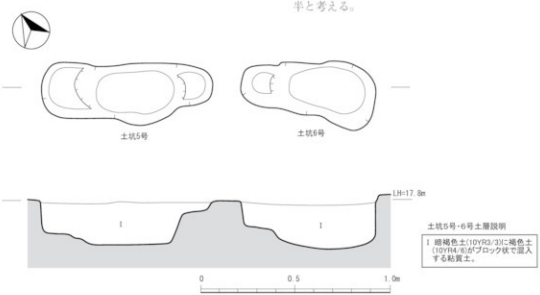
B-204区で検出された，長軸0.81ｍ×短軸0.43ｍの楕円形を呈する土坑である。深さは0.23ｍを測る。遺物は出土していない。東側に隣接する土坑６号と形状や深さ，長軸方向が類似しており，一連の遺構として作られた可能性がある。

土坑６号（第31図・第32図55～58・第21表）

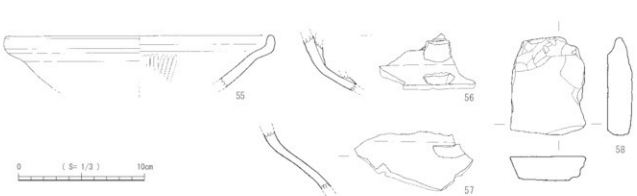
B-204区で検出した，長軸0.71ｍ×短軸0.46ｍの楕円形を呈する土坑である。深さは0.25ｍを測る。

第32図55～58は土坑６号から出土した遺物である。55は龍泉窯系青磁の盤である。56・57は褐釉陶器壺の胴部である。縦位に取り付けられた耳の痕跡が残る。56は溝状遺構１号から出土したものと接合した。58は泥岩を石材とする砥石と思われる。

遺物の接合状況から，この遺構は溝状遺構１号とほぼ同時期に廃棄された可能性が高い。溝状遺構１号はこの土坑から南東側約15に位置している。また，この土坑の西側に隣接する土坑５号は，形状や深さ，長軸方向が類似しており，一連の遺構として作られた可能性がある。この土坑の用途は不明であるが，時期は出土した龍泉窯系青磁盤から15世紀前半と考える。



第 31 図　土坑５号・土坑６号



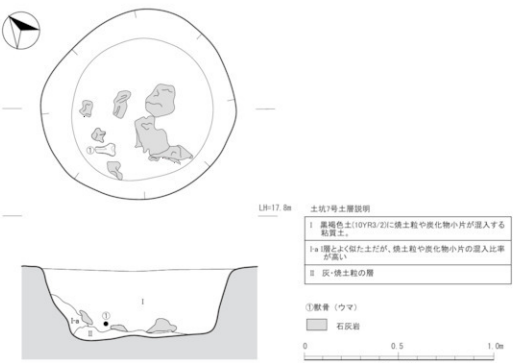
第 32 図　土坑６号出土遺物

土坑７号（第33図・第34図59～61・第22表）

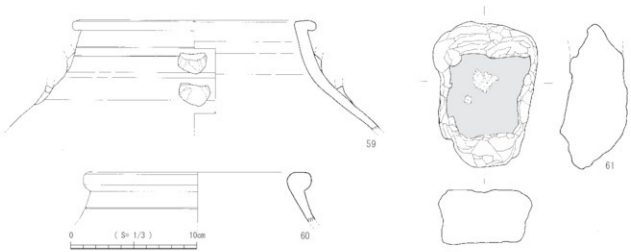
C－206区で検出された，直径1.05ｍのほぼ円形をした土坑である。深さは0.36ｍを測る。底に灰や炭，焼土塊が混入する層（Ⅱ層）の堆積が見られることや，平面形状・深さなどがこの地区で検出している焼土跡１号～４号と類似しているが，底部や側面に被熱した様子は見受けられなかった。第34図59～61は土坑７号から出土した遺物である。59は掲釉陶器の四耳壺である。耳部分は残存していないが，縦位に取り付けられた痕跡が残る。土坑９号と溝状遺構２号から出土したものと接合した。60は掲釉陶器の壺である。Ｐ111出土のものと接合した。61は砂岩を石材とする敲石である。中央付近に敲打痕があり，敲石としても使用されたと考えられる。

これらの遺物のほか，貝やウマの骨などの自然遺物が出土した。

遺物の接合状況から，この遺構と土坑９号，溝状遺構２号，Ｐ111は，ほぼ同時期に廃棄された可能性が高い。溝状遺構２号はこの土坑の北側に隣接し，土坑９号は溝状遺構２号の北側に隣接している。また，Ｐ111は土坑９号東側約５ｍに位置する大型のピットである。時期は，出土している遺物から15世紀初め～中頃と考えられる。



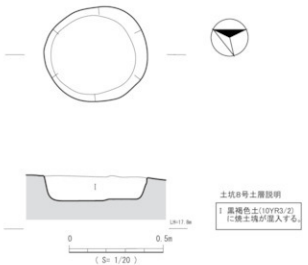
第 33 図　土坑７号



第 34 図　土坑７号出土遺物

土坑８号（第35図）

C-202区で検出した，直径0.55ｍの円形をした小型の土坑である。深さは0.14ｍを測る。埋土に焼土塊や炭が混入することから，検出時は焼土跡と考えていたが，焼土面や炭・灰の層は検出しなかった。土壌サンプルから，オオムギやムギ類の炭化種子を検出したが，その他の遺物は出土していない。そのため，時期・用途は不明である。



第 35 図　土坑８号

第20表　土坑４号出土遺物観察表

挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm） 口径（最大長）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	文様・調整 （外）	（内）	色調 （外）	（内）	重量(g)	備考
第30図	45	土坑４号	C-204	II	縄文系土器群	桐	IV	口縁	-	-	-			オリーブ灰	オリーブ灰	-	佐野タイプ
	46	土坑４号	C-204	一括	縄文系土器群	桐	-	口縁	-	-	-			灰オリーブ	灰オリーブ	-	
	47	土坑４号	C-204	I	縄文系土器群	桐	V	口縁	-	-	-	雲・斜花	斜花文	緑灰	緑灰	-	溝状遺構２号出土資料と接合
	48	土坑４号	C-204	I	縄文系土器群	桐	V	口縁	-	-	-	雲文帯		オリーブ灰	オリーブ灰	-	組成　文様の組は深い
	49	土坑４号	C-204	III	縄文系土器群	桐	V	口縁	-	-	-	-	斜花文	オリーブ灰	オリーブ灰	-	斜線・斜花の有無が第一組成の可能性
	50	土坑４号	C-204	I	縄文系土器群	坪	V	口縁	-	-	-	無頓着帯	-	黄褐	黄褐	-	
	51	土坑４号	C-204	II	縄文系土器群	坪	V	口縁	-	-	-			灰オリーブ	灰オリーブ	-	
	52	土坑４号	C-204	II	縄文系土器群	坪	-	口縁	-	-	-			オリーブ灰	オリーブ灰	-	
	53	土坑４号	C-204	II	縄文系土器群	坪	IV	口縁	-	-	-			灰	灰	-	
	54	土坑４号	C-204	一括	縄文系土器群	香炉	V ？	口縁	-	-	-			オリーブ灰	オリーブ灰	-	No.10と同一個体か

第21表　土坑６号出土遺物観察表

挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm） 口径（最大長）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	文様・調整 （外）	（内）	色調 （外）	（内）	重量(g)	備考
第32図	55	土坑６号	B-204		縄文系土器群	壺	V	口縁	-	-	-			オリーブ灰	オリーブ灰	-	ドット№２
	56	土坑６号	B-204	一括	磁器	皿	-	胴	-	-	-			にぶい黄橙	浅黄橙	-	溝状遺構１号と接合
	57	土坑６号	B-204		磁器	皿	-	胴	-	-	-			にぶい黄橙	浅黄橙	-	ドット№１
	58	土坑６号	B-204		石器	磨石？	泥岩	-	(7.7)	(6.0)	(2.0)	-	-	-	-	113	ドット№３

第22表　土坑７号出土遺物観察表

挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm） 口径（最大長）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	文様・調整 （外）	（内）	色調 （外）	（内）	重量(g)	備考
第34図	59	土坑７号	C-206	I	磁器	皿	-	口縁	19.2	-	-	-	-	-	-	-	土坑５号・溝状遺構１号出土の磁器類と接合
	60	土坑７号	C-206	I	磁器	皿	-	口縁	18	-	-	-	-	-	-	-	P111出土の磁器類器と接合
	61	土坑７号	C-206	I	石器	砥・敲石	砂岩	-	(11.3)	(8.5)	(4.9)	-	-	-	-	575	

土坑９号（第36図・第37図62～72・第23表）

C-205区で検出した．長軸1.64ｍ×短軸0.88ｍの不定形を呈する土坑である．深さは0.48ｍである。

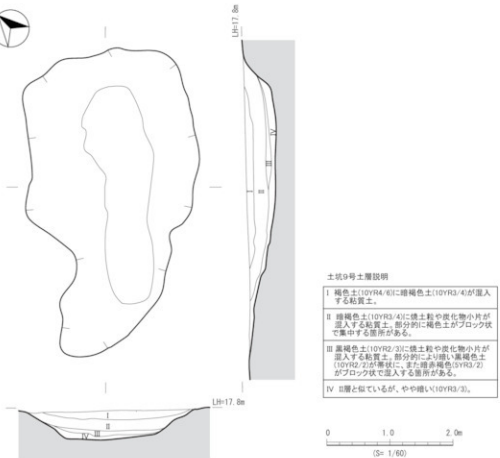
第37図62～72は出土した遺物を図化したものである。62～64は雷文帯が施された龍泉窯系青磁椀である。厚い釉が施されている。65は龍泉窯系青磁椀の底部である。畳付まで施釉が見られ，内底部は露胎している。66は龍泉窯系青磁の盤である。２次的に被熱した可能性があり，釉の表面にざらつきがみられる。釉色は浅黄色を呈している。67は軽石である。平滑面があり，砥石として使用された可能性がある。68は軽石である。U字型の溝が1条はしる。69・70は粘土塊である。平坦面があり，被熱している。71・72は鉄製品である。

このほか，この遺構より出土した掲釉陶器は，土坑７号と溝状遺構２号から出土していたものと接合した（第34図59）。また，小片の為図化しなかった龍泉窯系青磁椀１点が，土坑４号より出土したものと接合している。自然遺物に関しては，貝類やアオダイ属の魚骨，ウシやウマなどの獣骨が出土した。

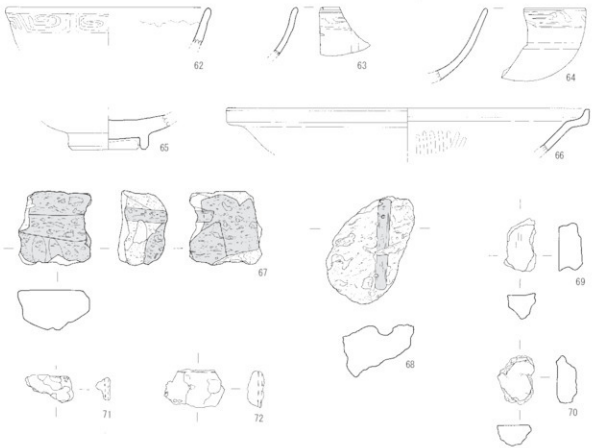
遺物の接合状況から，土坑４号・７号，溝状遺構２号はこの遺構と同時期に廃棄された可能性が高い。溝状遺構２号はこの遺構の南に隣接し，さらにその南側に隣接して土坑７号，東側に土坑４号がある。

Ⅱ層より出土した炭化材を年代測定及び樹種同定を行い，年代は較正年代500±20BPと樹種はオオバヤシ近似種に同定される結果を得た。

出土した青磁や放射線炭素年代測定などから，時期は15世紀初め～中頃の遺構と考えられる。なお，この土坑は焼土跡９号と重複しており，焼土跡９号より古い。



第 36 図　土坑９号



第 37 図　土坑 9 号出土遺物

第23表　土坑 9 号出土遺物観察表

挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm）			文様・調整		色調		重量(g)	備考
									口径（最大長）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	（外）	（内）	（外）	（内）		
第37図	62	土坑 9 号	A-205	I	縄文深系青磁	桐	V	口縁	16.2	-	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	
	63	土坑 9 号	A-205	III	縄文深系青磁	桐	V	口縁	-	-	-	-	-	暗オリーブ	暗オリーブ	-	
	64	土坑 9 号	A-205	II	縄文深系青磁	桐	V	口縁	-	-	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	
	65	土坑 9 号	A-205	II	縄文深系青磁	桐	V	底部	-	-	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	
	66	土坑 9 号	A-205	II	縄文深系青磁	盤	V	口縁	26.4	-	-	-	-	浅黄色	浅黄色	-	
	67	土坑 9 号	A-205	II	石器	-	軽石	-	(5.8)	(5.7)	(3.2)	-	-	-	-	27	使用痕あり（3 面）
	68	土坑 9 号	A-205	一括	石器	-	軽石	-	(7.6)	(5.8)	(3.6)	-	-	-	-	38	U 字溝 1 条
	69	土坑 9 号	A-205	II	粘土塊	-	-	-	(4.2)	(2.5)	(1.9)	-	-	-	-	17	平坦部あり、被熱している。
	70	土坑 9 号	A-205	II	粘土塊	-	-	-	(3.8)	(2.6)	(1.6)	-	-	-	-	11	平坦部あり、被熱している。
	71	土坑 9 号	A-205	II	鉄製品	-	-	-	(3.6)	(2.1)	(1.1)	-	-	-	-	8	
	72	土坑 9 号	A-205	II	鉄製品	-	-	-	(4.6)	(2.9)	(1.2)	-	-	-	-	19	

（3）焼土跡

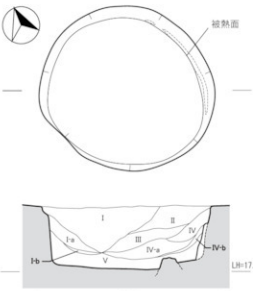
A地区では焼土跡は9基検出した。円形を呈するものが多く，そのうち4基は炭窯と考えられる。焼土跡1・2・4～9号は土壌サンプルを採取し，オオムギやムギ類，アワなどの炭化した植物遺体を検出した。

焼土跡1号（第38図・第39図73～78・第24表）

B-202区で検出した，直径0.94ｍの円形をした土坑である。深さは0.34ｍを測る。壁面は被熱作用で赤色化しており，底には炭化物が集中する層（Ⅴ層）が堆積している。

第39図73～78は焼土跡1号から出土した遺物である。73は産地の不明の青磁椀の腰部である。釉はオリーブ灰色がかった透明であり，内底部及び外面高台付近は釉の剥ぎ取りが見られる。胎土は灰白色で緻密である。74は龍泉窯系青磁椀の底部である。畳付けまで施釉されているが，外底部は露胎している。75～77は粘土塊である。被熱しており，片側平坦部には何かを押し当てられた様な痕跡が残る。78は鉄滓である。磁力はない。

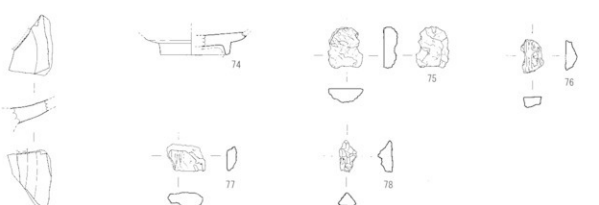
出土遺物から，時期は14世紀後半～15世紀初め頃の遺構と考えられる。



焼土跡1号土層説明

I　暗褐色土(10YR3/3)に褐色土(10YR4/4)が小ブロック状で混入する粘質土。
I-a　I層の土に焼土塊が混入する。
I-b　焼土塊堆積。
II　暗褐色粘質土(10YR3/3)に炭が多く混入する。
III　II層に似ているが，炭が入らない。
IV　I層に似ているが，褐色土がより多く混ざり全体として明るく見える。
IV-a　I層に似ているが，褐色土がより多く混ざり焼土塊などが混入する。
IV-b　焼土塊堆積。
V　炭の堆積層

第38図　焼土跡1号



第39図　焼土跡1号出土遺物

第24表　焼土跡1号出土遺物観察表

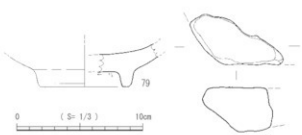
挿図No.	遺物番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm） 口径（最大長）	直径（最大幅）	器高（最大厚）	文様・調整 内面（内）	文様・調整 外面（内）	色調 外面（外）	色調 内面（内）	重量(g)	備考
第39図	73	焼土跡1号	B-201	一括	青磁	椀	底	腰	-	-	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	
	74	焼土跡1号	B-201	1	龍泉窯系青磁	椀	Ⅳ	底部	-	6	-	-	-	にぶい黄	にぶい黄	-	外底部釉剥ぎ
	75	焼土跡1号	B-201	一括	粘土塊	-	-	-	(3.1)	(2.7)	(1.1)	-	-	明赤褐	暗赤褐	8	平坦部あり，被熱している。
	76	焼土跡1号	B-201	一括	粘土塊	-	-	-	(2.7)	(1.6)	(1.0)	-	-	赤褐	黒褐	3	平坦部あり，被熱している。
	77	焼土跡1号	B-201	一括	粘土塊	-	-	-	(2.6)	(2.0)	(1.3)	-	-	黒褐	褐	7	平坦部あり，被熱している。
	78	焼土跡1号	B-201	1	鉄滓	-	-	-	(2.4)	(1.4)	(1.1)	-	-	-	-	4	磁力なし

焼土跡２号（第40図79～80・第41図・第25表）

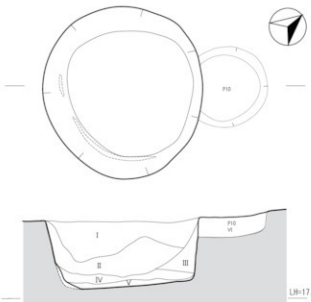
B-202区で検出した，直径0.85mの円形をした土坑である。深さは0.48mを測る。壁面は被熱作用で赤色化しており，底には炭化物が集中する層（V層）が堆積している。

第40図79・80は焼土跡２号から出土した遺物である。79は龍泉窯系青磁椀である。釉は厚くぼってりしており，高台内まで施釉されている。外底部は釉剥ぎされている。80は砂岩を石材とする磨石である。

時期は，出土している遺物から15世紀初め～中頃と考えられる。



第40図　焼土跡２号出土遺物



焼土跡2号土層説明

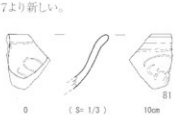
I　暗褐色土(10YR3/3)に褐色土(10YR4/4)が小ブロック状で混入する粘質土，焼土粒や炭化物小片が混入する。
II　暗褐色粘質土(10YR3/3)，焼土粒や炭化物小片が混入する。
III　暗褐色土(10YR3/3)に褐色土(10YR4/4)が混入する粘質土，焼土粒や炭化物小片が混入する。Ⅰ層と似ているが，褐色土がより多く混入し，全体的に明るく見える。
IV　炭化物と焼土塊が集中する層。
V　炭の堆積層
VI　P10埋土，暗褐色土(10YR3/3)に0.2～0.5mmの褐色土(10YR4/4)が混入する粘質土，III層と似ているが，III層より明るく見える。

第41図　焼土跡２号

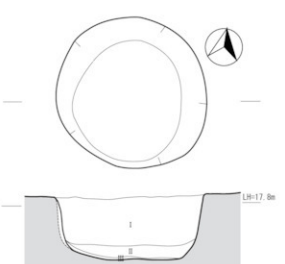
焼土跡３号（第42図81・第43図・第26表）

A-204区で検出した，直径0.8mの円形をした土坑である。深さは0.45mを測る。壁面は被熱作用で赤色化しており，底には炭化物が集中する層（Ⅲ層）が堆積している。

出土遺物に刻花文を施した龍泉窯系青磁（第42図81）や，小片のため図化しなかった褐釉陶器壺，獣骨などがあり，15世紀初め～中頃の遺構と考えられる。なお，この遺構はP77と重複しており，P77より新しい。



第42図　焼土跡３号出土遺物



焼土跡3号土層説明

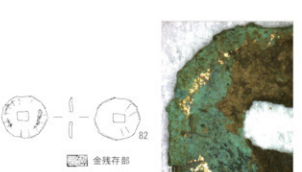
I　黒褐色土(7.5YR3/2)に炭化物が多く入る。
II　炭と焼土塊の堆積層。
III　炭集中層。

第43図　焼土跡３号

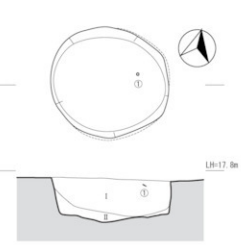
焼土跡４号（第44図82・第45図・第27表）

B-205区で検出された，直径0．62ｍの円形をした土坑である。深さは0．23ｍを測る。壁面は被熱作用で赤色化しており，底には炭や焼けた粘土塊などが堆積する層（Ⅱ層）が見られた。

遺物は，Ⅰ層より菊座（環座）と思われる金が施された銅製品が出土した（第44図82）。また，哺乳類と思われる獣骨や，土壌サンプルからはオオムギの炭化種子が出土している。この遺構は，溝状遺構２号と重複しており，溝状遺構２号より新しい。



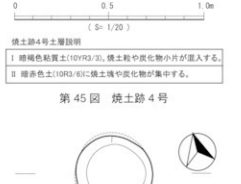
第44図　焼土跡４号出土遺物



第45図　焼土跡４号

焼土跡５号（第46図）

A-204区で検出された，直径0．4ｍの円形をした土坑である。深さは0．1ｍを測る。壁面は被熱作用で赤色化しており，底には炭化物の集中する層（Ⅱ層）が見られた。遺物は出土していない。



第46図　焼土跡５号

第25表　焼土跡２号出土遺物観察表

挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm） 口径（最大長）	計測値（cm） 底径（最大幅）	計測値（cm） 器高（最大厚）	文様・調整 （外）	文様・調整 （内）	色調 （外）	色調 （内）	重量(g)	備考
第40図	79	焼土跡２号	B-202	一括	縄文実系青磁	椀	V	底部	-	7.6	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	外底部釉剥ぎ
	80	焼土跡２号	B-202	一括	石器	磨石	砰岩	-	(5.5)	(3.7)	(3.5)	-	-	-	-	88	

第26表　焼土跡３号出土遺物観察表

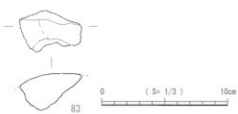
挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm） 口径（最大長）	計測値（cm） 底径（最大幅）	計測値（cm） 器高（最大厚）	文様・調整 （外）	文様・調整 （内）	色調 （外）	色調 （内）	重量(g)	備考
第41図	81	焼土跡３号	A-204	一括	縄文実系青磁	椀	V	口縁	-	-	-	刻花文	刻花文	オリーブ灰	オリーブ灰	-	

第27表　焼土跡４号出土遺物観察表

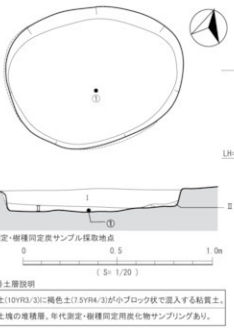
挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm） 口径（最大長）	計測値（cm） 底径（最大幅）	計測値（cm） 器高（最大厚）	文様・調整 （外）	文様・調整 （内）	色調 （外）	色調 （内）	重量(g)	備考
第44図	82	焼土跡４号	B-205	1	銅製品	菊座?	-	-	(2.5)	(2.3)	(0.2)	-	-	-	-	1	

焼土跡6号(第47図83・第48図・第28表)

C-205区で検出した。長軸0.95m×短軸0.74mの楕円形をした土坑である。深さは0.13mを測る。壁面は被熱作用で赤色化しており、底には焼土塊や炭が集中する層(Ⅱ層)が堆積している。遺物は砂岩を石材とする磨石が一点出土した(第47図83)。また、土壌サンプルからは、オオムギやアワの炭化種子が検出された。Ⅱ層出土の炭化材を放射性炭素年代測定と樹種同定を行い、年代は補正年代710±30BPと樹種は針葉樹のマツ属複維管束亜属と同定される結果を得た。



第47図　焼土跡6号出土遺物



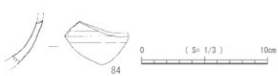
焼土跡6号土層説明

Ⅰ 暗褐色土(10YR3/3)に褐色土(7.5YR4/3)が小ブロック状で混入する粘質土。
Ⅱ 炭と焼土塊の堆積層。年代測定・樹種同定用炭化物サンプリングあり。

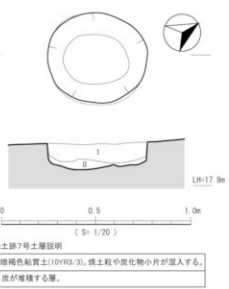
第48図　焼土跡6号

焼土跡7号(第49図84・第50図・第29表)

C-205区で検出した。直径0.53mの円形をした土坑である。壁面は被熱作用で赤色化しており、底部には炭化物が集中する層が堆積している。遺物は、ピロースクタイプ白磁椀が1点出土している(第49図84)。また、土壌サンプルからはイネやオオムギの炭化種子を検出した。



第49図　焼土跡7号出土遺物



焼土跡7号土層説明

Ⅰ 暗褐色粘質土(10YR3/3)。焼土粒や炭化物小片が混入する。
Ⅱ 炭が堆積する層。

第50図　焼土跡7号

第28表　焼土跡6号出土遺物観察表

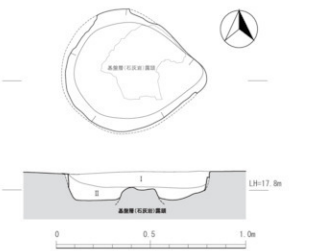
挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値(cm) 口径(最大長)	計測値(cm) 底径(最大幅)	計測値(cm) 器高(最大厚)	文様・調整 (外)	文様・調整 (内)	色調 (外)	色調 (内)	重量(g)	備考
第47図	83	焼土跡6号	C-205	一括	石器		磨石	砂岩	-	(4.9)	(3.1)	(2.8)	-	-	-	-	35	小片

第29表　焼土跡7号出土遺物観察表

挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値(cm) 口径(最大長)	計測値(cm) 底径(最大幅)	計測値(cm) 器高(最大厚)	文様・調整 (外)	文様・調整 (内)	色調 (外)	色調 (内)	重量(g)	備考
第49図	84	焼土跡7号	C-205	1	中世白磁	椀	ピロースク	胴	-	-	-	-	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	-	

焼土跡８号（第51図）

A-204区で検出した，長軸0.75ｍ×短軸0.64ｍの楕円形をした土坑である。深さは0．15ｍを測る。壁面は被熱作用で赤色化しており，底には炭化物が集中する層(II層)が堆積している。遺物は出土していない。



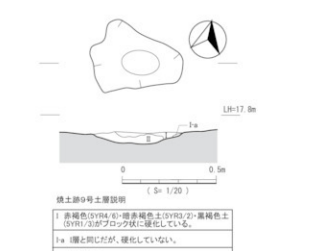
焼土跡８号土層説明

I 黒褐色土(7.5YR3/2)に褐色土(7.5YR4/4)が小ブロックで混入する粘質土。焼土塊や炭化物が混入する。
II 炭の堆積層。

第51図　焼土跡８号

焼土跡９号（第52図）

A-205区で検出した，長軸0.48ｍ×短軸0.38ｍの不定形をした土坑である。深さは0．07ｍである。土坑は被熱作用で赤色化した部分がほとんどを占める。上部は畑の耕作で削られた可能性がある。土器や石器は出土していないが，土壌サンプルよりオオムギ片を検出している。なお，この遺構は土坑９号と重複しており，土坑９号より新しい。



焼土跡９号土層説明

I 赤褐色(5YR4/6)-暗赤褐色土(5YR3/2)・黒褐色土(5YR1/3)がブロック状に硬化している。
I-a I層と同じだが，硬化していない。
II 赤褐色土(5YR4/6)。

第52図　焼土跡９号

（４）溝状遺構

A地区では溝状遺構を２条検出した。いずれの遺構も段丘周縁部に位置し，ピットや土坑などがその内側にしか出土しない点から区画として機能していた可能性が考えられる。時期は出土遺物から14世紀後半～15世紀中頃と考えられる。

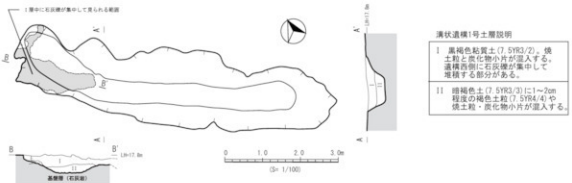
溝状遺構１号（第53図・第54図85～100・第30表）

C-203･204区で検出した，長軸約8.4ｍ×幅約2.1ｍの東西方向に軸を持つ，深さ約0.5ｍの遺構である。段丘南側の周縁部に位置し，この遺構より南側は崖になっている。遺構の西端部には，I層中に石灰礫が集中する範囲がある。

出土遺物は蓮弁文や雷文帯が施された龍泉窯系青磁椀やピロースタイプ白磁椀，褐釉陶器，石器，軽石，鉄滓などが出土している。第54図85～100は溝状遺構１号から出土した遺物である。85～91は龍泉窯系青磁椀である。85は内面に刻花文，外面に雷文帯と刻花文が施されている。やや厚い釉が施されている。86は玉縁状口縁を持ちやや厚い釉が施されている。87は無文外反椀である。厚い釉が施されている。88･89はやや外反する口縁を持ち，薄い釉が施されている。89は掘立柱建物跡９号P１出土の青磁椀（第22図29）と胎土・施釉が類似しており，接合はしていないが同一個体の可能性が高い。90は底部である。オリーブ灰色に近い透明な釉で薄く施釉されている。施釉は高台外面にとどまり，畳付及び外底部は施釉されていない。内底部には印花文を有する。91は底部である。高台部は欠損している。２次的に被熱した可能性があり，釉の表面にざらつきがみられる。釉色はくすんだ灰オリーブ色である。内底部および外底部に釉剥ぎが見られる。92は龍泉窯系青磁坏である。外面に蓮弁文，内底部に圧文を有する。釉はやや厚く，高台内部まで施釉されている。ただし，内底部は釉剥ぎが見られる。93･94はピロースタイプ白磁椀である。95は凝灰岩を石材とする磨敲石である。全面に敲打痕が見られる。96は安山岩を石材とする磨敲石である。上面と側面に敲打痕が見られる。97は軽石製品である。棯状を呈し，内面には削られたような痕跡がある。98･99は楕型滓である。磁力はない。100は螺蓋製敲打具と考えられるヤコウガイの蓋である。

これらのほか，I層より出土した掲輪陶器は土坑６号出土のものと接合した（第32図56）。

遺物の接合状況から，掘立柱建物跡９号と土坑６号はこの遺構と同時期に廃棄された可能性が高い。掘立柱建物跡９号はこの遺構の北西側に隣接し，土坑６号は北西側約15ｍに位置している。



第 53 図　溝状遺構 1 号

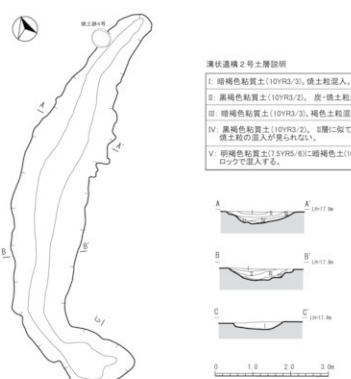
第 54 図　溝状遺構 1 号出土遺物

溝状遺構２号（第55図・第56図101～112・第31表）

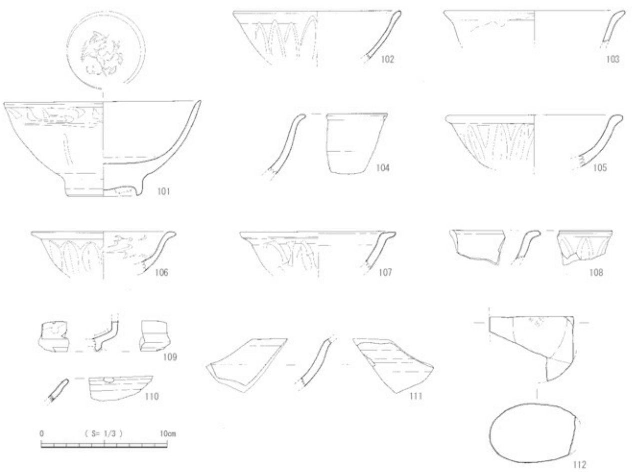
B-C-205区で検出した。長軸約10.0m×幅約2.2mの南北の軸を持つ，L字型をした溝である。深さはおよそ0.3mである。段丘西側の周縁部に位置し，この遺構より西側及び南側は段丘の緩やかな崖になっている。この遺構は，焼土跡４号と重複しており，焼土跡４号よりも古い。

第56図101～112は溝状遺構２号から出土遺物である。101～104は龍泉窯系青磁椀である。101は外面に雷文帯が，内底部には印花文が施されている。施釉はやや厚く高台内部まで施され，外底部に釉剥ぎが見られる。Ⅰ層出土の口縁部とⅡ層出土の底部が接合した。102は外面に蓮弁文を有し，厚めの釉が施されている。釉の表面にざらつきがみられることから，２次的に被熱した可能性がある。103・104は無文外反椀の口縁部である。やや厚めの釉が施されている。103は外面に釉だれが見られる。釉の表面にざらつきがみられることから，２次的に被熱した可能性がある。105～107は龍泉窯系青磁坏である。105は鎬蓮弁文坏である。106は外面に鎬蓮弁文，内面に刻花文を有する。厚い釉が施されている。107は外面に蓮弁文が施されている。釉は明緑灰色がかった透明で，薄く施されている。胎土は灰白色で緻密である。108は外面に無鎬蓮弁文を有する。厚い釉が施されている。109は香炉の底部である。やや厚い釉が施されている。内面は胴部まで施釉されているが，底部は露胎している。外面は畳付及び高台内面に釉剥ぎが見られる。110・111はゼロースクタイプ白磁椀である。112は砂岩を石材とする磨敲石である。上面にわずかな敲打痕がある。

その他，遺構一括で取り上げた龍泉窯系青磁椀１点は，土坑４号出土のものと接合した（第30図47）。また，掲軸陶器は土坑７号と土坑９号出土のものと接合している（第32図57）。



第55図　溝状遺構２号



第 56 図　溝状遺構 2 号出土遺物

第30表　溝状遺構 1 号出土遺物観察表

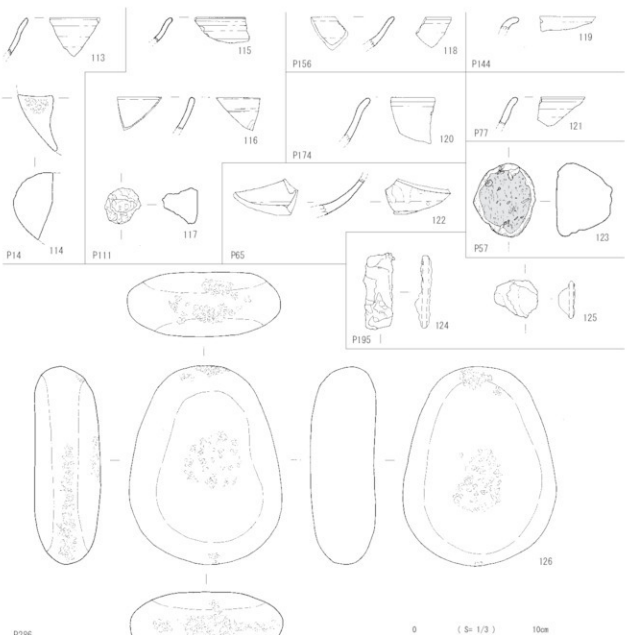
挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm） 口径（最大長）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	文様・調整（外）	文様・調整（内）	色調（外）	色調（内）	重量(g)	備考
第54図	85	溝状遺構 1 号	C-203	Ⅰ	龍泉窯系青磁	椀	-	口縁	14.8	-	-	雷・刻花	刻花文	黄褐	黄褐	-	
	86	溝状遺構 1 号	C-203	Ⅰ	龍泉窯系青磁	椀	Ⅴ	口縁	19	-	-	-	-	灰白	灰白	-	玉縁状口縁
	87	溝状遺構 1 号	C-203	Ⅰ	龍泉窯系青磁	椀	Ⅴ	口縁	18.6	-	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	玉縁状口縁
	88	溝状遺構 1 号	C-203	Ⅰ	龍泉窯系青磁	椀	Ⅳ	口縁	-	-	-	-	-	灰	灰	-	
	89	溝状遺構 1 号	C-203	Ⅰ	龍泉窯系青磁	椀	Ⅳ	口縁	-	-	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	No.29 と同一個体か？
	90	溝状遺構 1 号	C-203	Ⅰ	龍泉窯系青磁	椀	-	底部	-	5.6	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	
	91	溝状遺構 1 号	C-204・205	一括	龍泉窯系青磁	椀	-	底部	-	7.6	-	釉剥ぎ	釉剥ぎ	灰オリーブ	灰オリーブ	-	外底部・内底部釉剥ぎ
	92	溝状遺構 1 号	C-203	Ⅰ	龍泉窯系青磁	坏？	Ⅳ'	-	11.2	5.2	7.4	無鎬蓮弁	卍文	にぶい橙	オリーブ灰	-	内底部釉剥ぎ
	93	溝状遺構 1 号	C-203	Ⅰ	中世白磁	椀	ビロースクⅡ	口縁	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	
	94	溝状遺構 1 号	C-203	Ⅰ	中世白磁	椀	ビロースクⅡ	口縁	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	
	95	溝状遺構 1 号	C-204	Ⅲ	石器	磨・敲石	泥岩	-	(11.5)	(4.8)	(4.9)	-	-	-	-	473	全面に敲打痕あり
	96	溝状遺構 1 号	C-203	Ⅰ	石器	磨・敲石	安山岩	-	(9.2)	(5.1)	(4.8)	-	-	-	-	311	上面に敲打痕がのこる
	97	溝状遺構 1 号	C-203	Ⅰ	石器	-	軽石	-	(10.3)	(6.3)	(3.9)	-	-	-	-	83	中央に凹みがありお椀状を呈する
	98	溝状遺構 1 号	C-203	Ⅰ	鉄滓	-	-	-	(5.2)	(5.0)	(2.2)	-	-	-	-	68	磁力なし
	99	溝状遺構 1 号	C-203	Ⅰ	鉄滓	-	-	-	(4.9)	(3.1)	(1.7)	-	-	-	-	28	磁力なし
	100	溝状遺構 1 号	C-204	Ⅲ	貝	敲打具	ヤコウガイ	蓋	(7.9)	(6.4)	(2.2)	-	-	-	-	127	打痕あり

第31表　溝状遺構 2 号出土遺物観察表

挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm） 口径（最大長）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	文様・調整（外）	文様・調整（内）	色調（外）	色調（内）	重量(g)	備考
第56図	101	溝状遺構 2 号	C-205	Ⅱ	龍泉窯系青磁	椀	Ⅴ	口縁	15.6	5.5	7.4	雷文帯	印花文	オリーブ灰	オリーブ灰	-	溝状遺構 2 号出土の青磁と接合
	102	溝状遺構 2 号	C-205	Ⅱ	龍泉窯系青磁	椀	Ⅳ'	口縁	13.4	-	-	無鎬蓮弁	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	
	103	溝状遺構 2 号	C-205	Ⅰ	龍泉窯系青磁	椀	-	口縁	14.4	-	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	口縁付近釉だれ
	104	溝状遺構 2 号	C-205	Ⅱ	龍泉窯系青磁	椀	Ⅳ'	口縁	-	-	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	
	105	溝状遺構 2 号	C-205	Ⅰ	龍泉窯系青磁	坏	-	口縁	-	6.2	-	鎬蓮弁	-	緑白	緑白	-	鎬蓮弁　浮彫＆稜なし
	106	溝状遺構 2 号	C-205	Ⅱ	龍泉窯系青磁	坏	Ⅳ'？	口縁	11.6	-	-	鎬蓮弁	刻花文	緑白	緑白	-	
	107	溝状遺構 2 号	C-205	Ⅰ	龍泉窯系青磁	坏	Ⅳ'？	口縁	12.4	-	-	無鎬蓮弁	-	明緑灰	明緑灰	-	
	108	溝状遺構 2 号	C-205	Ⅳ	龍泉窯系青磁	坏	Ⅴ		-	-	-	無鎬蓮弁	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	
	109	溝状遺構 2 号	B-205	Ⅱ	龍泉窯系青磁	香炉	-	底部	-	-	-	-	-	緑白	灰白	-	
	110	溝状遺構 2 号	C-205	Ⅰ	白磁	椀	ビロースク	口縁	-	-	-	-	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	-	
	111	溝状遺構 2 号	C-205	Ⅰ	白磁	椀	ビロースク	胴	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	
	112	溝状遺構 2 号	B-205	Ⅱ	石器	磨・敲石	砂岩		(6.7)	(5.1)	(4.6)	-	-	-	-	162	片面に敲打痕

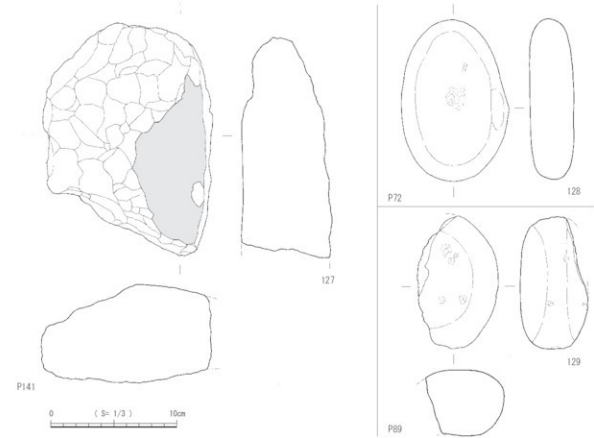
（5）ピット内出土遺物（第57・58図・第32・33表）

第57・58図は、A地区ピット内から出土した遺物である。調査区からは、228基のピットを検出した。ピットは調査区全体的に広がっているが、溝状遺構などがある西側に比較的多く見られる（第7図参照）。113・114はP14出土の遺物である。113はビロースクタイプ白磁椀である。114は砂岩を石材とする敲石である。上面に敲打痕が見られる。115～117はP 111出土の遺物である。115は龍泉窯系青磁椀の口縁部である。施釉は薄い。116は龍泉窯系青磁椀の口縁部である。蓮弁文らしき文様が施されている。やや厚い釉が施されている。117は鉄滓である。磁力はない。118はP 156出土の龍泉窯系青磁椀である。やや厚い釉が施されている。119はP 144出土の龍泉窯系青磁椀である。口縁は外反し、釉は厚く施されている。120はP174出土の龍泉窯系青磁椀である。口縁は外反し、釉は厚く施されている。121はP77出土の白磁椀である。ビロースクタイプの可能性がある。122はP 67出土のビロースクタイプ白磁椀の腰部である。123はP 57出土の軽石製品である。平坦面があり、磨石として使用された可能性がある。124・125は鉄製品である。P 195から出土した。126は出土の砂岩を石材とする磨敲石である。上面に敲打痕が見られる。P 286から出土した。127は



第57図　A地区ピット内出土遺物（1）

P 141から出土した安山岩を石材とする磨石である。側面には石材形成のためか打ち欠いた痕跡が残る。128は砂岩を石材とする磨敲石である。上面中央部に敲打痕が見られる。P 72から出土した。129は砂岩を石材とする磨敲石である。上面・側面に敲打痕が見られる。P89から出土した。



第58図　A地区ピット内出土遺物（2）

第32表　A地区ピット出土遺物観察表（1）

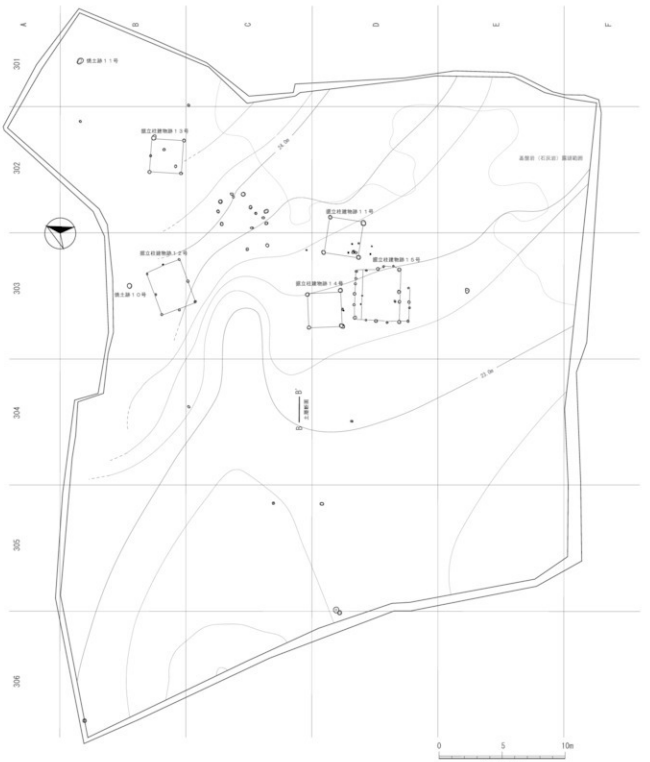
挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm） 口径（最大長）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	文様・調整 （外）	（内）	色調 （外）	（内）	重量(g)	備考
第57図	113	P0014	B 203	一括	中世白磁	椀	ビロースク	口縁	-	-	-	-	-	浅黄	浅黄	-	
	114	P0014	B 203	一括	石器	磨・敲石	砂岩	-	(4.0)	(2.8)	(3.1)	-	-	-	-	53	
	115	P0111	A 204	一括	鐵柴葉系青磁	椀	IV ？	口縁	-	-	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	
	116	P0111	A 204	一括	鐵柴葉系青磁	椀	IV ？	口縁	-	-	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	
	117	P0111	A 204	I	鉄滓	-	-	-	(2.8)	(2.8)	(2.8)	-	-	-	-	21	磁力なし　ドットNo.2
	118	P0156	B 204	一括	鐵柴葉系青磁	椀	IV ？	口縁	-	-	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	
	119	P0144	B 204	一括	鐵柴葉系青磁	椀	V	口縁	-	-	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	
	120	P0174	B 205	一括	鐵柴葉系青磁	椀	V	口縁	-	-	-	-	-	緑灰	緑灰	-	
	121	P0077	A 204	一括	中世白磁	椀	ビロースク	口縁	-	-	-	-	-	浅黄	浅黄	-	
	122	P0065	B 203	一括	中世白磁	椀	ビロースク	胴	-	-	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	
	123	P0057	A 204	一括	石器	磨石？	軽石	-	(5.8)	(4.8)	(4.4)	-	-	-	-	39	
	124	P0195	B 204	一括	鉄製品	-	-	-	(5.8)	(2.3)	(1.1)	-	-	-	-	21	
	125	P0195	B 204	一括	鉄製品	-	-	-	(3.4)	(3.0)	(1.3)	-	-	-	-	121	
	126	P0286	B 204	一括	石器	磨・敲石	安山岩	-	(15.7)	(12.0)	(5.0)	-	-	-	-	1684	6面ともに敲打跡あり

第33表　A地区ピット出土遺物観察表（2）

挿図No.	掲載番号	出土遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm） 口径（最大長）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	文様・調整 （外）	（内）	色調 （外）	（内）	重量(g)	備考
第58図	127	P0141	B 204	一括	石器	磨石	安山岩	-	(17.2)	(13.5)	(7.0)	-	-	-	-	2400	
	128	P0072	B 204	一括	石器	磨・敲石	砂岩	-	(12.8)	(8.5)	(3.5)	-	-	-	-	602	
	129	P0089	B 203	一括	石器	磨・敲石	砂岩	-	(10.4)	(6.4)	(5.2)	-	-	-	-	445	上面、側面に敲打痕

2．B地区

表土及びⅡ層の除去後，遺構検出を行い，掘立柱建物跡５棟・焼土跡２基・ピット87基を検出した。遺構完掘後，調査区中央付近から南西部にかけて地形的に低くなる部分に堆積していたⅢ・Ⅳ層の掘り下げを行ったが，遺構は検出されなかった。



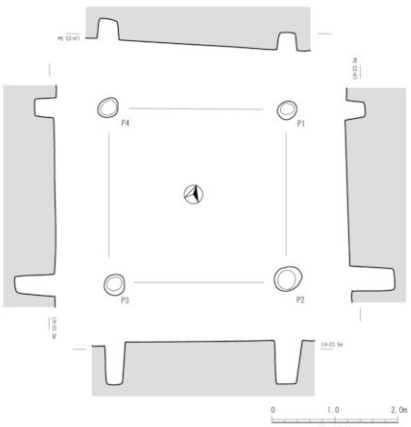
第59図　中増遺跡　B地区遺構配置図

（1）掘立柱建物跡

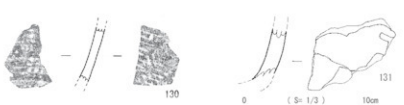
検出した掘立柱建物跡5棟のうち，3棟が1×1間の4本柱建物跡であった。残りの2棟については，2×2間と2面に庇を持つ可能性のある4×3間の掘立柱建物跡である。出土遺物は概して少なく，滑石混入土器2点とカムィヤキ壺の胴部1点のほかは土器や粘土塊のなどの小片のみであった。以下，B地区で検出した掘立柱建物跡の詳細を述べる。

掘立柱建物跡11号（第60図・第61図130・131・第34・35表）

D-302・303区で検出している，1×1間の建物跡である。柱穴の大きさは直径平均約0.3mであり，深さは平均約0.5mである。柱穴からは，穀物痕らしきあとの残るカムィヤキ（第61図130）や滑石製石鍋の模倣品と思われる滑石混入土器（第61図131）が出土している。



第60図　掘立柱建物跡11号



第61図　掘立柱建物跡11号出土遺物

第34表　掘立柱建物跡11号計測表

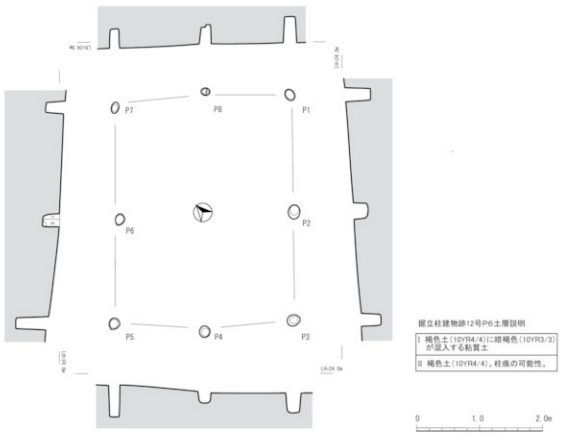
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	280	平均	-	P1-P2	285	平均	-	方角：N18° W	P 3 ：カムィヤキ（1）
P2-P3	280	平均	-	P3-P4	276	平均	-		P 4 ：滑石混入土器（1）

第35表　掘立柱建物跡11号出土遺物

挿図No.	遺物番号	出土遺構名	出土区	層位	分類Ⅰ	分類Ⅱ	分類Ⅲ	部位	計測値（cm） 口径（最大長）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	文様・調整 （外）	（内）	色調 （外）	（内）	重量(g)	備考
第61図	130	掘立11号 P3	D-303	一括	カムィヤキ	壺	-	胴	-	-	-	平行	平行	灰	灰		穀物痕？
	131	掘立11号 P4	D-303	一括	滑石混入土器	鍋	-	胴	-	-	-	-	-	黒褐	褐灰		

掘立柱建物跡12号（第62図・第36表）

B-C－303区で検出している，2×2間の建物跡である。柱穴の大きさは直径平均約0.15mである。深さはそれぞれであるが，建物の角となる柱穴は比較的深く約0.5mを測り，その他のものは平均約0.2mである。柱穴から遺物は出土していない。



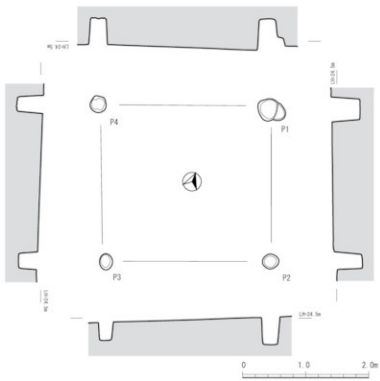
第 62 図　掘立柱建物跡 12 号

第36表　掘立柱建物跡12号計測表

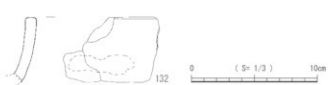
梁行１	寸法	梁行２	寸法	桁行１	寸法	桁行２	寸法	備考	遺物
P1-P7	281	平均	141	P1-P3	359	平均	179		
P3-P5	285	平均	144	P5-P7	348	平均	175		
P1-P8	137			P1-P2	182			方角：N 42° E	
P8-P7	144			P2-P3	175				
P3-P4	143			P5-P6	162				
P4-P5	144			P6-P7	187				

掘立柱建物跡13号（第63図・第64図132・第37・38表）

B-302区で検出している，1×1間の建物跡である。柱穴の大きさは直径平均約0.3ｍであり，深さは平均約0.5ｍである。柱穴からは，滑石混入土器（第64図132）が1点出土した。



第63図　掘立柱建物跡13号



第64図　掘立柱建物跡13号出土遺物

第37表　掘立柱建物跡13号計測表

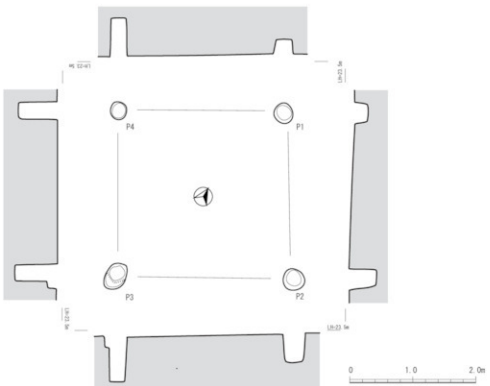
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	271	平均	-	P1-P2	247	平均	-	方角：N 22° W	P 3 ：滑石混入土器（1）
P2-P3	268	平均	-	P3-P4	249	平均	-		

第38表　掘立柱建物跡13号出土遺物

挿図No.	遺物番号	出土遺構名	出土区	層位	分類 L1	分類 L2	分類 L3	部位	計測値（cm） 口径（最大長）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	文様・調整 （外）	（内）	色調 （外）	（内）	重量（g）	備考
第64図	132	掘立 13 号 P3	C-302	一括	滑石混入土器	鍋？	-	口縁				-	ナデ	明赤褐	明赤褐		疑似口縁の可能性あり

掘立柱建物跡14号（第65図・第39表）

B･C－303区で検出している，1×1間の建物跡である。柱穴の大きさは直径平均約0.3mであり，深さはそれぞれであるが，深いもので約0.6mを測り，平均約0.5mである。柱穴から遺物は出土していない。



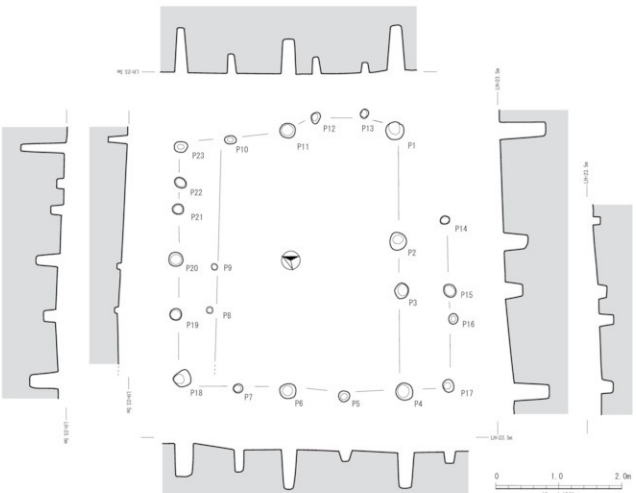
第65図　掘立柱建物跡14号

第39表　掘立柱建物跡14号計測表

梁行1　寸法	梁行2　寸法	桁行1　寸法	桁行2　寸法	備考	遺物
P1-P4　269	平均　-	P1-P2　266	平均　-	方角：N 31° W	
P2-P3　275	平均　-	P3-P4　264	平均　-		

掘立柱建物跡15号（第66図・第40表）

D-303区で検出している，4×3間の建物跡である。北側と南側に柱穴が並んでおり，庇になる可能性が高い。柱穴の大きさは直径平均約0．25ｍであり，深さはそれぞれであるが，深いものでは0.7ｍを測り，平均約0.4ｍである。柱穴からの出土遺物は，土器や粘土塊などがあるが，いずれも小片であり時期を特定できる遺物は出土していない。



第66図　掘立柱建物跡15号

第40表　掘立柱建物跡15号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P10	268	平均	67	P1-P4	414	平均	139		P1：土器（2）
P4-P7	264	平均	88	P7-P10	396	平均	132		P10：粘土塊（3）
P1-P13	51	P4-P5	92	P1-P2	178	P7-P8	120		P15：土器（1）
P13-P12	78	P5-P6	92	P2-P3	82	P8-P9	72		P18：土器（1）
P12-11	46	P6-P7	80	P3-P4	153	P9-P10	204		P19：土器（1）
P11-10	93								
庇部分								方角：N 64° E	
				P14-P17	264	平均	88		
				P18-P23	372	平均	73		
				P14-P15	113	P18-19	102		
				P15-P16	45	P19-P20	90		
				P16-P17	106	P20-P21	79		
						P21-P22	43		
						P22-P23	58		

（2）焼土跡

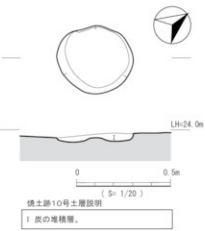
B地区では焼土跡は2基検出した。いずれの焼土跡からも遺物は出土しなかった。

焼土跡10号（第67図）

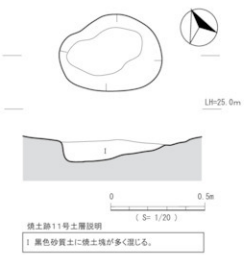
B-303区で検出した，直径0.4mのほぼ円形をした土坑である。深さは0.06mを測る。壁面は被熱作用で一部に赤色化している部分があり，炭化物や焼土が集中する層が堆積している。遺物は出土していない。遺構直上まで耕作土が堆積しており，遺構上部は耕作時に削られた可能性がある。

焼土跡11号（第68図）

B-302区で検出した長軸0.57m×短軸0.41mの円形をした土坑である。深さは0.1mを測る。焼土面は確認できなかったが，炭化物や焼土が多く混入する黒色砂質土が堆積していた。遺物は出土していない。



第67図　焼土跡10号



第68図　焼土跡11号

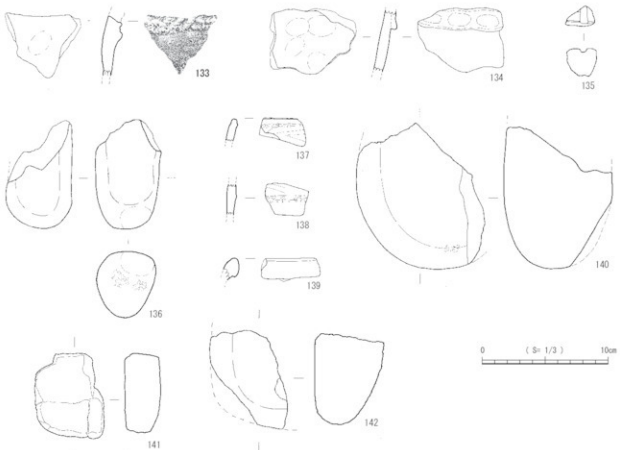
（3）包含層内出土遺物（第69図・第41表）

第69図は，B地区包含層出土の遺物である。包含層からは合わせて552点の遺物が出土しているが，摩耗しているものや小片のものが多く，図化したものは10点である。

133はI層（耕作土）出土の砂質土器の胴部である。口縁に近い部分は肥厚しており，押し引き文が施の目状に施されている。内面には指圧による調整痕が見られる。面縄東洞式の深鉢と考えられる。

134～136はIII層出土の遺物である。134は砂質土器の口縁部に近い胴部である。口縁先端部は摩耗している。口縁部付近は粘土紐の貼り付けによって肥厚させ，指圧によって文様が施されており，内面にはオサエやナデによる調整痕が見られる。仲原式土器の深鉢と考えられる。135は砂岩を石材とする有溝砥石である。136は砂岩を石材とする磨石・敲石である。先端部に敲打痕が見られる。

137～142はIV層出土の遺物である。137は泥質土器の口縁部である。摩耗が激しく文様は明確ではないが，横方向に刺突文を施した突帯を貼り付け，突帯の下には斜行する平行沈線文を施している。面縄西洞式の深鉢と考えられる。138は泥質土器の胴部である。摩耗が激しく文様は明確ではないが，横方向に刻目突帯を貼り付けその下部に平行して連続した刺突文を施している。また，突帯より上部には斜行する平行沈線文が施されている。面縄西洞式の深鉢と考えられる。139は砂質土器の口縁部である。口縁部は粘土紐を張り付けて肥厚させている。140は安山岩を石材とする磨石である。141は砂岩を石材とする磨石である。142は砂岩を石材とする磨敲石である。



第 69 図　B 地区　包含層内出土遺物

第41表　B 地区包含層出土遺物観察表

挿図No.	掲載番号	出土層	出土区	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値（cm）			文様・調整		色調		重量(g)	備考
								口径（最大長）	底径（最大幅）	器高（最大厚）	（外）	（内）	（外）	（内）		
第69図	133	表土	D 303	土器	深鉢	-	胴	-	-	-	押し引き	-	縄	黒縄	-	面縄東洞式
	134	Ⅱ	C 303	土器	鉢？	-	口縁	-	-	-	突帯	オサエ	明赤縄	にぶい黄縄	-	沖原式
	135	Ⅱ	C 303	石器	砥石	砂岩	-	(2.3)	(1.6)	(2.2)	-	-	-	-	8	-
	136	Ⅱ	C 303	石器	磨・製石	砂岩	-	(8.5)	(5.2)	(5.2)	-	-	-	-	211	-
	137	Ⅳ	D 304	土器	鉢？	-	口縁	-	-	-	突帯・沈線	-	橙	橙	-	面縄西洞式
	138	Ⅳ	D 304	土器	鉢？	-	胴	-	-	-	突帯・沈線	-	橙	橙	-	面縄西洞式
	139	Ⅳ	D 305	土器	鉢？	-	口縁	-	-	-	-	-	明赤縄	にぶい黄縄	-	-
	140	Ⅳ	B 305	石器	磨石	安山岩	-	(11.4)	(9.3)	(8.6)	-	-	-	-	1144	-
	141	Ⅳ	C 303	石器	磨石？	砂岩	-	(6.7)	(5.5)	(2.9)	-	-	-	-	145	-
	142	Ⅳ	E 304	石器	磨石	砂岩	-	(7.2)	(5.3)	(5.5)	-	-	-	-	277	-

第Ⅳ章　自然科学分析

第１節　中増遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定（ＡＭＳ法）及び樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中増遺跡は，喜界島南西部に位置する手久津久集落付近の標高20ｍの海岸段丘上に立地する。調査は平成23～24年度に実施され，柱穴や掘建柱建物跡，土坑，焼土跡，溝状遺構などが検出されている。遺構の年代観は，龍泉窯系青磁，褐釉陶器，石器，鉄滓などの出土遺物から 14世紀から 15世紀の中世相当期と考えられる。

本報告では，遺構内から出土した炭化材を対象として，遺構の年代確認のための放射性炭素年代測定と，木材利用などを検討するための樹種同定を実施する。

1.試料

試料は，C-205区焼土跡６号のⅡ層から出土した炭化材（炭化材①）と，A-205区土坑９号のⅡ層から出土した炭化材（炭）の２点である。C-205区焼土跡６号炭化材①は，長さ 1.3㎝，幅（接線方向）５㎜，厚み（放射方向）２㎜の板目板状を呈し，年輪は１年未満である。樹種同定に必要な分を採取した残りを年代測定用試料とする。A-205区土坑９号炭は，長さ３㎝，半径1.5㎝の 1／4割材であり，樹皮は認められない。現状での最外年輪を含む外側３年分を年代測定試料，残りを樹種同定試料とする。

2.分析方法

（1）放射性炭素年代測定

試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合，これらをピンセット，超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去，NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去，HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をパイコール管に入れ，1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて，管内を真空にして封じきり，500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し，真空ラインにてCO 2 を精製する。真空ラインにてパイコール管に精製したCO 2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるパイコール管底部のみを 650℃で 10時間以上加熱し，グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1㎜の孔にプレスして，タンデム加速器のイオン源に装着し，測定する。

測定機器は，3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH- 2）を使用する。AMS測定時に，標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また，測定中同時に 13C/ 12Cの測定も行うため，この値を用いてδ13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5，568年を使用する。また，測定年代は 1950年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。なお，暦年較正は，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV 6.0（Copyright 1986- 2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い，誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは，大気中の 14C濃度が一定で半減期が 5568年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動，及び半減期の違い（14Cの半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては，本来10年単位で表すのが通例であるが，将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算，再検討に対応するため，１年単位で表している。暦年較正は，測定誤差σ，2σ（σは統計的に真の値が68%，2σは真の値が95%の確率で存在する範囲）双方の値を示す。また，表中の相対比とは，σ，2σの範囲をそれぞれ１とした場合，その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

（2）樹種同定

試料を自然乾燥させた後，木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し，実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお，木材組織の名称や特徴は，島地・伊東（1982），Wheeler他（1998），Richter他（2006）を参考にする。また，日本産樹木の木材組織については，林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

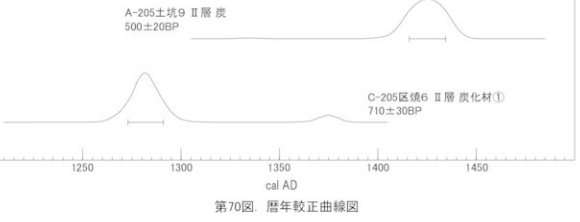
3.結果

放射性炭素年代測定結果，暦年較正結果，樹種同定結果を第42表，暦年較正曲線図を第70図に示す。同位体効果の補正を行った補正年代は，C- 205区焼土跡６号のⅡ層炭化材①が710±30BP，A-205区土坑９号炭が500±20BPを示す。また，

第42表　放射性炭素年代測定・暦年較正・樹種同定結果

地区 遺構 層位	材質・形状・種類	処理 方法	測定 年代 BP	δ13 C (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果				Code No.
						誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	
C-205区 焼6号 Ⅱ層 炭化材①	炭化材 板目板状 マツ属複維管束亜属	AAA	700 ± 20	-24.85 ± 0.55	710 ± 30 (707 ± 25)	σ	cal AD 1,273 ～ cal AD 1,291	cal BP 677 ～ 659	1.000	IAAA- 130355
						2σ	cal AD 1,263 ～ cal AD 1,300 cal AD 1,368 ～ cal AD 1,381	cal BP 687 ～ 650 cal BP 582 ～ 569	0.925 0.075	
A-205区 土坑9号 Ⅱ層 炭	炭化材 1/4 割材 オオバギ近似種	AAA	500 ± 20	-24.71 ± 0.57	500 ± 20 (501 ± 24)	σ	cal AD 1,416 ～ cal AD 1,434	cal BP 534 ～ 516	1.000	IAAA- 130356
						2σ	cal AD 1,407 ～ cal AD 1,443	cal BP 543 ～ 507	1.000	

1) 処理方法の AAA は、酸処理→アルカリ処理→酸処理を示す。
2) 年代値の算出には、Libby の半減期5568年を使用した。
3) BP 年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
4) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68.3%が入る範囲）を年代値に換算した値。
5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を使用した。
6) 暦年の計算には、補正年代に 0 で暦年較正用年代として示した。一桁目を丸める前の値を使用している。
7) 年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は 1 桁目を丸めていない。
8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68.3%、2 σ は95.4% である。
9) 相対比は、σ、2 σ のそれぞれ 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



第70図．暦年較正曲線図

測定誤差をσで計算した暦年較正結果は，C- 205区焼土跡６号のⅡ層炭化材①がcalAD 1,273-1,291，A-205区土坑９号炭がcalAD 1,416-1,434である。

一方，炭化材は，C- 205区焼土跡６号炭化材①が針葉樹のマツ属複維管束亜属，A- 205区土坑９号炭が広葉樹のオオバギ近似種に同定された。同定された各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon） マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで，晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は，仮道管，柔細胞，水平樹脂道，エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列，1-15細胞高。

・オオバギ近似種（cf. Macaranga tanarius (L)Muell. Arg.） トウダイグサ科オオバギ属

散孔材で，道管は単独ﾏﾀﾊ 2-3 が放射方向に複合して散在し，年輪界付近で径を減少させる。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は保存場外悪いが，異性で１～３細胞幅である。

道管配列の特徴や現在の分布からオオバギの可能性があるが，保存状態が悪く，放射組織のほとんど観察できないことから近似種とした。

4.考察

(1)遺構の年代

C-205区焼土跡６号は平面形がほぼ円形を呈し，筒状に掘り込まれた遺構である。大きさは直径約１m，深さ 0.12mで壁面が赤色で焼土化している。その遺構には，２層の堆積がみられ，下層のⅡ層から検出した炭化材を測定に使用した。得られた年代は，補正年代で 710±30BP，暦年較正年代で13世紀後葉の頃を推定される。一方，A- 205区土坑９号は平面形がほぼ楕円状であるが不定形を呈する遺構である。大きさは長径約2.3m，短径1.2m，深さ 0.25mである。その遺構には４層の堆積が確認でき，Ⅱ層から検出した炭化材を測定に使用した。得られた年代は，補正年代で 500±20BPで，暦年較正結果から15世紀前半の年代が推定される。

両遺構の測定値は共に中世に属するが，A－205区土坑９号は，C－205区焼土跡６号よりも約120～160年新しい時期を示している。同時期を想定していた年代とは，異なる結果となった。

樹木の年代測定では，内側の年輪が古く，外側の年輪が新しい。最も外側の年輪の測定値がその樹木が伐採された年代となる。炭化材の形状をみると，C－205区焼土跡６号の炭化材は年輪が１年未満の板目板状である。A－205区土坑９号の炭化材は半径1.5cmの 1／4割材である。共に樹皮の付着は認められず，A－205区土坑９号の炭化材では，外側にさらに年輪が続くような痕跡もみられる。そのため，各遺構の年代は，得られた年代よりも新しい時期の可能性があり，遺構間の年代差についても，このような誤差によって異なった可能性がある。

これらの点については，年輪による影響を受けない種子や骨などの測定を行うことが有効で，今後複数試料の測定による検討なども望まれる。

(2) 木材

C－205区焼土跡６号の炭化材は，針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。日本の複維管束亜属には，クロマツ，アカマツ，リュウキュウマツの３種がある。クロマツとアカマツは本州・四国・九州が分布の中心で，クロマツがトカラ列島，アカマツが屋久島を南限とする。一方，リュウキュウマツは，トカラ列島以南の琉球に分布する。こうした分布状況を考慮すると，本地域での複維管束亜属は，リュウキュウマツの可能性が高い。リュウキュウマツは，二次林や海岸などに広く生育している。木材は軽軟で強度が低く，またシロアリの害を受けやすいが，松脂を多く含み，薪炭材等として有用である。本遺跡でも周辺の海岸等に生育し，木材を燃料材等として利用されたことが推定される。

A－205区土坑９号の炭化材は，オオバギ近似種に同定された。オオバギは，琉球各島の二次林や疎林に生育する常緑小高木である。木材は軽軟で強度は低く，器具材等に利用されることがある。今回の炭化材は，1／4割材で，半径は 1.5cmである。外側にさらに年輪が続く痕跡がみられるが，それを考慮しても小径の枝等が利用されたと考えられる。

引用文献

林　昭三，1991．日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

伊東隆夫，1995．日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31．京都大学木質科学研究所，81－181．

伊東隆夫，1996．日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32．京都大学木質科学研究所，66－176．

伊東隆夫，1997．日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33．京都大学木質科学研究所，83－201．

伊東隆夫，1998．日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34．京都大学木質科学研究所，30－166．

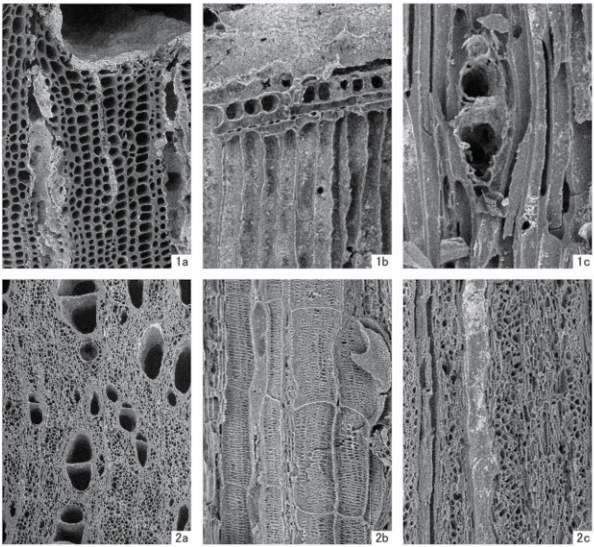
伊東隆夫，1999．日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35．京都大学木質科学研究所，47－216．

Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.（編），2006．針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐野　雄三・安部　久・内海　泰弘（日本語版監修），海青社，70p.［Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］．

島地　謙・伊東隆夫，1982．図説木材組織．地球社，176p.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.（編），1998．広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］．

図版1　炭化材



1.マツ属複維管束亜属(C-205区焼6:炭化材①)
2.オオバヤナギ近似種(A-205区土坑9:炭)
a:木口,b:柾目,c:板目

100 μm:a
100 μm:b,c

第２節　中増遺跡出土の植物遺体分析

札幌大学　高宮広土

１　はじめに

中増遺跡より採取された土壌サンプル約145ℓが，喜界町教育委員会によってフローテーション処理され，浮遊物計60.15gが，植物遺体（炭化種子）回収および同定のために札幌大学に送付された。今回，この浮遊物に含まれていた炭化種子について報告する。

２　検出された炭化種子

検出された植物遺体は以下のものであった（第43表）。オオムギ（Hordeum vulgare L. 第71図写真1），ムギ類（オオムギかコムギかであるが，そのどちらかに属するか判断できなかったもの），ムギ類穂軸（第71図写真4），イネ（Oryza sativa L. 第71図写真2），アワ（Setaria italica P. Beauv. 第71図写真3）および同定不可能。最も多く検出されたのがオオムギで 38（粒/片）であった。また，オオムギであろうと思われるが，同定に際し特徴を欠く籾果をオオムギ？とした。計８片をこのカテゴリーに含んだ。また，検出された穂軸もおそらくオオムギと思われるが，かなり断片的であるので，ムギ類穂軸とした。出土状況から，オオムギ？，ムギ類，およびムギ類穂軸はオオムギと思われる。オオムギに次いでアワが７粒およびイネが１粒検出されている。同定不可能は，計46片であった。

３　まとめ

喜界町においては城久遺跡群の遺跡である山田中西遺跡（高宮　2007），山田半田遺跡（高宮　2009），小ハネ遺跡（高宮・千田2011）および前畑遺跡（高宮・千田）において植物遺体の分析が実施されたが，土壌のサンプル量やサンプリング地点の可能性もあるが，他の遺跡と比較して，中増遺跡ではオオムギが顕著である。この遺跡は 14～15世紀といわれているが，9～12世紀以降に徐々にオオムギが重要になったのかもしれない。今回検出されたオオムギには完型がなく，かろうじてサイズを測定することができたのが，１粒のみであった（第71図写真1）。そのサイズは5.1x2.7x1.9(長さx幅x厚さ　以下同様)mmで，やや大型である。他の破片からも大型のオオムギが利用されていたという印象がある。イネは１粒のみ検出され（第71図写真2），ほぼ完型でそのサイズは 2.4x1.4x0.9mmでかなり小型である。また，アワは２粒計測可能で，そのサイズは両方とも 0.8x0.6x0.4mmであった。計測はできなかったが，平均的なサイズのアワ(1.2mmほどの大きさ）は１粒のみであった。アワもかなり小さい。ちなみに第71図写真４のムギ類穂軸のサイズは，約1.3x1.3x0.8mmであった。

今回，焼土跡（１号～９号），土坑（２・３・８号，掘立柱建物跡９号P１・P４）およびA地区包含層II層より土壌がサンプリングされたが，土坑が植物遺体の分布が１ℓにつき 1.37(粒・片)とやや高く，焼土跡は１ℓ中１以下であった。焼土においては，加熱により種子が保存されないことが少なくない。このような遺構の場合は，そのまわりの土壌もサンプリングすると，より多くの炭化種子が検出されるのではないであろうか。

喜界町教育委員会澄田直敏および野崎拓司のフローテーションへの関心により，喜界島における約９世紀から 13世紀の植物食利用が明らかになりつつある。他の琉球列島の遺跡と同様に，喜界島の遺跡からも土壌のサンプル量に対して回収される炭化種子は決して多くはないが，今後ともこのような努力を続けていくべきであろう。

謝辞

このような機会を与えてくださった喜界町教育委員会澄田直敏氏に心より感謝申し上げたい。また，本研究は文部科学省科研費（課題番号 21101225）の一部を利用した。

引用文献

澄田直敏　2014「喜界島の様相」『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 第2集』高宮広土・新里貴之（編）東京：六一書房：171-180

高宮広土　2008「山田中西遺跡出土の植物遺体：速報」喜界町教育委員会（編）『城久遺跡群山田中西遺跡II』喜界町教育委員会：99-100

高宮広土　2009「山田半田遺跡より出土した植物遺体」『城久遺跡群山田半田遺跡』喜界町教育委員会：177-182

高宮広土・千田寛之　2011a「城久遺跡群前畑遺跡出土の植物遺体」喜界町教育委員会（編）『城久遺跡群 前畑遺跡・小ハネ遺跡』喜界町教育委員会：175-178

高宮広土・千田寛之　2011b「城久遺跡群小ハネ遺跡出土の植物遺体」喜界町教育委員会（編）『城久遺跡群 前畑遺跡・小ハネ遺跡』喜界町教育委員会：276-278

第43表　中増遺跡出土の植物遺体

報告書掲載遺構名	層位	グリッド	FL No.	土壌サンプル量 (l)	浮遊物量 (g)	イネ (粒)	オオムギ (粒)	オオムギ (片)	オオムギ？ (片)	ムギ類 (片)	ムギ類穂軸 (片)	アワ (粒)	同定不可能 (片)	計 (粒／片)	密度 (粒・片／ｌ)
焼土跡１号	Ⅰ	B-201	599	5	0.57									0	0.00
	Ⅱ		606	5	12.02		2						4	6	1.20
	Ⅲ		605	1.5	0.06		sho							0	0.00
	Ⅳa		659	5	0.5									0	0.00
	Ⅳ		291	3	0.58									0	0.00
焼土跡２号	Ⅱ	B-202	677	1.5	0.83									0	0.00
	Ⅳ		731	5	0.76		1							1	0.20
	Ⅴ		735	2.5	3.58									0	0.00
	一括		670	12	6.35		2					1		3	0.25
	一括		733	8	8.45									0	0.00
焼土跡４号		B-205	728	3	1.64		1							1	0.33
	Ⅰ	B-205	654	6	1.03				1					1	0.17
焼土跡５号		A-204	647	0.1	0.06									0	0.00
焼土跡６号	Ⅰ	C-205	657	8	1.15		2	3				3	2	10	1.25
	Ⅱ	C-205	663	3	0.63									0	0.00
焼土跡７号	Ⅰ	C-205	725	4	0.61			1					3	4	1.00
	Ⅱ	C-205	714	4.5	1.9	1		1	1					3	0.67
焼土跡８号	Ⅱ	A-204	668	10										0	0.00
焼土跡９号		B-205	671	2	1.07			1						1	0.50
			小計	89.1	41.79	1	8	6	2	0	0	4	9	30	0.34
土坑２号		B-204	678	8	3.73		1	1		1		2		5	0.63
土坑３号		B-204	656	8	1.16		1	2	2					5	0.63
土坑８号		C-202	726	13	6.17		1	3		1	1		12	18	1.38
SB 9号 P1		B-204	675	13	5.13		3	6	4				22	35	2.69
SB 9号 P 4		C-204	628	10	1.35		4	1					3	8	0.80
			小計	52	17.54	0	10	13	6	2	1	2	37	71	1.37
A地区　Ⅱ層		C-204・205	707	4.15	0.82		1					1		2	0.48
			小計	4.15	0.82	0	1	0	0	0	0	1	0	2	0.48
			合計	145.25	60.15	1	19	19	8	2	1	7	46	103	0.71

1　オオムギ　背面

側面

腹面

2　イネ

3　アワ

4　ムギ類穂軸

第 71 図　中増遺跡出土の植物遺体

第３節　中増遺跡の平成 23 ～ 24 年度調査で採集された脊椎動物遺体

樋泉岳二（早稲田大学）

はじめに

中増遺跡（鹿児島県喜界町手久津久所在）は喜界南西部の海岸段丘上（標高20m前後）に位置する中世（14～15世紀中心）の遺跡である。本遺跡では平成23～24年度に喜界町教育委員会による発掘調査において脊椎動物遺体（魚骨・鳥獣骨など）が多数出土した。ここではその分析結果について報告し，その特徴について考察する。

1.分析資料と分析方法

採集法：資料の大半は基本的に発掘現場での目視確認と手での拾い上げによって採集されたもの（以下「ピックアップ資料」）であるが，土サンプルの水洗選別に伴う沈殿物（ヘビー・フラクション：HF）から１mm目のフルイによって回収された資料（以下「水洗選別資料」）もわずかにある。年代はすべて中世（14～15世紀代）のものと推定されている。

分析方法：同定は，原則として現生骨格標本との比較によって行った。比較標本には筆者の所蔵標本のほか，西本豊弘氏の所蔵標本も参照させていただいた。哺乳類遺体の計測はDriesch（1976）の方法に準拠した。ウシ・ウマの体高推定は西中川ほか（1991）の方法に従った。

2.分析結果

(1) ピックアップ資料

出土数と全体的な組成

同定結果の詳細を第44～47表に，出土地点別の集計結果および同定標本数（NISP）・最小個体数（MNI）による組成を第48表に示した（NISPについては，詳細な分類群・部位の特定が困難な骨片（第44～47表で「数」の欄に＊を示したもの）は除外した）。大半が遺構から出土している。遺構別の出土数（NISP）は土坑９号が34点，溝状遺構２号が19点，土坑４号が 12点とやや多いが，他は４～１点である。脊椎動物全体のNISPは 87点で，このうち哺乳類が 75点と圧倒的に多く，魚類が 10点でこれに次ぐ。他にウミガメ類と鳥類が各１点確認されている。

魚類

NISPでアオブダイ属の咽頭骨・顎骨が計４点，ハタ科の方骨およびハタ科の可能性が高い椎骨が計３点，モンガラカワハギ科が１点確認された。いずれもサンゴ礁周辺にみられる普通種である。そのほかに詳細な分類群の特定が困難な真骨類の椎骨が２点得られている。

爬虫類・鳥類

爬虫類ではウミガメ類の頭骨板１点および甲板破片２点（NISP算定対象外）が確認された。鳥類では詳細な同定が困難な四肢骨の骨幹が１点確認された。

哺乳類

哺乳類の内訳は，ウシ 44点，ウマ６点，ネズミ科２点で，ウシが圧倒的に多い。その他にウシまたはウマと推定される大型哺乳類の椎骨・肋骨・四肢骨破片が 23点あるが，これらの多くもウシのものである可能性が強い。ネズミ科はおそらく人為的な廃棄物ではなく自然の遺骸と思われる。以下，主体となるウシ，ウマについて記載する。

ウシ：MNIは３（幼獣１，成獣２）。出土部位の内訳をみると，44点の資料のうち歯が破片を含めても２点とごく少ない点が特徴で，四肢骨が主体である。年齢については顎歯が少ないため詳細な推定は困難だが，44点の資料中ごく若い幼獣が 13点（このうち土坑９号が７点，溝状遺構２号が４点）を占める。他にも大腿骨近位端，脛骨近位端・遠位端，中手骨または中足骨の遠位端に未癒合のものがみられ，若い個体が目立つ点が特徴である。第44～47表に示した計測値から求めた成獣の推定体高は，土坑１号の右肩甲骨（資料番号76）が 110cm，溝状遺構２号の左中手骨（資料番号35）が 111cm，土坑９号の右中手骨（資料番号72）が 122cm前後，左踵骨（資料番号87）が116cmで，全体としては110～122cm（N=4）である。これは日本在来牛であるⅡ之島牛（雄122cm，雌112cm，西中川ほか1991）と同程度の大きさである。

ウマ：下顎骨，肩甲骨，橈骨，基節骨が各１点確認された。下顎骨（資料番号73）は土坑９号出土で，残存範囲は左右の連合部～右第２後臼歯の歯槽部である。歯は第３前臼歯（P3）のみを残して他は脱落しているが，同じ遺構から出土した左下顎切歯も本個体のものである可能性がある。大歯はなく雌である。土坑７号の橈骨（資料番号81）の計測値から推定された体高は 120cmで，日本在来馬である与那国馬（120cm。西中川ほか 1991）とほぼ同大の小型馬であり，P72の肩甲骨（資料番号7）もこれと同程度の大きさの個体と推定される。

解体痕

今回出土したウシ・ウマおよびそのいずれかと思われる骨には，カットマーク（刃物による切り傷）やスパイラル・フラクチャー（人為的な割断痕）を伴う資料が多数確認された（第44～47表の「損傷」欄を参照）。

ウシ：土坑９号出土の左踵骨（資料番号87）外側面にカットマークが確認された（図版３）。鋭利な刃物によって数か所が横方向に引き切られている。そのほか四肢骨９点（中手骨３点，橈骨２点，肩甲骨・上腕骨・脛骨・中足骨各１点）にスパイラル・フラクチャー（またはそれに類する破損状態）が確認された。

ウマ：土坑９号出土の下顎骨（資料番号73）右外側面にカットマークが確認された（図版４）。オトガイ孔の下部数か所が鋭利な刃物によって縦方向に引き切られている。そのほか

肩甲骨・橈骨各1点にスパイラル・フラクチャーが確認された。

上記以外に，ウシまたはウマの椎骨棘突起破片・肋骨破片各2点および種の特定が困難な小破片1点にカットマークが確認された。溝状遺構2号出土のウシまたはウマの肋骨は胴体側面の数か所が鋭利な刃物によって横方向に引き切られている（図版3）。そのほかウシまたはウマ（またはその可能性が高い）四肢骨の骨幹破片の多くにスパイラル・フラクチャーが確認されている。

(2) 水洗選別資料

SK－7（掘立柱建物跡9号P1），土坑3号および焼土跡4号において，堆積物サンプルの水洗選別によって回収された資料から詳細な同定が困難な硬骨魚類（真骨類）4点，ヘビ類椎骨1点，ネズミ亜科の歯およびネズミの可能性の高い椎骨各1点が検出されている。ヘビとネズミは自然の遺骸である可能性が高い。

3.考察

喜界島においてこれまでに脊椎動物の出土が報告されている遺跡としては，先山遺跡（7～12世紀[1]），西中川1987），提り遺跡（中世：西中川1996），和早地遺跡（14～15世紀：橘泉2008），城久遺跡群の大ウフ遺跡（上段＝A～C地区：10～12世紀，下段＝D地区：13～15世紀：西中川2013a・b）および半田遺跡（13～15世紀：西中川2013c）がある。なお，城久遺跡群の半田D遺跡（11～12世紀中心：喜界町教育委員会2013）でも魚骨・獣骨の出土の記載があるが内容の詳細は未報告である。

今回得られた本遺跡の資料の年代は城久遺跡群の衰退期に相当しており，喜界島中央部の高所（標高90～110m前後）に位置する城久遺跡群の大ウフ遺跡D地区・半田遺跡，および海浜部に面する低位段丘（標高13m）に位置する和早地遺跡と年代的に重複している。本遺跡が立地する海岸段丘の標高は20m前後で，城久遺跡群よりはるかに低いが，和早地遺跡よりは高位に位置しており，この時期の低位段丘域における動物資源利用の様相を示すものとして重要である。以下では，これら各遺跡における動物資源利用の相違点と共通性について，立地条件との関連性を念頭に置きながら予察する。

(1) 脊椎動物全体の組成

各遺跡の動物遺体の内容をみると，和早地遺跡では大量の魚骨が出土しており，他に少数のウミガメ類・ニワトリ・イノシシ・ウシが確認されている。魚類はフエフキダイ科・ブダイ科・モンガラカワハギ科・ハタ科・ベラ科・ニザダイ科などのサンゴ礁魚類が大半を占める。いっぽう，大ウフ遺跡D地区・半田遺跡では哺乳類のみが確認されており，その内容はいずれもウシが主体で，他に大ウフ遺跡D地区でウマ，半田遺跡でウマとイヌが若干出土している。

これに対して本遺跡の組成は，ウシを主体として，少数のウマ・鳥類・ウミガメ・魚類を伴うもので，魚類が少ない点で和早地遺跡とは明確に異なり，ウシを主体としウマを伴う点で大ウフ遺跡D地区・半田遺跡と共通する。本遺跡は，立地条件（標高や海からの距離）の面では和早地遺跡に近いが，動物資源利用の基本的な特色はむしろ大ウフ遺跡D地区や半田遺跡に類似するものであったと推定される。骨の出土量という点からみても，城久遺跡群のⅠ～Ⅱ期（9～12世紀。野崎ほか 2010）では出土量は少なく，大ウフ遺跡上段（A～C地区）からウシの歯などやサメ類などの魚骨，半田D遺跡から獣骨・魚骨がわずかに出土しているのみであるのに対して，Ⅲ期の大ウフ遺跡D地区・半田遺跡では出土量が増加する。本遺跡の様相もこれらと類似している。

ただし，大ウフ遺跡D地区・半田遺跡では魚骨が皆無であるのに対し，本遺跡では少数ではあるがブダイ科・ハタ科・モンガラカワハギ科といったサンゴ礁魚類やウミガメなどが出土しており，海産資源利用の痕跡がみられる点は和早地遺跡との共通要素といえる。この点は城久遺跡群よりもはるかに海岸近くに位置する本遺跡の立地を反映した特徴といえるかもしれない。

なお，ウシを最多としてウマ・ウミガメ・魚類が加わるパターンは，やはり海岸近くの低位段丘上に立地する先山遺跡とも共通している。

(2) ウシの出土部位・産状

以上のように，本遺跡と大ウフ遺跡D地区・半田遺跡は遺体の組成の面では類似性が高いが，ウシの出土部位や産状に関しては相違が認められる。

大ウフ遺跡D地区の土坑P521とP636ではウシの頭骨のみが出土しており，とくにP521では頭骨の鼻部を土坑の底に向けて埋納するという，きわめて特異な産状が確認されており，祭祀に用いられた可能性が指摘されている（西中川2013a）。これに対して本遺跡では，遺体は多数の遺構から少数ずつ分散して出土する傾向にあり，祭祀に関連するような産状は認められない。

大ウフ遺跡D地区では，上記の頭骨以外に溝や包含層からウシの頭骨～四肢骨の各部位が出土しており，とくに溝3・溝18ではまとまった出土が確認されている。半田遺跡でも，出土数が少ないため不明確ではあるが，頭骨と四肢骨が混在している点で基本的には同傾向と推測される。これに対して本遺跡では，四肢骨が多数出土しているのに対して顎歯はごく少なく（NISP合計44点中で歯は破片を含めても3点のみ），大ウフ遺跡D地区や半田遺跡とは部位組成のパターンが異なる。

また本遺跡ではウシ・ウマの骨に明確な解体痕がみられることから，少なくとも一部の個体は死後に解体され，おそらく食用とされたと推定される。これに対して，大ウフ遺跡で

は解体痕は明確でないようであり（西中川2013a），両遺跡の間で遺体の取り扱い方法に違いがあった可能性も考えられる。

以上から，本遺跡におけるウシの利用形態に関しては，①解体後に頭部は外部に持ち出され，残りが食用に供された可能性，あるいは，②解体は外部で行われ，頭骨以外が食料として本遺跡に持ち込まれた可能性が考えられる。これは大ウフ遺跡D地区における土坑へのウシ頭骨埋葬との関連性からも興味深い特徴といえるだろう。

(3) ウシ・ウマの形質

ウシ：今回の出土資料得られたウシの推定体高は 110～122cm（N=4）である。これは大ウフ遺跡（108～123cm。西中川2013a･b），半田遺跡（111～125cm。西中川2013c）と同様に，日本在来牛である口之島牛程度に相当するサイズである。

ウマ：今回の出土資料得られたウマの推定体高は 120cm（N= 1）で，日本在来馬である与那国馬とほぼ同大ある。これは大ウフ遺跡・半田遺跡（ともに 116cm。西中川2013b･c）よりわずかに大きいが，基本的には日本在来の小型馬の系統に属するものとみてよいと考えられる。

注

1）先山遺跡の出土骨の年代については，筆者はより新しいものである可能性もあると考えている（樋泉2008）。

参考文献

樋泉岳二（2008）「和早地遺跡の脊椎動物遺体群」，『荒木貝塚 和早地遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター，pp. 43-56。

西中川 駿（1987）「先山遺跡出土の自然遺物－とくに出土動物骨について－」『先山遺跡』喜界町教育委員会，pp. 36-37。

西中川 駿（1996）「提り遺跡出土のウシの遺体」『提り遺跡・後田遺跡・水口遺跡・竿ク遺跡』喜界町教育委員会，p.39。

西中川 駿（2013a）「喜界町大ウフ遺跡出土のウシ遺体」『城久遺跡群 大ウフ遺跡・半田遺跡』喜界町教育委員会，pp.173-178。

西中川 駿（2013b）「喜界町大ウフ遺跡（平成19年度，21・22年度調査）出土の動物遺体」『城久遺跡群 大ウフ遺跡・半田遺跡』喜界町教育委員会，pp.179-185。

西中川 駿（2013c）「喜界町半田遺跡出土の動物遺体」『城久遺跡群 大ウフ遺跡・半田遺跡』喜界町教育委員会，pp.298-300。

西中川 駿ほか（1991）『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛，馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）成果報告書。

喜界町教育委員会（2013）『城久遺跡群 半田口遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘報告書（13）

Driesch，A．（1976）A Guide to the Measurements of Animal Bones from Archaeological Sites。Peabody Museum Bulletin 1。

第44表　中増遺跡脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の同定結果（１）

※1 残存位置凡例：w 完存、o 近位端、m 骨幹、d 遠位端、fr 破片、(p)・(d) は未癒合の骨端のみ、(p)・(d) は骨端未癒合脱落、(p)・(d) は骨端のみ欠損
※2 数に＊を付したものは NISP 算定対象外、＊3 計測位置略号は Driesch(1976) に準拠、＊4 損傷凡例：　CM カットマーク、SF スパイラルフラクチャー。

資料番号	遺構	区	層準	取上番号	出土位置備考	種類	部位	残存位置 ※1	左右	数 ※2	計測 ※3	損傷 ※4	備　考
1	P0038	B 202	一括		掘立柱建物跡 5 号 P. 4	哺乳類同定不可	不明	fr		1 ＊			
2	P0047	B 203	一括		掘立柱建物跡 2 号 P1	ウミガメ	頂骨板			1			
2	P0047	B 203	一括		掘立柱建物跡 2 号 P1	哺乳類同定不可	肋骨	fr		1 ＊			ウシ／ウマ／イノシシ？
3	P0048	B 203	-		掘立柱建物跡 2 号 P. 4	ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		1 ＊			
4	P0054	A 204	一括			哺乳類同定不可	不明	fr		1 ＊			
5	P0060	A 203	-			同定不可	不明	fr		1 ＊			
6	P0071	B 204	一括			哺乳類同定不可	不明	fr		2 ＊			
7	P0072	B 204	-			ウマ	肩甲骨	関節部	R	1	GLp84.5, LG52.4, SLC51.8	SF	
8	P0074	A 204	一括			ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		2 ＊			
9	P0076	A 204	-			哺乳類同定不可	不明	fr		1 ＊			ウシ／ウマ／イノシシ？
10	P0076	A 204	-			哺乳類同定不可	不明	fr		1 ＊			
11	P0077	A 204	-			哺乳類同定不可	不明	fr		1 ＊			
12	P0078	A 204	一括		掘立柱建物跡 4 号 P. 2	ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		2 ＊		SF	
13	P0091	B 203	一括			ウシ	中手骨 / 中足骨	(d)		1			
14	P0108	B 203	II		掘立柱建物跡 3 号 P. 2	哺乳類同定不可	不明	fr		1 ＊			
15	P0111	A 204	一括			ウシ	上顎 M1/M2		L	1			
16	P0111	A 204	-	-	-	哺乳類同定不可	肋骨	m		1 ＊			ウシ／ウマ／ブタ？
17	P0111	A 204	-	-	-	真脊類同定不可	腹椎			1			
18	P0144	B 204	一括	-	-	ウシ	中心第 4 足根骨		R	1	GB48		
19	P0164	205	-	-	-	同定不可	不明	fr		1 ＊			
20	P0159	B 205	-	-	-	同定不可	不明	fr		1 ＊			
21	P0174	B 205	一括	-	-	ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		2 ＊		SF	
21	P0174	B 205	一括	-	-	ウシ／ウマ？	肋骨	fr		1 ＊			
22	P0219	B 205	-	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1 ＊			
23	P0224	C 204	一括	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1 ＊			
24	P0285	B 205	-	-	-	アオゾダイ属	前上顎骨		L	1		焼	
25	P0224	C 204	-	-	-	ウシ／ウマ	胸椎			1			
26	P0350	B 202	-	-	-	ウシ	上腕骨	(d)	R	1		SF	
27	P0111	A 204	一括	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1 ＊			
28	P0111	A 204	-	-	-	ハタ型	腹椎			1			
29	溝状遺構 1 号	C 203	I	-	-	ウシ	中節骨	w		1			
29	溝状遺構 1 号	C 203	I	-	-	ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		1 ＊			
30	溝状遺構 1 号	C 204	I	-	石灰礫集中箇所	ウシ／ウマ	肋骨	p m		1			
31	溝状遺構 1 号	C 203	II	-	-	ウシ	末節骨			1			
31	溝状遺構 1 号	C 203	II	-	-	ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		1 ＊			
32	溝状遺構 2 号	B 205	一括	-	-	ウシ／ウマ	肋骨	(p)+m		1		CM	
32	溝状遺構 2 号	B 205	一括	-	-	ウシ	鞍椎	fr		1			未癒合＝幼獣（ごく若い）
33	溝状遺構 2 号	B 205	I	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1 ＊			
34	溝状遺構 2 号	B 205	III	-	-	同定不可	不明	fr		1 ＊			
35	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	ウシ	中手骨	p	L	1	Bp52.0	SF	
35	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	ウシ	中手骨	pfr	L	1		SF	上の中手骨 pL とは別個体
35	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	ウシ	脛骨	(d)fr	L	1			
35	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	ウシ	頭蓋	fr		1			未萌出？
35	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		9 ＊		SF	他に小破片多数
35	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	ウシ／ウマ？	四肢骨	骨端		1 ＊			骨端未癒合脱落
35	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	ウシ／ウマ	椎体	椎体 fr		3			
35	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	ウシ／ウマ	椎骨	棘突起		1			
35	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	ウシ／ウマ？	肋骨	p		1			
35	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	哺乳類同定不可	肋骨	fr		3 ＊			やや小型→ウシ／ウマ幼獣またはイノシシ？
35	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	ハタ科	方骨		L	1	やや小型		
36	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	ウシ	中手骨	m (d)	R	1			幼獣（ごく若い）
36	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		11 ＊		SF	他に小破片多数
36	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	ウシ／ウマ？	肋骨	fr		多数 ＊			
36	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	ウシ／ウマ	椎骨	椎体 fr		2			
36	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	哺乳類同定不可	不明			1 ＊			
36	溝状遺構 2 号	B 205	II	-	-	ウミガメ	甲板	fr		2 ＊			
37	溝状遺構 2 号	C 205	一括	-	-	ウシ／ウマ	肋骨	(p)+m		1			
38	溝状遺構 2 号	C 205	一括	-	-	ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		1 ＊			
39	溝状遺構 2 号		I	-	-	ウシ	橈骨	pfr	L	1		SF	
39	溝状遺構 2 号		I	-	-	ウシ／ウマ	頸椎	棘突起 fr		1			
40	溝状遺構 2 号	C 205	II	-	-	ウシ	踵骨		L	1			幼獣（ごく若い）
41	溝状遺構 2 号	C 205	I	-	-	哺乳類同定不可	四肢骨	mfr		1 ＊			

第45表　中増遺跡脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の同定結果（２）

*1 残存位置凡例：w 完存，p 近位端，m 骨幹，d 遠位端，fr 破片，(p)・(d) は未癒合の骨端のみ，(p-)・(d-) は骨端未癒合脱落，〈p-〉・〈d-〉は骨端のみ欠損．
*2 数に＊を付したものは NISP 算定対象外．　*3 計測位置略号は Drisch(1976) に準拠．　*4 損傷凡例：　CM カットマーク，SF スパイラルフラクチャー．

資料番号	遺構	区	層準	取上番号	出土位置備考	種類	部位	残存位置 *1	左右	数 *2		計測 *3	損傷 *4	備考
42	土坑１号	A-201	-	-	-	ウシ	大腿骨	m	?	1				幼獣
42	土坑１号	A-201	-	-	-	ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		3	＊		SF	
42	土坑１号	A-201	-	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		多数	＊			
43	土坑１号	A-201	一括	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		多数	＊			
44	土坑１号	A-201	一括	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1	＊			
45	SK-7	B-204	-	-	掘立柱建物跡９号Ｐ１	哺乳類同定不可	不明	fr		1	＊			
46	SK-7	B-204	一括	-	-	同定不可	不明	fr		1	＊			
47	土坑２号	B-204	I	1	-	ウシ	末節骨	p		1				
48	土坑２号	B-204	I	2	-	ウシ	大腿骨	(p) 大腿骨頭	L	1				
49	土坑２号	B-204	I	3	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1	＊			
50	土坑２号	B-204	I	4	-	ウシ	基節骨	w		1				
51	土坑２号	B-204	I	5	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1	＊			
52	土坑２号	B-204	I	6	-	ウマ	基節骨	w		1				
53	土坑２号	B-204	II	7	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1	＊			
54	土坑３号	B-204	一括	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1	＊			
55	土坑４号	C-204	-	-	-	ウシ	大腿骨	(p-)+(p)	R	1				
55	土坑４号	C-204	-	-	-	ウシ	中心第４足根骨		L	1				
55	土坑４号	C-204	-	-	-	ウシ	中足骨	p	L	1			SF	
55	土坑４号	C-204	-	-	-	ウシ	中手骨／中足骨	(d)		2				
55	土坑４号	C-204	-	-	-	ウシ	大腿骨	〈p-〉〈d-〉	L	1				幼獣（ごく若い）
55	土坑４号	C-204	-	-	-	ウシ	大腿骨	dfr	R	1				
55	土坑４号	C-204	-	-	-	ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		1	＊		SF	
56	土坑４号	C-204	II	-	-	ウシ／ウマ	尺骨	滑車切痕 fr	R	1				ウマ？
56	土坑４号	C-204	II	-	-	モンガラカワハギ科	舌顎骨		R	1				
57	土坑４号	C-204	II	-	-	ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		2	＊		SF1	
58	土坑４号	C-204	II	-	-	ウシ	肩甲骨	関節部	L	1		SLC36.1		
58	土坑４号	C-204	II	-	-	ウシ	橈骨	pfr	L	1			SF	
59	土坑４号	C-204	II	-	-	ウシ	脛骨	(p-)+(p)	R	1			SF?	
59	土坑４号	C-204	II	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		多数	＊			
60	土坑４号	C-204	-	-	-	同定不可	不明	fr		1	＊			
61	SK-12・13・14	C-204	II	-	掘立柱建物跡９号Ｐ２	アオブダイ属	上咽頭骨	m	R	1		大型		
62	SK-13	B-204	一括	-	掘立柱建物跡９号Ｐ２	アオブダイ属	前上顎骨		R	1		大型		
63	SK-14	B-204	-	-	掘立柱建物跡９号Ｐ２	真骨類同定不可	椎骨			1				
64	土坑９号	A-205	I	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1	＊			
65	土坑９号	B-205	I	-	-	ウシ／ウマ	手根／足根骨			1				
65	土坑９号	B-205	I	-	-	ウシ／ウマ	肋骨	fr		1	＊			
66	土坑９号	B-205	II	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1	＊			
67	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ／ウマ	肋骨	fr		1	＊		CM	
68	土坑９号	A-205	II	-	-	ネズミ科	脛骨	(p-)d	L	1				
69	土坑９号	A-205	II	-	-	鳥類同定不可	四肢骨	m		1				
69	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ／ウマ	椎骨	椎体 fr		1				
69	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ／ウマ	四肢骨	mfr		5	＊		SF	
69	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ／ウマ？	種子骨			1	＊			
70	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ／ウマ	胸椎			1				
70	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ／ウマ	椎骨	椎体 fr		1				
70	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ	第４手根骨		R	1				
70	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ／ウマ	四肢骨	mfr		1	＊		SF	
70	土坑９号	A-205	II	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		多数	＊		CM1	
71	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ	第３手根骨		R	1				
71	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ	距骨		L	1				幼獣（ごく若い）
71	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ	第３足根骨		L	1				
71	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ	基節骨	w		1				
71	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ／ウマ	下顎骨	fr	?	1				
71	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ／ウマ	頸椎	棘突起 fr		1			CM	
71	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ／ウマ	椎骨	椎体		1				幼獣
71	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		1	＊		SF	
71	土坑９号	A-205	II	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		多数	＊			
72	土坑９号	A-205	II	-	-	ハタ型	腹椎			1				
72	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ	中手骨	p	R	1		GL194.0	SF	接合
72	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ	中手骨	d	R			Bp60.5，Bd59.1	SF	
72	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ	基節骨	w		1				
72	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ	脛骨	〈p-〉〈d-〉	R	1				幼獣（ごく若い）
72	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ／ウマ	胸椎	棘突起 fr		1			CM	
72	土坑９号	A-205	II	-	-	ウシ／ウマ	椎骨	椎体		1				
72	土坑９号	A-205	II	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		多数	＊			
73	土坑９号	A-205	III	-	-	ウマ	下顎骨	備考参照	L+R	1			CM	L[I3-I1x]-[I1-I3x P2x P3]R，P3のみ残，♀

第46表　中増遺跡脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の同定結果（3）

※1 残存位置凡例：w 完存，p 近位端，m 骨幹，d 遠位端，fr 破片，(p)・(d) は未癒合の骨端のみ，(p)・(d) は骨端未癒合脱落，(p)・(d) は骨端のみ欠損．
※2 数に＊を付したものは NISP 算定対象外．　※3 計測位置略号は Driesch(1976) に準拠．　※4 損傷凡例：　CM カットマーク，SF スパイラルフラクチャー．

資料番号	遺構	区	層準	取上番号	出土位置備考	種類	部位	残存位置※1	左右	数※2	計測※3	損傷※4	備考
74	土坑 9 号	A-205	III～IV	-	-	ウシ	橈骨	(p)-(d)	L	1			幼獣（ごく若い）
75	土坑 9 号	A-205	IV	-	-	ウシ	基節骨	(p)-d	?	1			幼獣（ごく若い）
76	土坑 9 号	A-205	IV	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1	＊		
77	土坑 1 号	A-201	I	-	-	ウシ	肩甲骨	関節部	R	1	SLC46.5	SF	
77	土坑 1 号	A-201	I	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1	＊		
78	土坑 1 号	A-201	IV	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1	＊		
79	土坑 1 号	A-201	IV	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1	＊		
80	SK-12-13-14	B-C-204	I	-	掘立柱建物跡 9 号 P 2	ウシ／ウマ？	不明	fr		1	＊		
81	土坑 7 号	C-206	I	1	II 層直上	ウマ	橈骨	p	L	1	Bp70.0	SF	
82	土坑 9 号	A-205	I	-	-	ウマ	下顎 I		L	1			
83	土坑 9 号	A-205	I	-	-	ウシ／ウマ	椎骨	椎体		1			
83	土坑 9 号	A-205	I	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		多数	＊		
84	土坑 9 号	A-205	II	-	-	ウシ／ウマ	四肢骨	mfr		1	＊	SF	
85	土坑 9 号	B-205	II 一括	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		2	＊	焼	
86	土坑 9 号	A-205	III	-	-	ウシ	中足骨	(p)-(d)	L	1			幼獣（ごく若い）
86	土坑 9 号	A-205	III	-	-	ウシ	基節骨	(p)-d	?	1			幼獣（ごく若い）
87	土坑 9 号	A-205	IV	-	-	ウシ	踵骨	w	L	1	GL127.2	CM	
88	土坑 9 号	A-205	IV	-	-	ウシ	中節骨	(p)-d	?	1			幼獣（ごく若い）
88	土坑 9 号	A-205	IV	-	-	ネズミ科	上顎 I		L	1			
88	土坑 9 号	A-205	IV	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		2	＊		
89	土坑 9 号	A-205	IV	-	-	アオブダイ属	歯骨		R	1	大型		
90	土坑 9 号	B-205	-	-	-	ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		1	＊		ウシ／ウマ幼獣腓骨？
91	包含層	C-303	I	-	-	哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	＊		
92	包含層	B-204	一括	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1	＊		
93	包含層	A-204	一括	-	-	ウシ／ウマ	四肢骨	mfr		1	＊		
94	焼土跡 4 号	B-205	一括	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1	＊		
95	土坑 9 号	A-205	II	-	-	ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		1	＊	焼	
96	P0312	A-205	一括	-	-	哺乳類同定不可	不明	fr		1	＊		
97	表土	A-201	一括	-	-	ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		1	＊		
98	溝状遺構 2 号	A・B-205	I	-	-	ウシ	大臼歯	fr	?	1			
102	土坑 9 号	A-205	II	-	-	真骨類同定不可	不明	fr		1	＊	焼	
103	P0111	A-204	一括	-	-	ウシ／ウマ？	四肢骨	mfr		1	＊	焼	
104	P0231	A-204	一括	-	-	真骨類同定不可	不明	fr		1	＊		

第47表　中増遺跡脊椎動物遺体（水洗選別資料）の同定結果

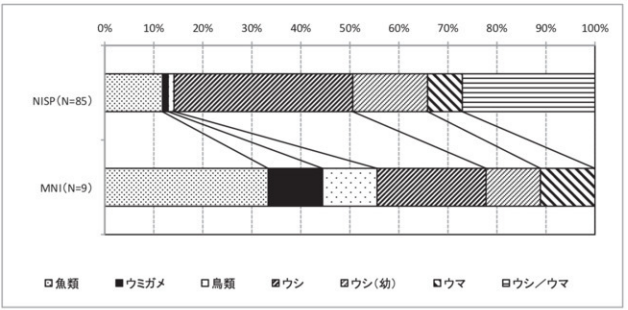
※1 残存位置凡例：w 完存，p 近位端，m 骨幹，d 遠位端，fr 破片，(p)・(d) は未癒合の骨端のみ，(p)・(d) は骨端未癒合脱落，(p)・(d) は骨端のみ欠損．
※2 数に＊を付したものは NISP 算定対象外．　※3 計測位置略号は Driesch(1976) に準拠．　※4 損傷凡例：　CM カットマーク，SF スパイラルフラクチャー．

資料番号	遺構	区	層準	取上番号	出土位置備考	種類	部位	残存位置	左右	数	計測	損傷	備考
99	SK-7	B-204	一括	-	掘立柱建物跡 9 号 P 1	真骨類同定不可	椎骨			1			
99	SK-7	B-204	一括	-	掘立柱建物跡 9 号 P 1	真骨類同定不可	担鰭骨			1			
100	土坑 3 号	B-204	一括	-	-	ヘビ類	椎骨			1			
100	土坑 3 号	B-204	一括	-	-	真骨類同定不可	歯			1			
100	土坑 3 号	B-204	一括	-	-	同定不可	不明	fr		1		焼	
100	土坑 3 号	B-204	一括	-	-	真骨類保留	吸頭骨？			1			ベラ科上咽頭骨に類するが別物
101	焼土跡 4 号	B-205	一括	-	-	ネズミ亜科	臼歯			1			
101	焼土跡 4 号	B-205	一括	-	-	小型哺乳類	尾椎			1			おそらくネズミ

第48表　中増道跡脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の同定結果（4）

NISP 算定対象外の資料（第44～47表参照）を除く（＋は算定対象外の資料のみが検出されたことを示す）。残存位置の略号凡例は第44表を参照。

種類	部位	残存位置	溝状遺構1号	溝状遺構2号	土坑1号	土坑2号	土坑4号	ピット12～14	土坑7号	土坑9号	P（包含）	合計	NISP	MNI
ハタ科	方骨			1 /								1 / 0		
ハタ型	腹椎									1	1	2	3	1
アオブダイ属	上咽頭骨	m						/ 1				0 / 1		
アオブダイ属	前上顎骨							/ 1			1 /	1 / 1		
アオブダイ属	歯骨									/ 1		0 / 1	4	1
モンガラカワハギ科	舌顎骨						/ 1					0 / 1	1	1
真骨類同定不可	椎骨							1			1	2	2	-
ウミガメ	頂骨板										1	1		
ウミガメ	甲板	fr		+								+	1	1
鳥類同定不可	四肢骨	m								1		1	1	1
ネズミ科	上顎I									1 /		1 / 0		
ネズミ科	脛骨	(p)d								1 /		1 / 0	2	1
ウシ	上顎M1/M2										1 /	1 / 0		
ウシ	大臼歯	fr		1								1		
ウシ	肩甲骨	関節部			/ 1		1 /					1 / 1		
ウシ	上腕骨	(d)									/ 1	0 / 1		
ウシ	橈骨	pfr		1 /			1 /					2 / 0		
ウシ	第3手根骨									/ 1		0 / 1		
ウシ	第4手根骨									/ 1		0 / 1		
ウシ	中手骨	w								/ 1		0 / 1		
ウシ	中手骨	p		1 /								1 / 0		
ウシ	中手骨	pfr		1 /								1 / 0		
ウシ	大腿骨	(p) 大腿骨頭				1 /						1 / 0		
ウシ	大腿骨	(p)+(g)					/ 1					0 / 1		
ウシ	大腿骨	dfr					/ 1					0 / 1		
ウシ	脛骨	(p)+(g)					/ 1					0 / 1		
ウシ	脛骨	(d)fr		1 /								1 / 0		
ウシ	踵骨	w								1 /		1 / 0		
ウシ	第3足根骨									1 /		1 / 0		
ウシ	中心第4足根骨						1 /				/ 1	1 / 1		
ウシ	中足骨	p					1 /					1 / 0		
ウシ	中手骨 / 中足骨	(d)					2				1	3		
ウシ	基節骨	w				1				2		3		
ウシ	中節骨	w	1									1		
ウシ	末節骨	p	1			1						2	31	2
ウシ（幼）	臼歯	fr		1								1		
ウシ（幼）	軸椎	fr		1								1		
ウシ（幼）	橈骨	(p)-(d)								1 /		1 / 0		
ウシ（幼）	中手骨	m(d)		/ 1								0 / 1		
ウシ（幼）	大腿骨	(p)-(d)					1 /					1 / 0		
ウシ（幼）	大腿骨	m			1							1		
ウシ（幼）	脛骨	(p)-(d)								/ 1		0 / 1		
ウシ（幼）	踵骨			1 /						1 /		1 / 0		
ウシ（幼）	中足骨	(p)-(d)								1 /		1 / 0		
ウシ（幼）	基節骨	(p)-d								2		2		
ウシ（幼）	中節骨	(p)-d								1		1	13	1
ウマ	下顎骨	表1参照								1 / 1		1 / 1		
ウマ	下顎I									1 /		1 / 0		
ウマ	肩甲骨	関節部									/ 1	0 / 1		
ウマ	橈骨	p							1 /			1 / 0		
ウマ	基節骨	w				1						1	6	1
ウシ／ウマ	下顎骨	fr								1		1		
ウシ／ウマ	頸椎	棘突起 fr		1						1		2		
ウシ／ウマ	胸椎									1	1	2		
ウシ／ウマ	胸椎	棘突起 fr								1		1		
ウシ／ウマ	椎骨	椎体								3		3		
ウシ／ウマ	椎骨	椎体 fr		5						2		7		
ウシ／ウマ	椎骨	棘突起		1								1		
ウシ／ウマ	尺骨	滑車切痕 fr					/ 1					0 / 1		
ウシ／ウマ	手根／足根骨									1		1		
ウシ／ウマ	肋骨	p		1								1		
ウシ／ウマ	肋骨	p-m	1									1		
ウシ／ウマ	肋骨	(p)-m		2								2	23	-
合計			3	20	2	4	12	3	1	32	10	87	87	10



第 72 図　中増遺跡脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の組成（ネズミ科を除く）

図版 1

1 ハタ科 方骨L［35］, 2 ハタ型腹椎［28］, 3～4 アオブダイ属（3上咽頭骨R［61］, 4歯骨R［89］）, 5 モンガラカワハギ科舌顎骨R［56］, 6ウミガメ頂骨板［2］, 7～10ウシ（7上顎M1/M2 L［15］, 8肩甲骨L［58］, 9肩甲骨R［76］, 10上腕骨R［26］）. ［ ］は資料番号（第44～47表参照）. スケールバーは1cm.

図版 2

1～7ウシ（1中手骨R［72］, 2中手骨L［35］, 3脛骨R［59］, 4大腿骨R［55］, 5大腿骨L［55］, 6中心第4足根骨L［55］, 7中足骨L［55］）.
［　］は資料番号（第44～47表参照）. スケールバーは 1cm.

図版 3

1～4ウシ（1踵骨L［87］, 2基節骨［72］, 3中節骨［29］, 4末節骨［31］）, 5～6ウシ／ウマ（5肋骨［32］, 6胸椎［25］）.
［ ］は資料番号（第44～47表参照）. スケールバーは1cm.

図版 4

1～3ウマ（1下顎骨L+R［73］, 2橈骨L［81］, 3肩甲骨R［7］）.
［　］は資料番号（第44～47表参照）. スケールバーは 1cm.

第Ⅴ章　まとめ

中増遺跡は，段丘上に位置する中世を主体とした集落遺跡である。遺跡の総面積は約23,500m²であり，平成23～24年度にかけて遺跡のおおよそ半分である9,500m²の調査を行った。

検出した遺構は，掘立柱建物跡15基，土坑９基，焼土跡11基，溝状遺構２条，ピット315基である。遺物は，龍泉窯系青磁を中心にピロースクタイプ白磁，石器，鉄製品，銅製品のほか，自然遺物として，オオムギ，ウシ，ウマ，貝などが出土した。遺物の出土状況から 14世紀後半～15世紀前半を中心とした遺跡と考えられる。土坑９号出土炭化材の放射性炭素年代測定結果では，補正年代500±20BPの値を得ており，遺物から考えられる遺跡の時期とほぼ一致している。

検出した遺構・遺物について，以下にまとめたい。

A地区

（１）遺構

１．掘立柱建物跡

10棟の掘立柱建物跡を検出した。そのうち，７棟は長方形を呈する４本柱建物跡であった。残りの３棟は１×３間・２×２間・３×３間の掘立柱建物跡である。

検出した４本柱建物跡は，現在島内でみられる高倉の構造に類似しており，倉庫的な用途である可能性が高い。出土遺物や埋土・建物軸方向などから，遺跡内において母屋と倉庫といったセット関係があった可能性が高い。

なお，掘立柱建物跡２号と３号は，出土遺物の接合状況から同時期に展開していた遺構と考えられる。また，掘立柱建物跡９号・土坑６号・溝状遺構１号も，出土遺物の接合状況から同時期に展開していた遺構と考えられる。

２．土坑

合わせて９基検出したが，すべてA地区で見つかっている。概して不定型なものや用途不明のものが多い。土坑２号・３号は，食用の貝や獣骨などが他の遺構と比べ多く出土していることなどから，廃棄土坑であった可能性がある。

土坑４号と９号は大型の不定形の土坑であるが，溝状遺構に隣接していることから，溝状遺構と同様に区画としての意図，もしくは排水路的な用途に用いられた可能性がある。

土坑４号・７号・９号・溝状遺構２号は，遺物の接合状況から同時期に展開していた遺構であると考えられる。

３．焼土跡

９基の焼土跡を検出した。焼土跡は，遺跡内に点在して見つかる傾向がみられた。

焼土跡１～４号は堆積状況や形状などから，炭窯として使われた可能性が高い。５号～８号も土層の堆積状況から同様の用途の可能性があるが，概して掘り込みが浅い。焼土跡９号は形状から炉跡ではないかと考えられる。

４．溝状遺構

溝状遺構は２条検出した。いずれの遺構も段丘の縁辺部に配置されている。これら溝状遺構の内側に，掘立柱建物跡や土坑・焼土跡・ピットなどの遺構が集中して見つかることから区画を意図して作られた可能性がある。

（２）遺物

１．貿易陶磁器

A地区からは，ピロースクタイプ白磁椀・龍泉窯系青磁椀Ⅳ類・Ⅴ類・褐釉陶器壺が出土している（第49表）。これらの陶器が流通する 14世紀後半～15世紀前半は琉球が博多と活発な交易を始める時期にあたり(田中2013)，琉球から北上する流通過程で喜界島に寄港し，交易活動を行っていた可能性を窺わせる資料と言える[註1]。

２．銅製品

焼土跡４号の1層から菊座と思わる銅製品が１点出土した。磨滅しており，本来の大きさや文様は明瞭ではないが，表面に鍍金が施されている。金が施された製品の出土は，喜界島では初見となる。菊座は甲冑などの武具の金具であるが，調度品として使われた可能性もある[註2]。

同様の資料が，沖縄県の首里城跡・真珠道跡の包含層より出土している。

４．鉄製品

掘立柱建物跡８号・土坑９号・ピットなどから出土し図化した７点のほかにも掘立柱建物跡９号・土坑９号・ピットなどから６点出土している。いずれも破片であり，残存部からは種類を特定することが難しかった。しかしながら，その形状から鉄鍋などの破片である可能性がある[註3]。

これらの鉄製品のほか，溝状遺構１号などから出土している椀型滓や土坑・焼土跡の土壌サンプルのほとんどから鍛造剥片・粒状滓が検出されることから，この周辺で鍛冶などを行う場所があった可能性がある。

５　自然遺物

土壌サンプルより，オオムギやアワ・イネが検出されている。これら栽培植物は喜界町域久遺跡群の土壌サンプルからも確認されている。中でも10世紀代の土坑墓と考えられる大

ウフ遺跡土坑墓1号の土壌サンプルからはイネの炭化物が検出されており，少なくともこの頃から栽培食利用が行われていた可能性が示唆されている(高宮・千田2014)。中増遺跡の土壌サンプルでは定形の種子が少なかったものの，やや大型のオオムギが主に利用されていた可能性が高いことが分析結果から見受けられる。

脊椎動物遺体は，主にウシが多く見つかっているが，そのほかウマやウミガメ・アオブダイやハタ科などの魚類も出土している。

ウシ・ウマは和早地遺跡・大ウフ遺跡・半田遺跡などの13世紀～15世紀頃と考える遺跡からの出土が報告されており，この頃に喜界島にウシやウマが持ち込まれた可能性がある。

ウマに関しては，喜界島には昭和30年ごろまで「キカイウマ」と一般に呼ばれる小型の在来馬が存在し，農耕や運搬など人と密接な関係があったことが知られている（喜界町2000）。キカイウマは現在鹿児島県の天然記念物である日本の在来馬「トカラウマ」の祖先とされているが，その起源は不明のままである。中増遺跡や大ウフ遺跡などで見つかっているウマと「キカイウマ」との関係は不明であるが，今後，科学分析や考古資料の蓄積によってキカイウマの起源がわかってゆくことに期待したい。

B地区

（1）遺構

1．掘立柱建物跡

5棟を検出した。そのうち3棟は1×1間の方形を呈する4本柱建物跡である。残りの2棟は2×2間と4×3間であり，後者は庇付の建物になる可能性がある。

A地区と同様に4本柱建物跡は倉庫的な用途である可能性が高いが，A地区の平面プランは長方形であることに対し，B地区は方形であることが特徴である。

2．焼土跡

2基の焼土跡を検出した。焼土跡10号は形状から炉跡と考えられる。焼土跡11号はその用途を明確につかむことができなかった。

（2）遺物

1．縄文時代の遺物

縄文時代の遺物が包含層より出土した。出土した中で最も古いものは，表土から出土した縄文時代後期と考えられる面縄東洞式である。その他，Ⅲ・Ⅳ層から面縄西洞式や伸原式など，後期～晩期と考えられる土器が出土している。

遺構は検出しなかったが，中増遺跡付近に縄文時代の遺構が広がっている可能性がある。

2．古代・中世の遺物

A地区で多数みられた龍泉窯系青磁は出土していない。この時期のものと考えられるものは，カムィヤキ4点と褐釉陶器が1点，滑石混入土器が3点と出土量はかなり少ない（第49表）。

まとめ

A地区の所在する標高約18mの段丘上には，溝状遺構を配置し，その内側に2×2間などの建物と1×1間の倉庫を配置するといった建物構成を持つ集落があったと考えられる。遺物からは，龍泉窯系青磁が主に出土していることや，染付など16世紀以降と考えられる遺物は出土していないことから，この遺構群は14世紀後半～15世紀前半までと想定される。

B地区で検出した掘立柱建物跡は，遺物の出土量が少ないことから時期は検討が必要である。ただし，隣接するA地区で多数見られる龍泉窯系青磁が見られないことや，わずかであるがカムィヤキ・滑石混入土器が出土していることを考慮すれば，A地区よりよりも古くなる可能性がある。

1×1間の4本柱建物跡は，町内城久遺跡群の調査で確認しており，方形プランと長方形プランは時期差があると考えられている（喜教委2013）。

現在，中増遺跡南側やその周辺の遺跡である川寺・川尻・崩リ遺跡の本調査を行っており，資料の増加が見込まれている。今回の調査では，調査面積が少なく，周辺の状況も判然としないため，遺跡の推移や傾向に関しては改めて検討してゆきたい。

註1）アジア水中考古学研究所理事田中克子氏のご教授による。

註2）沖縄県教育庁文化財課山本正昭氏のご教授による。

註3）愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター長村上恭通氏のご教授による。

参考文献

伊仙町教育委員会　2005　カムィヤキ古窯跡群Ⅳ　伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(12)

沖縄県埋蔵文化財センター　2009　首里城跡・真珠道跡　沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第51集

喜界町　2000　『喜界町誌』

木下尚子編　2009「13～14世紀の琉球と福建」　平成17～20年度科学研究費補助基盤研究(A)(2)研究成果報告書　研究課題番号17251007　13～14世紀海上貿易から見た琉球成立要因の実証的研究―中国福建省を中

心に―　熊本大学文学部
瀬戸哲也ほか　2007　「沖縄における貿易陶磁研究―14～16世紀を中心に―」『沖縄埋文研究５』沖縄県立埋蔵文化財センター
高宮広土・千田博之　2014　「琉球列島先史・原史時代における植物食利用－奄美・沖縄を中心に」『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』六一書房
田中克子　2013　「韓国泰安馬島海域出土中国陶磁器から見た東アジア海域海上貿易の一様相－博多遺跡群出土の中国陶磁器との比較を通じて－」『泰安馬島出水中國陶磁器』

第 49 表　中増遺跡出土遺物一覧

	遺構名	層位	土器	土師器坏・塊	カムイヤキ	龍泉窯系青磁	ピローズクロ磁	中世白磁	褐釉陶器	土製品	粘土塊	滑石混入土器	滑石製石鍋	石器	軽石	銅製品	鉄製品	鉄滓	輪の羽口	貝	総計
A地区	掘立１号	一括						1			3			3				2			9
	掘立２号	一括				4			1		3			2	1			2	1		14
		I				3															3
	掘立３号	一括							1		5			1				1			8
		II				2	1			1	1			1				1		1	8
	掘立４号	一括	1			2					2			3			1	1			10
	掘立５号	一括	2			1					1			1	1				1		7
	掘立７号	一括												1	1						2
	掘立８号	一括												2			1	1			4
	掘立９号	一括	5			16					19			12	4			11		5	72
		I				7					4			21	1			2		2	37
		II				1					1			5	3			3			13
		IV															1				1
	土坑１号	一括			1						2			3						3	9
		I					1							38	1					7	47
		IV				1								1			1				3
	土坑２号	一括	1																	9	10
	土坑３号	一括	1			1			1		4									14	21
	土坑４号	一括	1			4								4	3					9	21
		I	4			13								3							20
		II	1			6		1	1					4	1					20	34
		III				2									1						3
	土坑６号	一括				1			2					1							4
		I							2					1							3
	土坑７号	I									2			1					1	3	7
	土坑９号	一括						1						6							7
		I				5								1	1						7
		II	1			33		2			22			2	6		5			2	73
		III				1														12	13
		IV												1							1
	焼土跡１号	一括				3					10			2							15
		I				1					1							1			3
	焼土跡２号	一括				1								2							3
	焼土跡４号	一括	1																		1
		I														1					1
	焼土跡６号	一括												1							1
	焼土跡７号	I					1														1
	溝状遺構１号	I	4		1	15	2	1	6		2			29	13			2		12	87
		II	3			2			2		3			5						13	28
	溝状遺構２号	一括	1			3		1	1		26										32
		I				5	2		2		2	1		5							17
		II				17			8		13			6	1						45
		III				2					7			2	1			1			13
		IV				2					2			1	1						6
	ピットA	一括	1		2	14	3	1	4	5	29		1	26	4		4	1		3	98
	表採	一括	9			4			1		1			17	2					5	39
	包含層	I	5		4	8			4		3	2		18				1		1	46
A地区小計			41		8	180	10	8	36	6	168	3	1	232	46	1	13	30	3	121	907
B地区	掘立 11 号	一括			1							1									2
	掘立 13 号	一括										1									1
	掘立 15 号	一括	5							3											8
	ピットB	一括	1							2				4						1	8
	包含層	I	8	1	2				1	1	2			4	1					1	21
		II	4		1					1		1		3							10
		III	361											65							426
		IV	54							3				20							107
B地区小計			463	1	4				1	7	5	3		96	1					2	583
総計			504	1	12	180	10	8	37	13	173	6	1	328	47	1	13	30	3	123	1490

基礎資料

本遺跡の出土遺物については、小片が多いが可能な限り分類し一覧表を作成した。掘立建物跡や土坑・焼土跡・溝状遺構・包含層出土の遺物については、第Ⅴ章にある一覧表（第49表）を参照されたい。ここでは、ピット内出土遺物の一覧を下記の表（第50・51表）にまとめることとする。

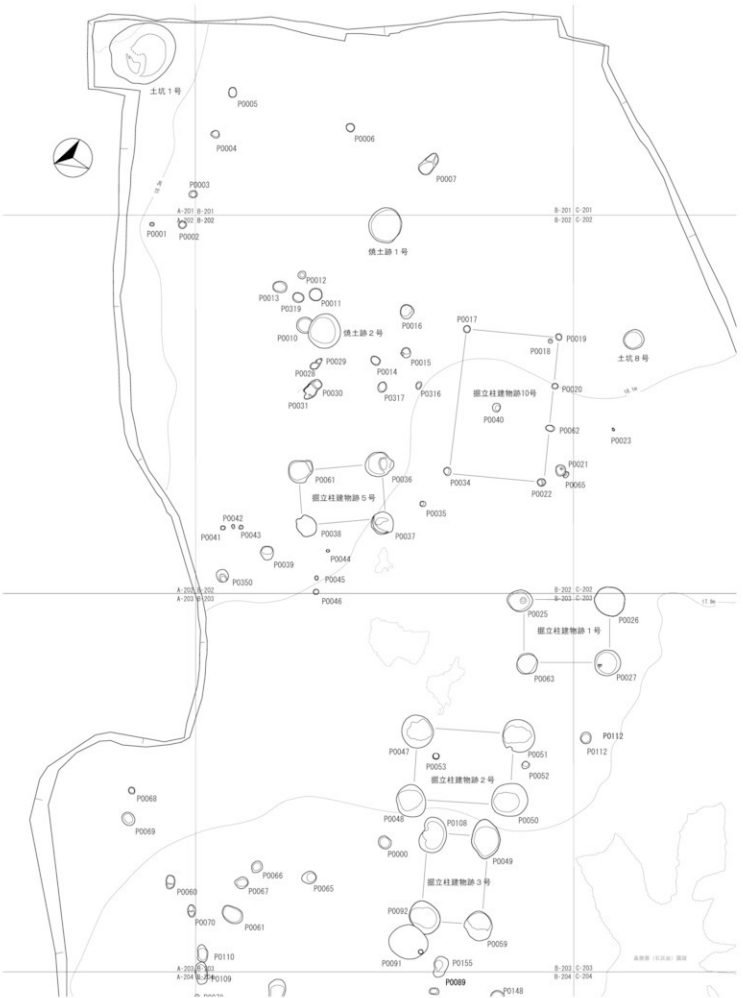
なお、詳細遺構配置図（第73~82図）はS=1:100 で作成している。

第 50 表　ピット出土遺物（1）

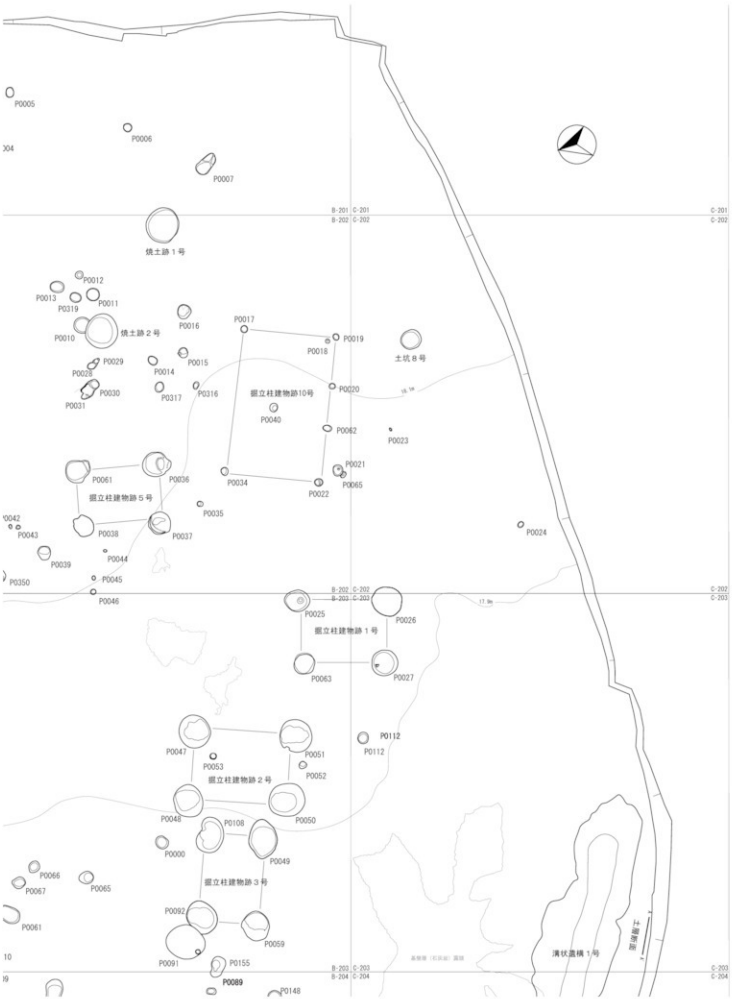
遺構名	グリッド	出土遺物	備考
P0007	B-201	石器（1）、粘土塊（1）	
P0010	B-202	石器（4）	
P0012	B-202	石器（1）	
P0014	B-202	白磁（1）、石器（3）、貝（3）	
P0015	B-202	土器（1）、石器（2）	
P0025	B-203	石器（1）、粘土塊（2）、鉄滓（2）	掘立柱建物1号（P1）
P0027	C-203	石器（1）	掘立柱建物1号（P3）
P0036	B-202	軽石（1）	掘立柱建物5号（P2）
P0037	B-202	龍泉窯系青磁（1）、鞴の羽口（1）、粘土塊（1）	掘立柱建物5号（P3）
P0047	B-203	堝釉陶器（1）、粘土塊（1）	掘立柱建物2号（P1）
P0048	B-203	龍泉窯系青磁（3）、石器（2）、軽石（1）、粘土塊（1）、鉄滓（1）	掘立柱建物2号（P4）
P0049	B-203	堝釉陶器（1）、石器（1）、粘土塊（3）	掘立柱建物3号（P1）
P0050	B-203	龍泉窯系青磁（2）、鞴の羽口（1）、粘土塊（1）、鉄滓（1）	掘立柱建物2号（P3）
P0051	B-203	龍泉窯系青磁（2）	掘立柱建物2号（P2）
P0057	A-204	軽石（2）	
P0060	A-203	滑石製石鍋（1）	
P0061	B-202	土器（2）、石器（1）	掘立柱建物5号（P1）
P0063	B-203	白磁（1）、石器（1）、粘土塊（1）	掘立柱建物1号（P4）
P0065	B-203	白磁（1）	
P0071	B-204	粘土塊（1）	
P0072	B-204	石器（2）	
P0073	A-204	石器（1）	
P0076	A-204	龍泉窯系青磁（1）、堝釉陶器（2）	
P0077	A-204	龍泉窯系青磁（3）、白磁（1）、石器（1）、粘土塊（3）	
P0078	A-204	石器（3）、粘土塊（3）	
P0079	B-205	龍泉窯系青磁（2）、石器（3）、粘土塊（2）、鉄製品（1）	掘立柱建物4号（P3）
P0080	C-205	土器（1）	掘立柱建物4号（P2）
P0085	B-204	龍泉窯系青磁（1）	
P0089	B-203	石器（1）	
P0091	B-203	石器（1）	
P0092	B-203	龍泉窯系青磁（1）、ピロースクタイプ白磁（1）、石器（1）、粘土塊（1）、粘土塊（11）、貝（1）	掘立柱建物3号（P3）
P0098	C-302	滑石混入土器（1）	掘立柱建物13号（P3）
P0100	C-302	石器（1）	
P0101	C-302	粘土塊（2）、貝（1）	
P0107	D-302	土器（1）	
P0108	B-203	龍泉窯系青磁（1）、粘土塊（1）、鉄滓（1）	掘立柱建物3号（P4）
P0109	A・B-203	粘土塊（1）	

第 51 表　ピット出土遺物（2）

遺構名	グリッド	出土遺物	備考
P0111	A-204	龍泉窯系青磁（2）、堝釉陶器（1）、石器（2）、粘土塊（5）、鉄製品（1）、鉄滓（1）	
P0122	D-303	土器（1）	掘立柱建物15号（P16）
P0127	E-303	石器（1）	
P0141	B-204	石器（1）	
P0141	B-204	鉄製品（1）	
P0144	B-204	龍泉窯系青磁（3）、粘土塊（2）、軽石（1）	
P0147	B-205	白磁（1）	
P0156	B-204	龍泉窯系青磁（1）、堝釉陶器（1）、粘土塊（1）	
P0159	B-205	石器（1）、軽石（1）	掘立柱建物7号（P3）
P0172	B-205	龍泉窯系青磁（1）	
P0173	B-205	粘土塊（5）、軽石（1）	
P0174	B-205	カムイヤキ（1）、粘土塊（2）	
P0191	B-204	石器（2）	掘立柱建物8号（P1）
P0195	B-204	鉄製品（2）	
P0203	B-204	粘土塊（1）	
P0205	C-205	石器（1）	
P0221	C-205	石器（1）	
P0224	C-204	龍泉窯系青磁（1）、石器（1）	
P0241	B-205	粘土塊（6）	
P0245	B-205	粘土塊（1）	
P0247	E-303	土器（2）	掘立柱建物15号（P1）
P0250	D-303	土器（1）	掘立柱建物15号（P15）
P0260	D-303	粘土塊（3）	掘立柱建物15号（P10）
P0262	D-303	カムイヤキ（1）	掘立柱建物11号（P3）
P0268	D-303	滑石混入土器（1）	掘立柱建物11号（P4）
P0285	B-205	粘土塊（1）	
P0286	B-204	石器（1）	
P0303	D-303	土器（1）	掘立柱建物15号（P19）
P0307	C-302	石器（1）	
P0312	A-204	龍泉窯系青磁（1）	
P0350	B-202	石器（1）	
SK-4		青磁（2）、土器（2）、粘土塊（7）、貝（3）	掘立柱建物9号（P3）
SK-5		青磁（1）、石器（4）、軽石（5）、鉄製品（1）、鉄滓（1）、粘土塊（2）、貝（2）、炭化種子（オオムギ）	掘立柱建物9号（P4）
SK-7		青磁（10）、堝釉陶器（1）、土器（2）、粘土塊（8）、鉄滓（11）、軽石（1）、貝（3）、獣骨（4）、炭化種子（オオムギ）	掘立柱建物9号（P1）
SK-12・13・14		青磁（6）、石器（10）、鉄（4）、粘土塊（2）	掘立柱建物9号（P2）

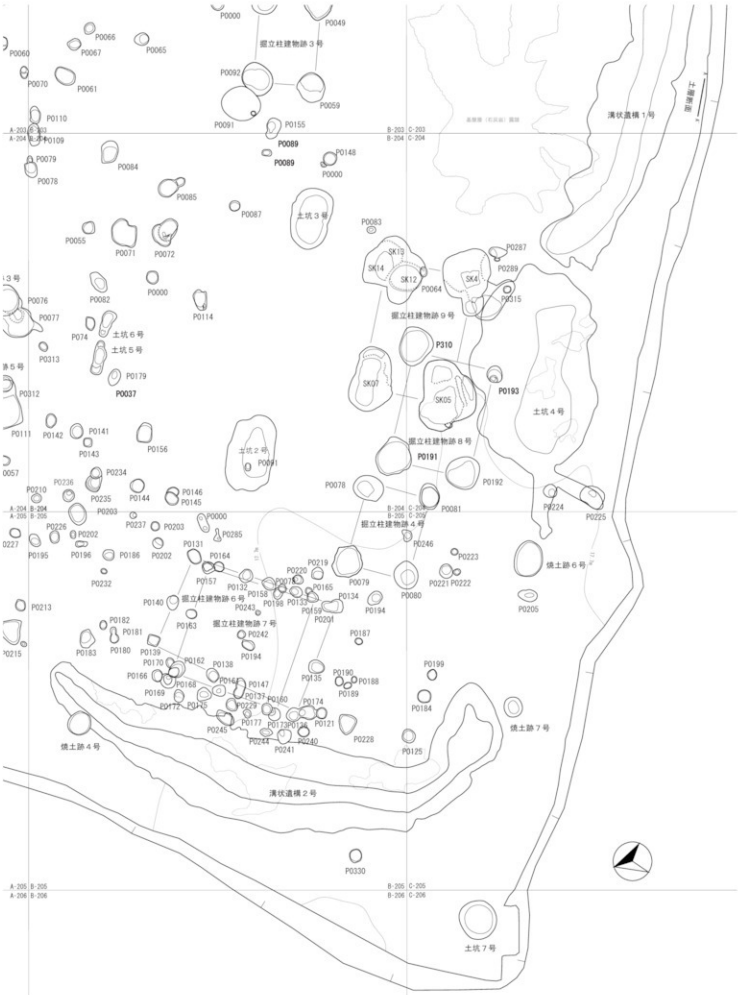


第 73 図　A 地区詳細遺構配置図（１）

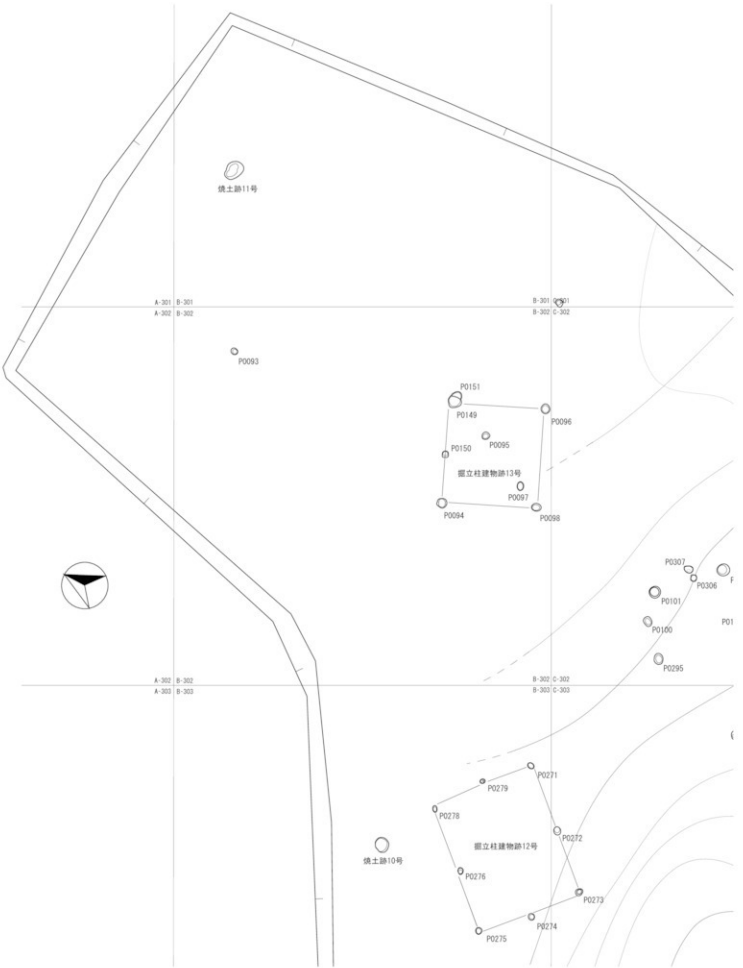


第 74 図　A 地区詳細遺構配置図（２）

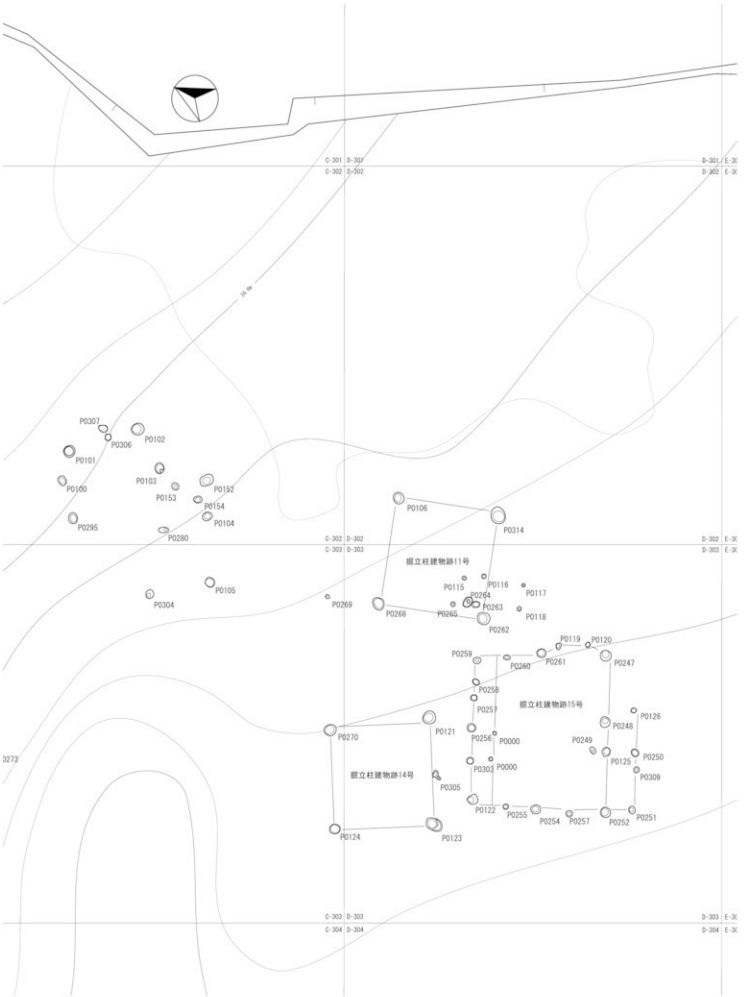
第 75 図　A 地区詳細遺構配置図（３）



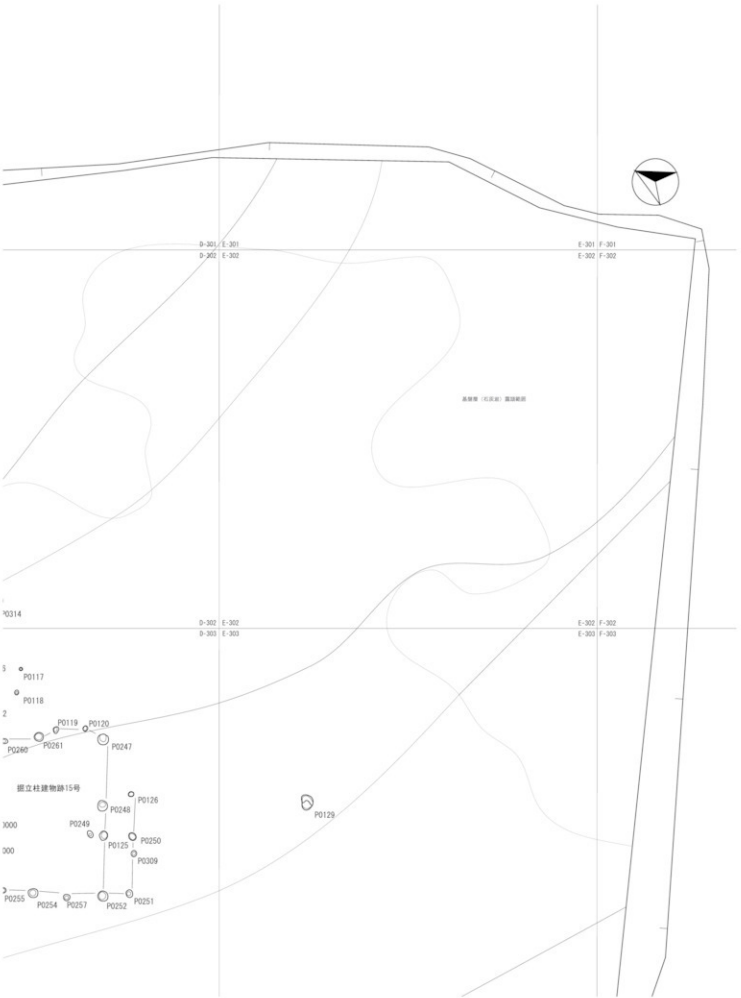
第 76 図　A 地区詳細遺構配置図（４）



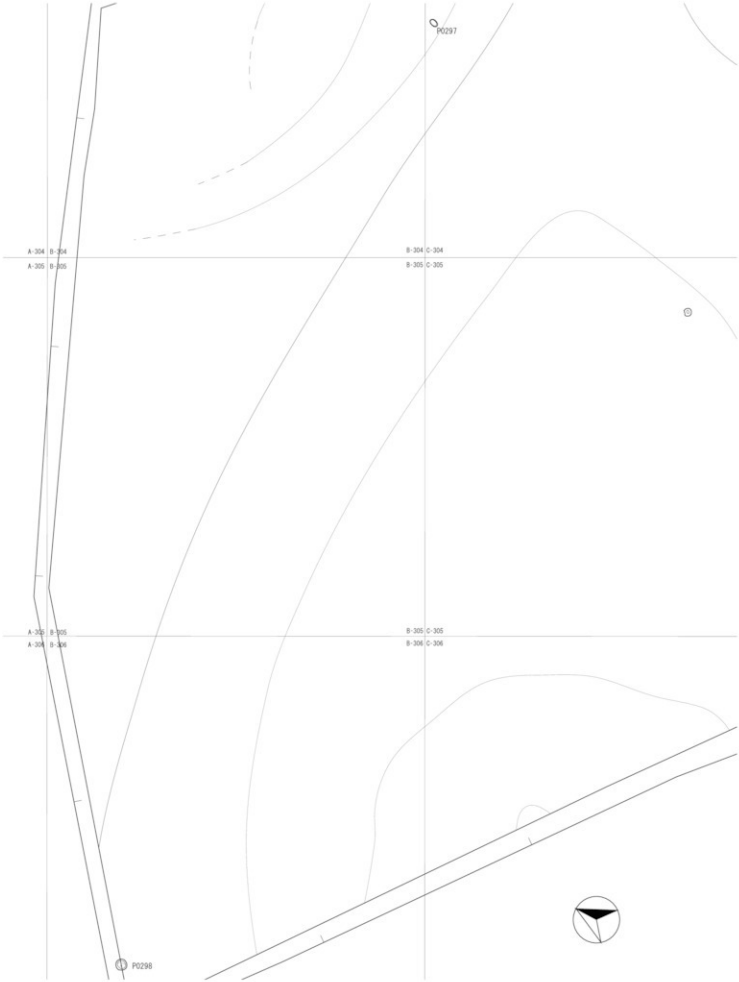
第77図　B地区詳細遺構配置図（1）



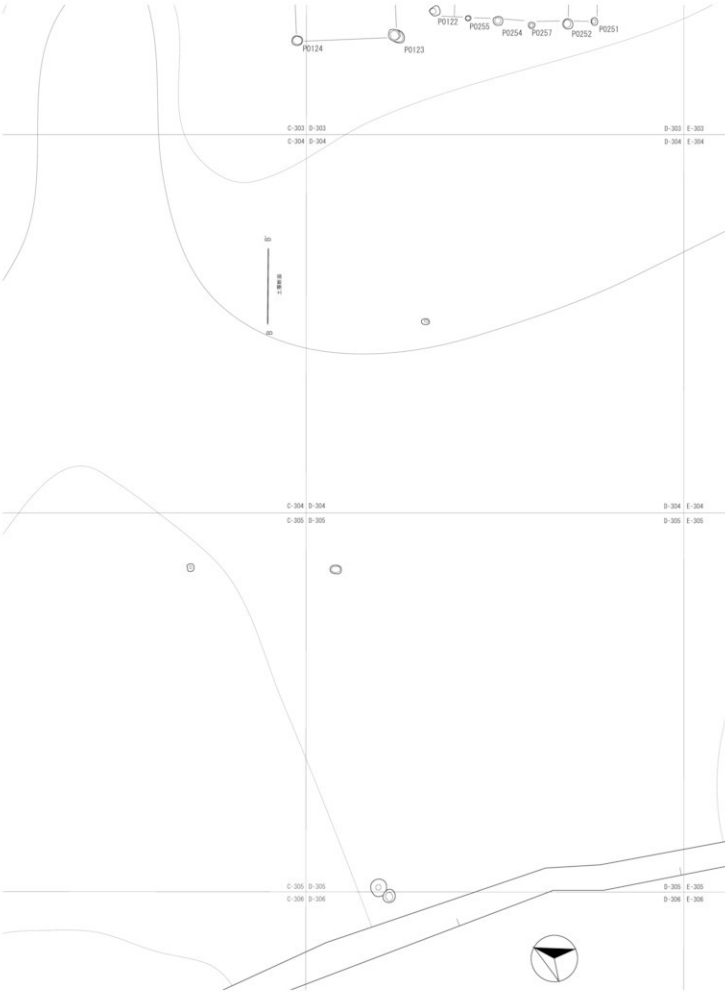
第 78 図　B 地区詳細遺構配置図（2）



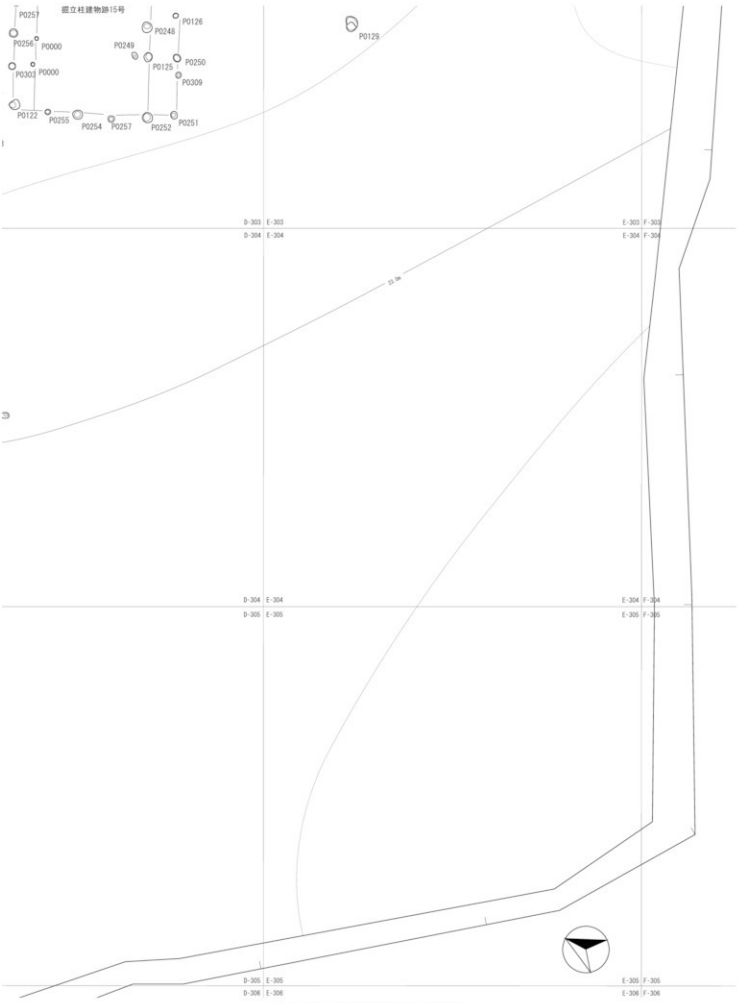
第 79 図　B 地区詳細遺構配置図（3）



第 80 図　B 地区詳細遺構配置図（4）



第81図　B地区詳細遺構配置図（5）



第 82 図　B 地区詳細遺構配置図（6）

写 真 図 版

中増遺跡空中写真

図版 2

A 地区空中写真

A 地区土層堆積状況

A 地区遺構検出状況

掘立柱建物跡 1 号

掘立柱建物跡 2 号

掘立柱建物跡 3 号

掘立柱建物跡 6 号

土坑 1 号検出状況

土坑 1 号土層堆積状況

土坑 4 号土層堆積状況

土坑 4 号獣骨出土状況

図版 4

土坑 7 号検出状況

土坑 7 号土層堆積状況

土坑 8 号土層堆積状況

土坑 9 号獣骨等出土状況

土坑 9 号土層堆積状況

焼土跡 1 号土層堆積状況

焼土跡 2 号土層堆積状況

焼土跡 4 号半裁状況

焼土跡 4 号銅製品出土状況

焼土跡 8 号検出状況

焼土跡 9 号土層堆積状況

溝状遺構 1 号検出状況

溝状遺構 1 号土層堆積状況

図版 6

溝状遺構 2 号検出状況（1）

溝状遺構 2 号検出状況（2）

溝状遺構 2 号土層堆積状況

溝状遺構 2 号完掘状況

P51 土層堆積状況

P72 獣骨出土状況

P91 土層堆積状況

作業風景

B 地区空中写真

B 地区土層堆積状況

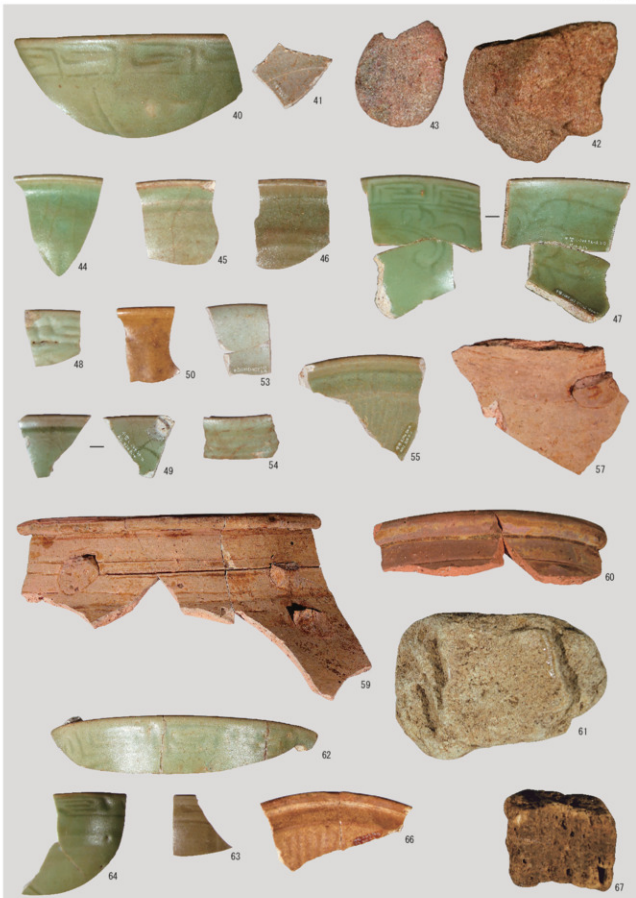
焼土跡 10 号検出状況

焼土跡 10 号土層堆積状況

焼土跡 11 号検出状況

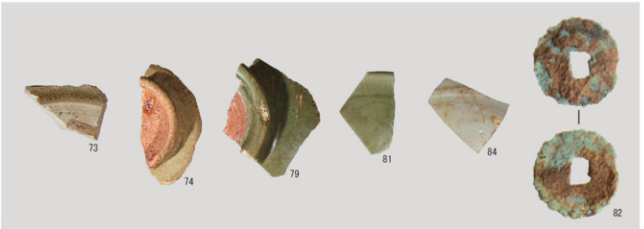
図版 8

A 地区掘立柱建物跡出土遺物



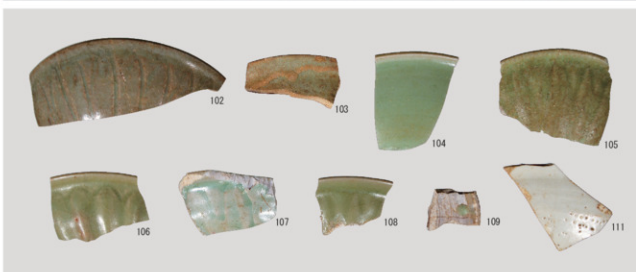
A 地区土坑出土遺物

図版 10



A 地区焼土跡出土遺物

A 地区溝状遺構 1 号出土遺物



A 地区溝状遺構 2 号出土遺物

A 地区ピット出土遺物（1）

図版 12

A 地区ピット出土遺物（2）

B 地区出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかましいせき
書名	中増遺跡
副書名	畑地帯総合整備事業（担い手育成型）手久津久地区に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	15
編集者名	松原信之　野崎拓司　澄田直敏　早田晴樹
編集機関	喜界町教育委員会
所在地	〒891-6292　鹿児島県大島郡喜界町湾 1746
発行年月日	西暦 2015 年 3 月 18 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
なかましいせき 中増遺跡	かごしまけんおおしまぐん 鹿児島県大島郡 きかいちょうおおあざ 喜界町大字 てくづくあざなかまし 手久津久字中増	465291	37-134	28° 29′ 25″	129° 93′ 62″	2009. 6. 10 ～ 2009. 11. 30	確認調査 200	畑地帯総合整備事業（担い手育成型）手久津久地区
						2011. 7. 1 ～ 2012. 3. 23	本調査 6, 500	
						2012. 4. 17 ～ 2012. 10. 15	本調査 2, 800	
							計 9, 500	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中増遺跡	集落	中世	掘立柱建物跡 15 棟，土坑 9 基，焼土跡 11 基，溝状遺構 2 条，ピット 315 基	龍泉窯系青磁，白磁，褐釉陶器，カムィヤキ，滑石混入土器，土器，石器，鞴の羽口，鉄製品，鉄滓，銅製品	調査後の遺跡については消滅している。

要　約

中増遺跡は，喜界島南西部の標高約 20m の段丘上に所在する。中世を主体とした集落遺跡である。畑地帯総合整備事業（担い手育成型）手久津久地区に伴い実施した平成 23 ～ 24 年度の調査では，掘立柱建物跡 15 基，土坑 9 基，焼土跡 11 基，溝状遺構 2 条，ピット 315 基を検出した。遺物は，龍泉窯系青磁を中心にピロースクタイプ白磁，石器，鉄製品のほか，自然遺物として，オオムギ，ウシ，ウマ，貝などが出土した。また，鍍金が施された銅製品も出土した。鍍金が施された製品の出土は喜界島では初見となる。遺物の出土状況から 14 世紀後半～ 15 世紀前半を中心とした遺跡と考えられる。

喜界町埋蔵文化財発掘報告書（15）
―畑地帯総合整備事業（担い手育成型）手久津久地区に伴う埋蔵文化財発掘報告書―

中増遺跡 Ⅰ

発　行　日　2015年3月18日
編集・発行　喜界町教育委員会
〒891-6292　鹿児島県大島郡喜界町湾1746
印　　刷　有限会社　奄美共同印刷
〒894-0021　鹿児島県大島郡名瀬伊津部町21-14